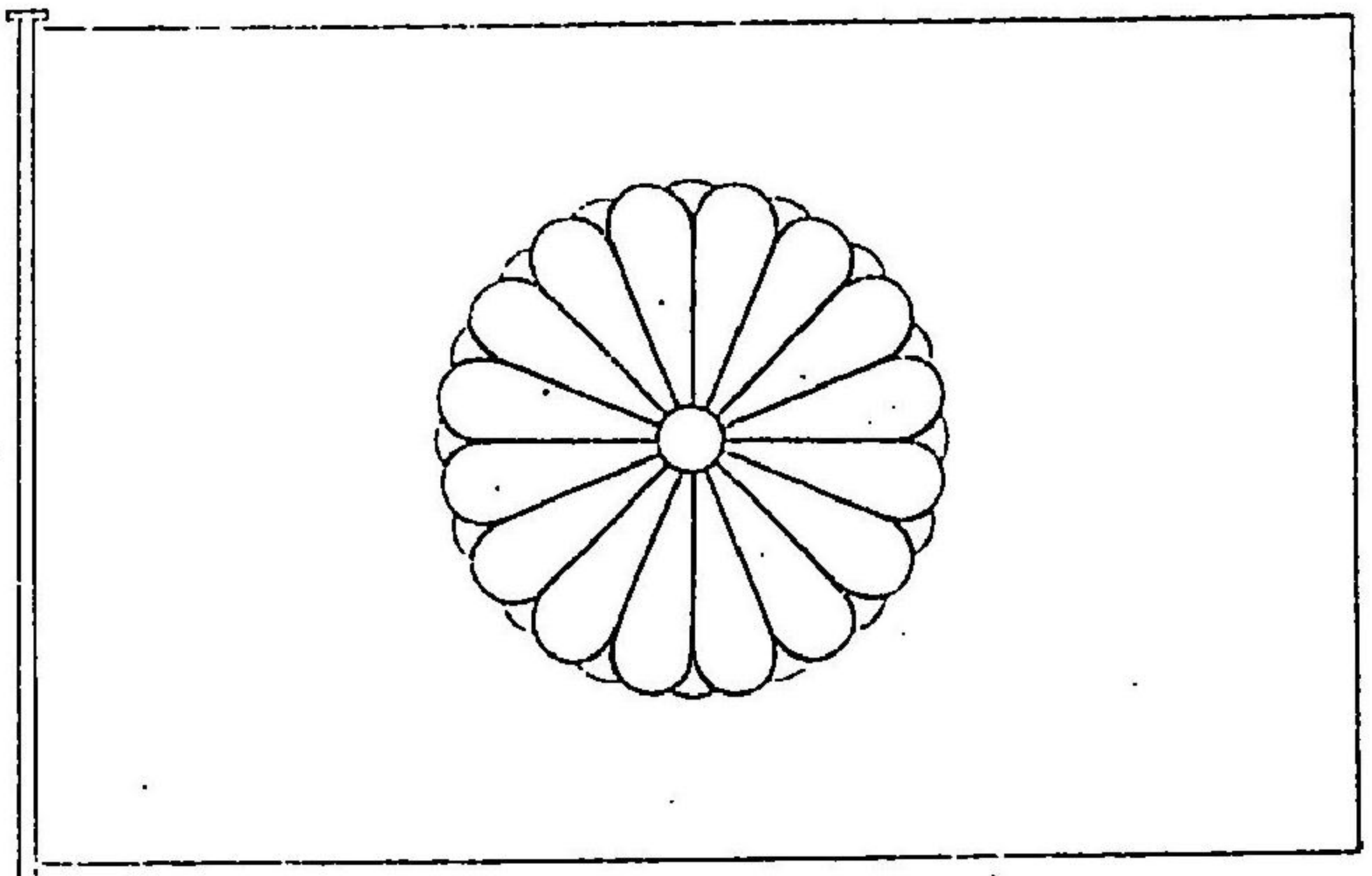


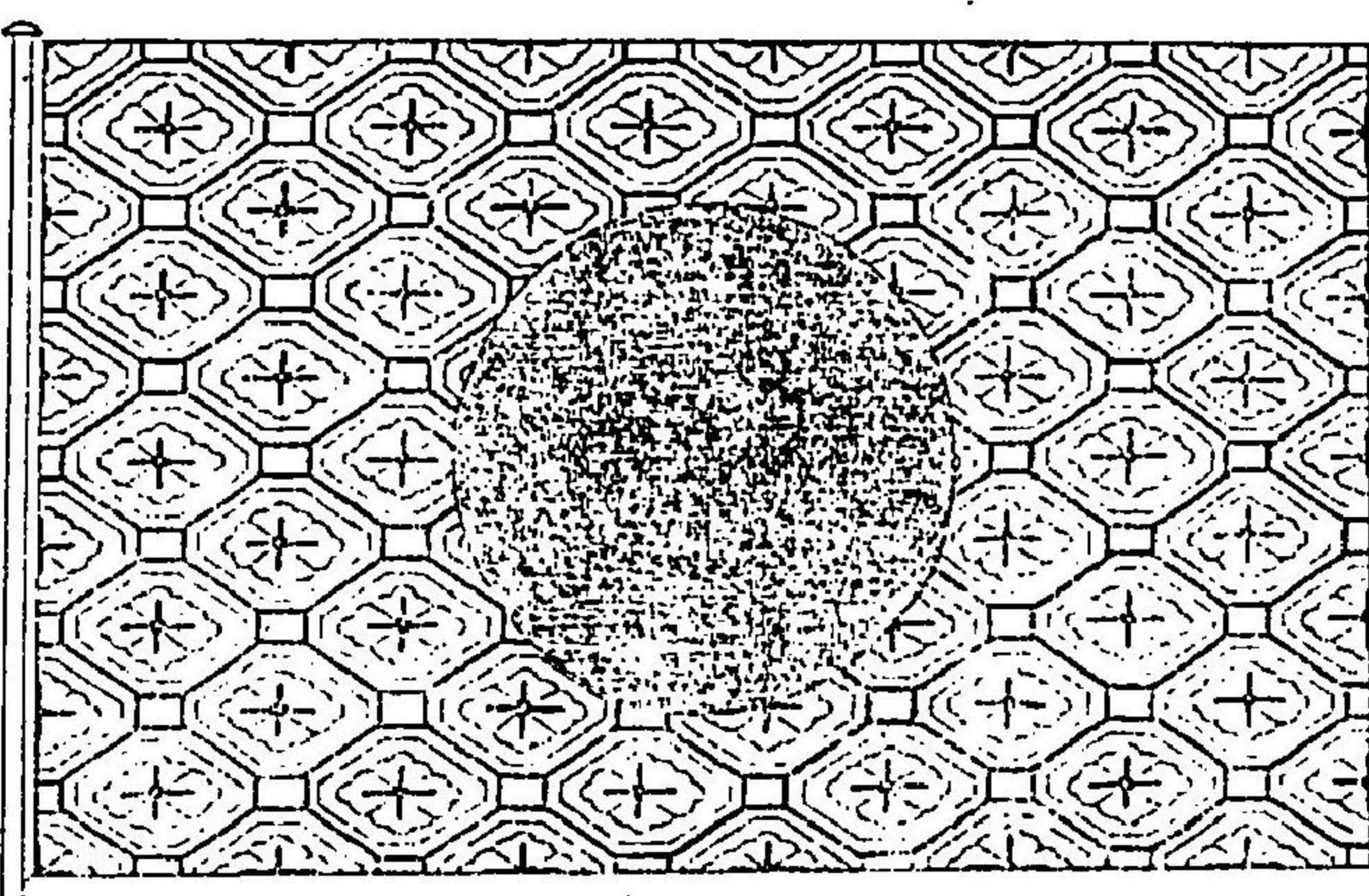
御旗 正改  
繒圖四十分ノ一  
以下皆然之



一 御旗 紅布菊御紋白  
縦七尺八寸横一丈一尺七寸  
但シ縦徑ハ横徑ノ三分ノ二  
菊御紋ノ徑ハ縦徑ノ七分五厘ト定ム

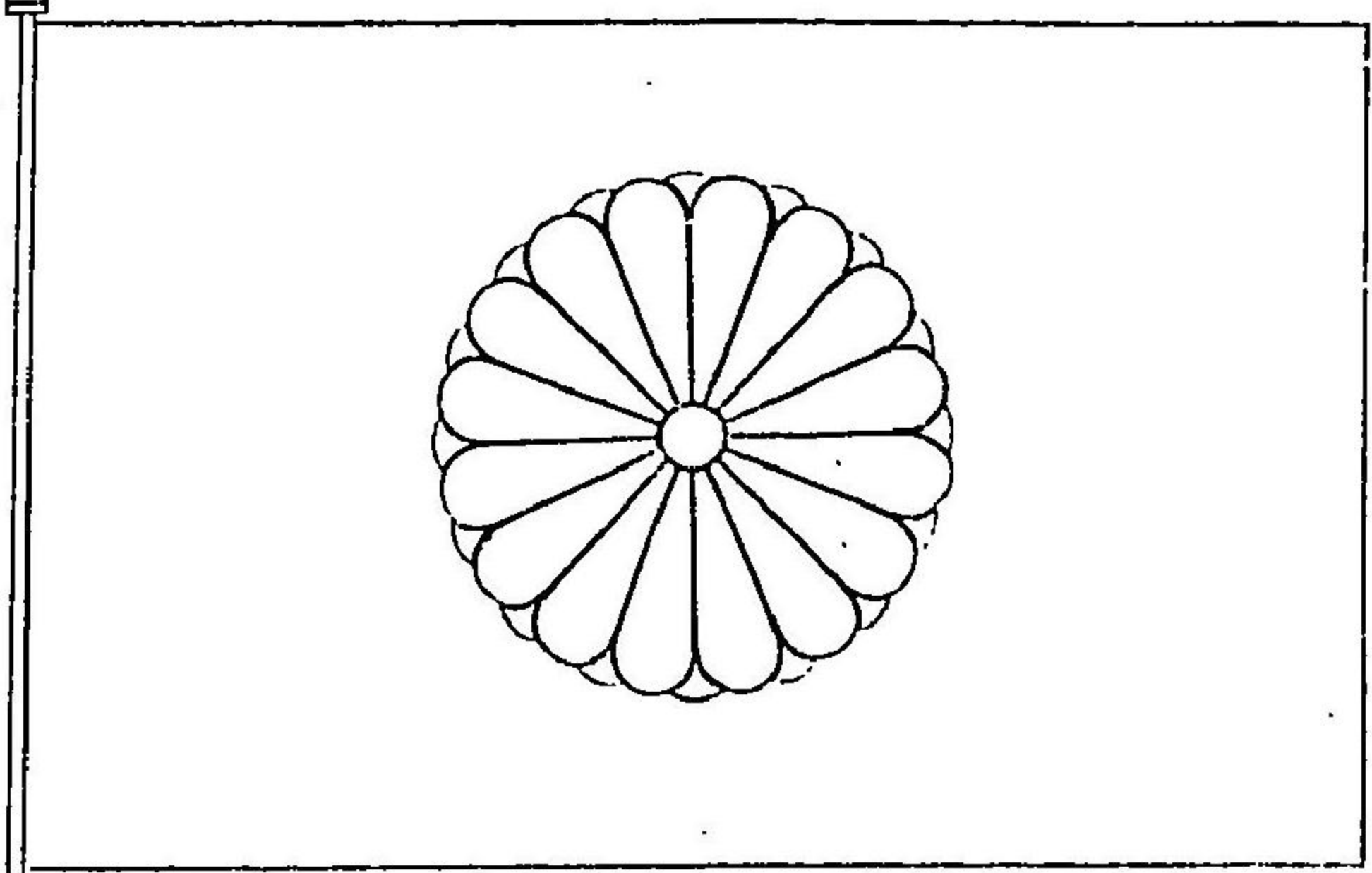
八年第百八十八號  
布告ヲ以テ改正

皇族旗



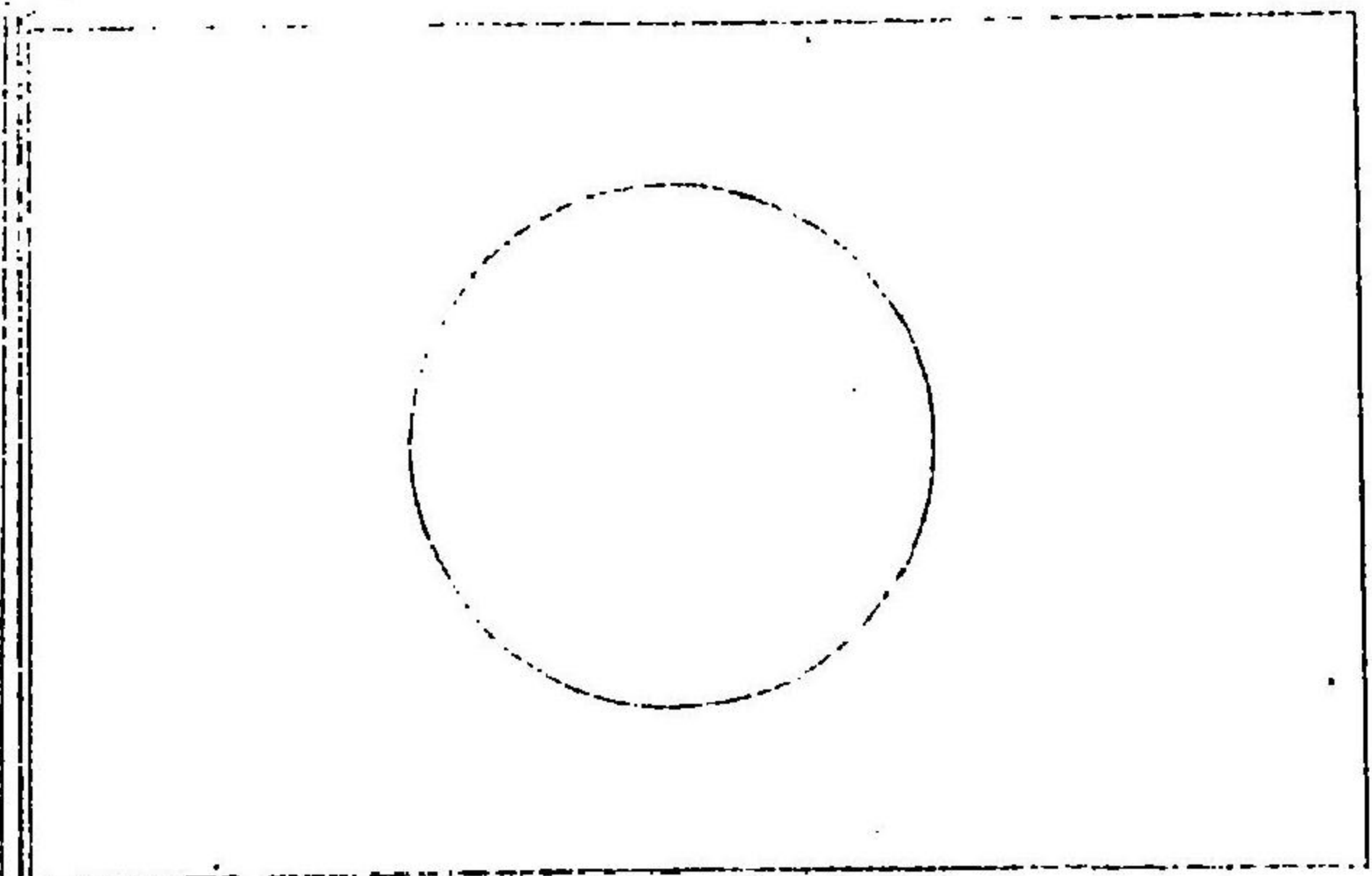
一 皇族旗 青地錦布紅日章  
縦横右ニ同シ

皇族旗 (改正)



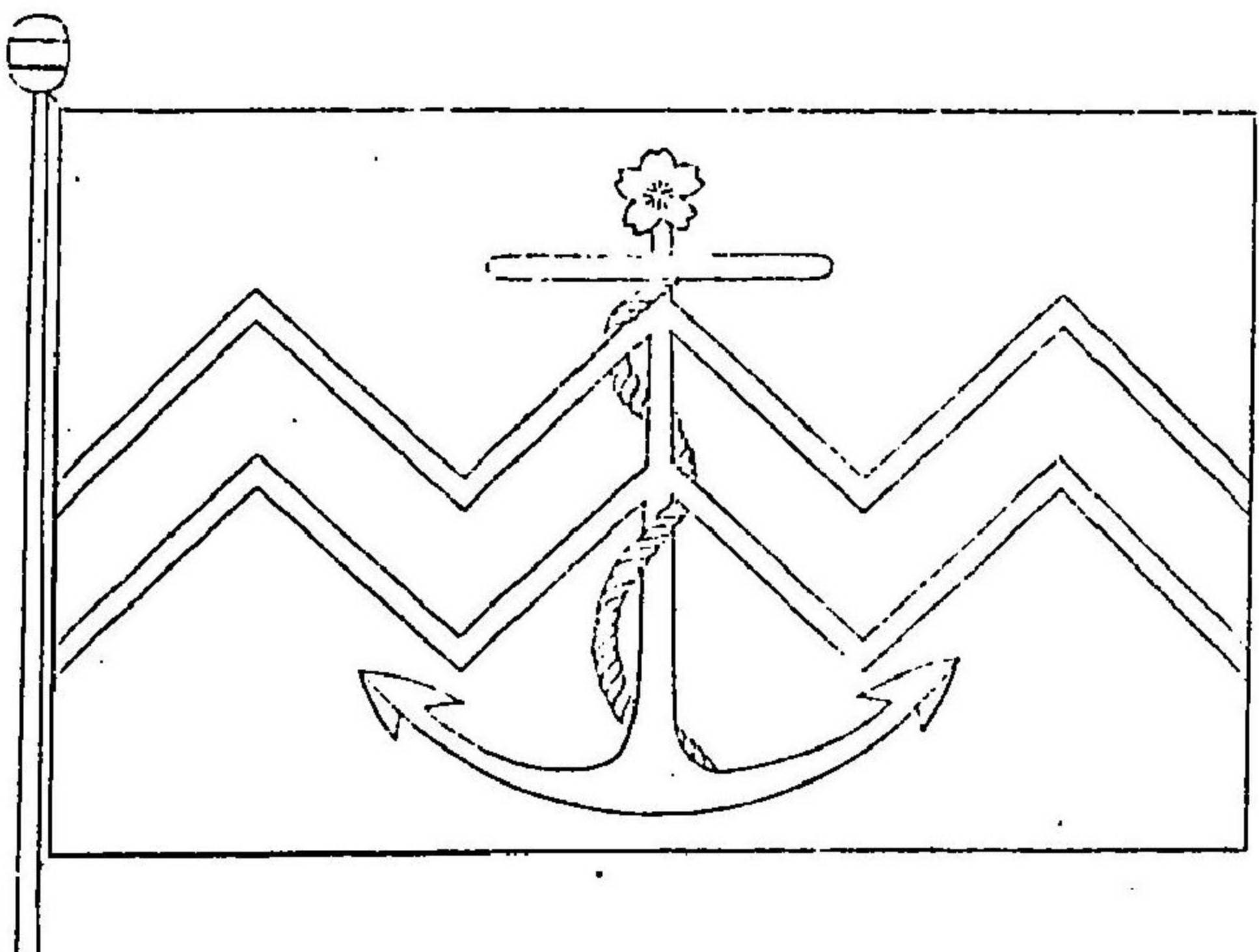
一 皇族旗 紺布菊御紋白  
縦横右ニ同シ

御國旗



一 御國旗 白布紅日章  
縦横右ニ同シ  
一 船首旗章 國旗ニ同シ  
縦六尺横八尺  
小艦ニ在テハ小ナル者ヲ用フ  
風雨或ハ大小艦ノ別ヲ以旗モ亦大小ノ  
差アリ縦横ノ比例ハ定法ニ從フヘシ

海軍旗



一海軍旗 白布紅錨紅山形二條錨ノ環樹花ノ狀ヲナス (繩ハ莖)

大縱一丈横一丈五尺

中縱七尺八寸横一丈一尺七寸

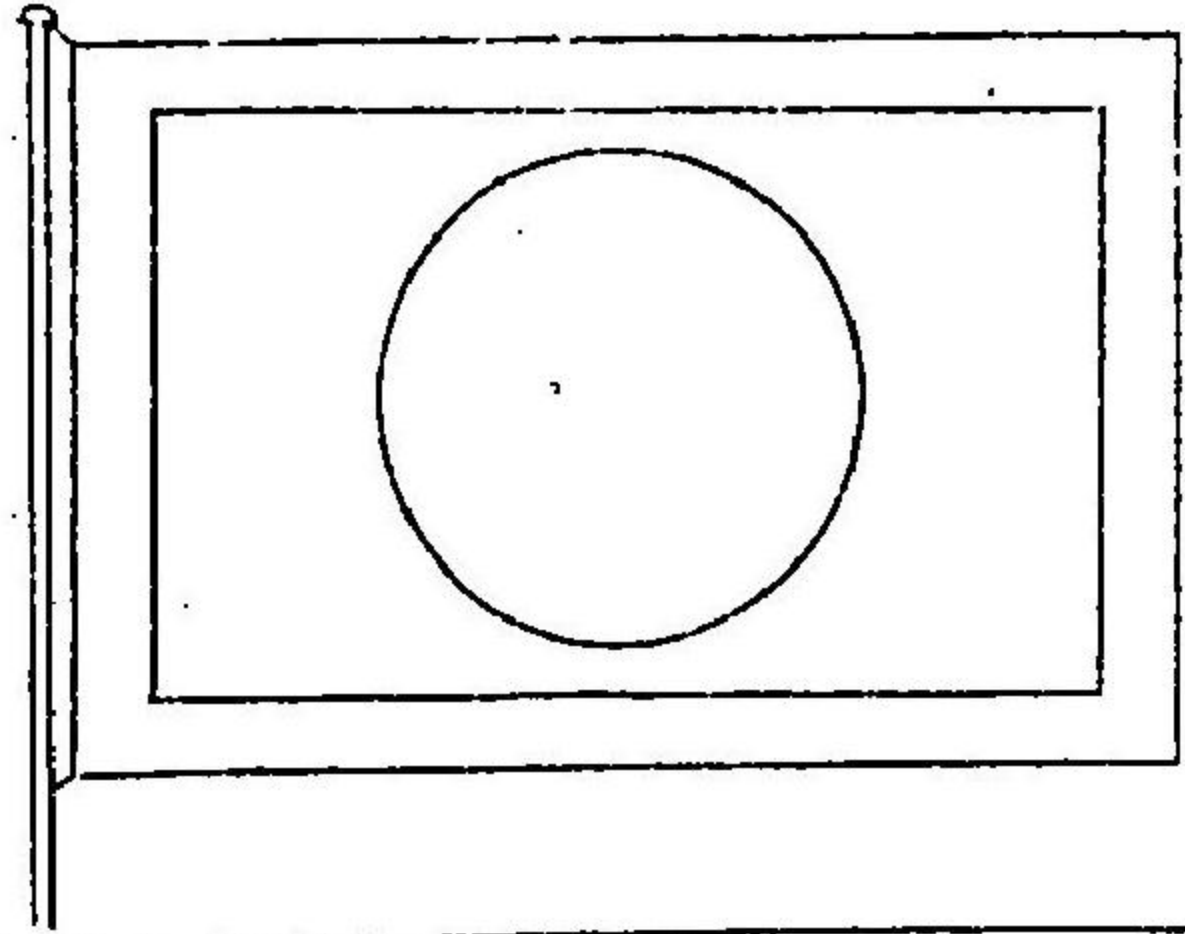
小縱五尺横七尺

各地艦船ノ進退ニ管スル處ハ皆此旗ヲ揚ク  
海軍省長官又ハ代理乗艦ノ時モ之レヲ用ル  
コアリ

(定) 改 海軍本省及ヒ長官同代理乗艦ノ時ノミ  
之ヲ用フ

八年第六十四號布  
告ヲ以テ改定

將旗



一將旗 白布紅縁紅日章

縱六尺横九尺

風下餘幅四寸五分

大將乗艦ノ時ハ之レヲ中橋頭ニ揚ク

中將乗艦ノ時ハ之レヲ前橋頭ニ揚ク

少將乗艦ノ時ハ之レヲ後橋頭ニ揚ク

一代將旒 白布紅日章

縱四尺五寸横九尺

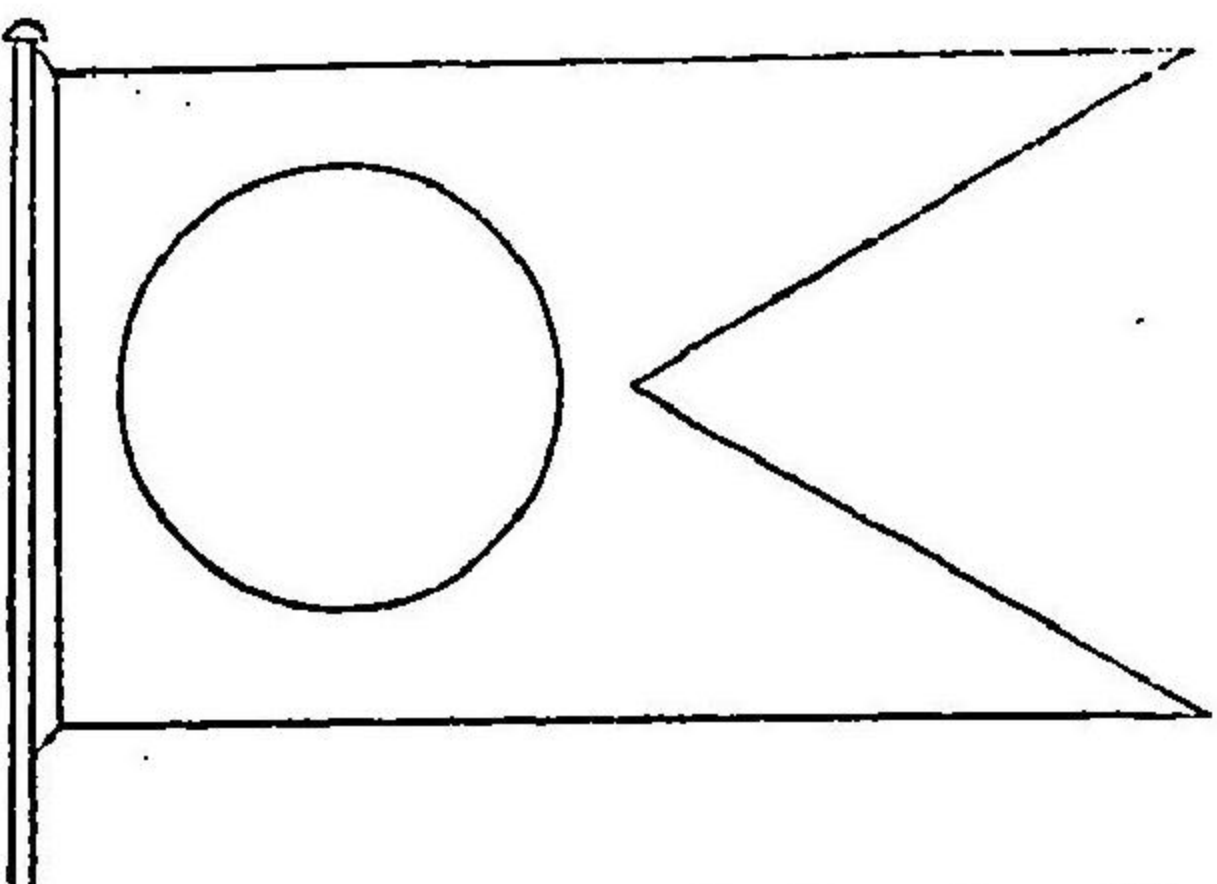
但シ三角形凹截二分ノ一

代將旒ハ大佐指揮官タル時之レヲ用ルモノニ

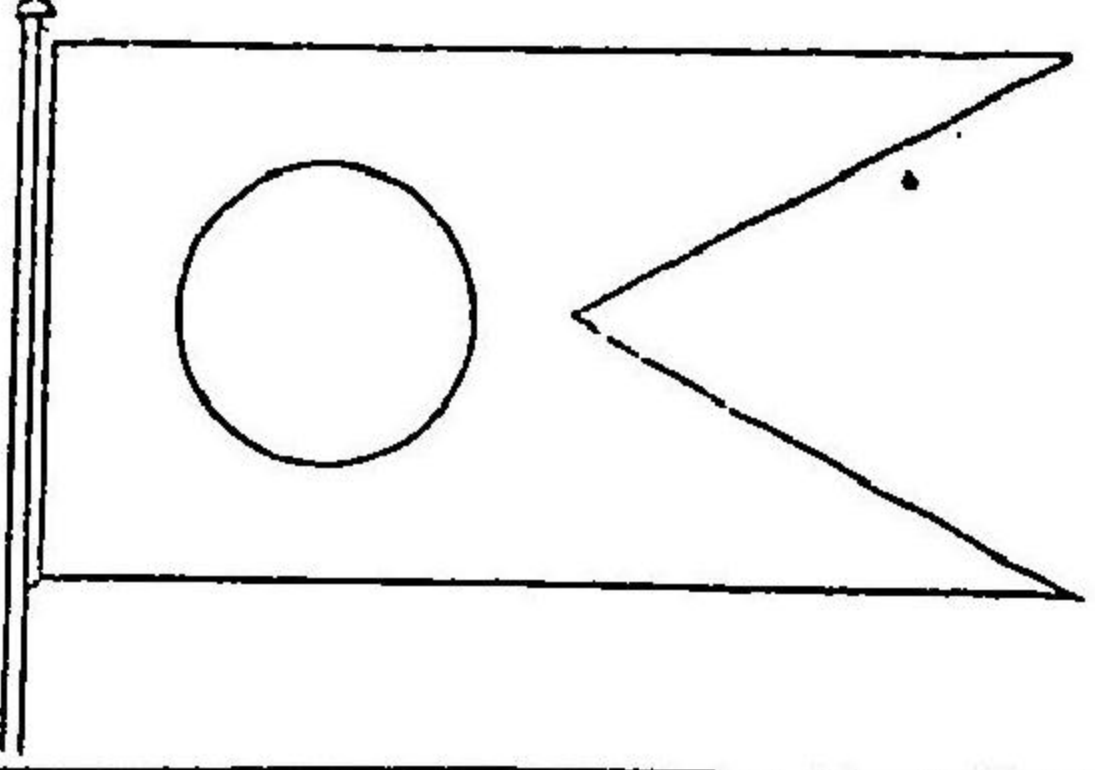
シテ大佐中艦隊指揮タル時中橋頭ニ揚ケ小艦

隊指揮タル時ハ前橋頭ニ揚クヘシ

代將旒



代 令 旒



一代令旒 白布紅日章

縱三尺橫六尺

但シ三角形右ニ同シ

代令旒ハ指揮官不在ノ港内ニ二艘以上合集スル時  
先任官之レヲ後檣頭ニ揚ク可シ

一將脚船旒 白布紅綠紅日章

縱三尺橫四尺五寸

風下餘幅二寸二分五厘

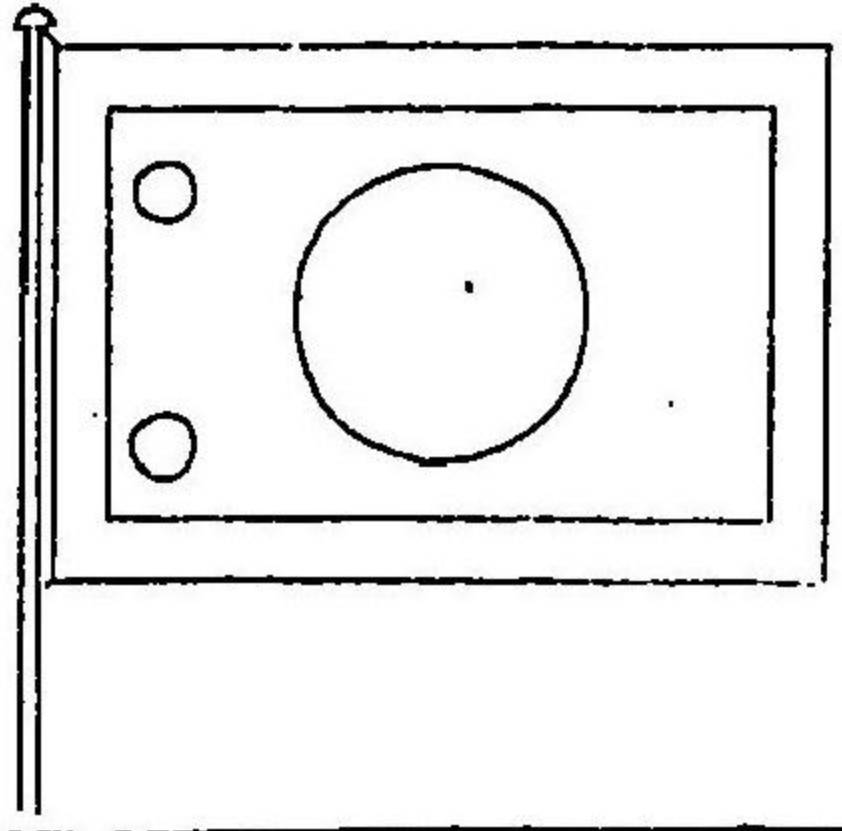
中將脚船ニハ一小球ヲ加フ

少將脚船ニハ二小球ヲ加フ

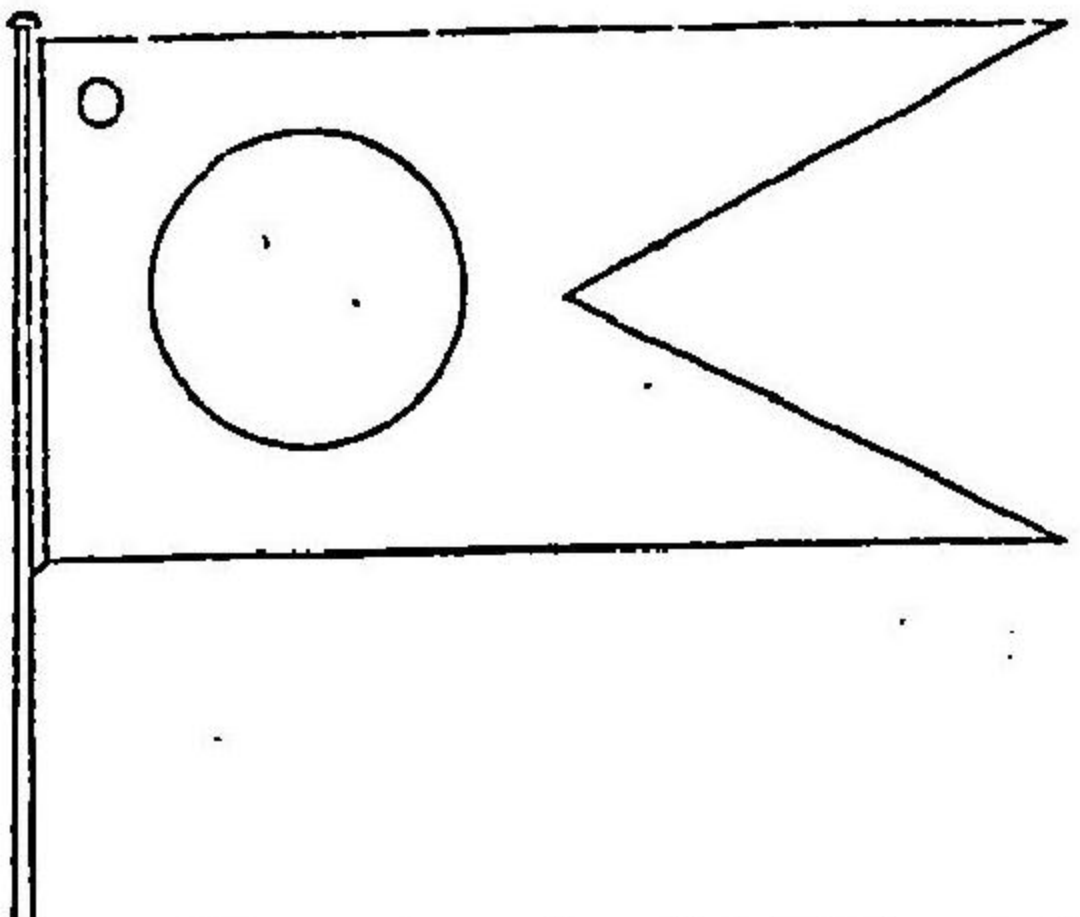
甲 但シ縱自紅線内際至副丸中心五寸五分

乙 但シ橫前五寸

將 脚 船 旒



代 將 脚 船 旒



一代將脚船旒

形色代將旒ニ同フシテ中艦隊指揮ニハ小球ナシ小  
艦隊指揮ニハ一小球ヲ加フ

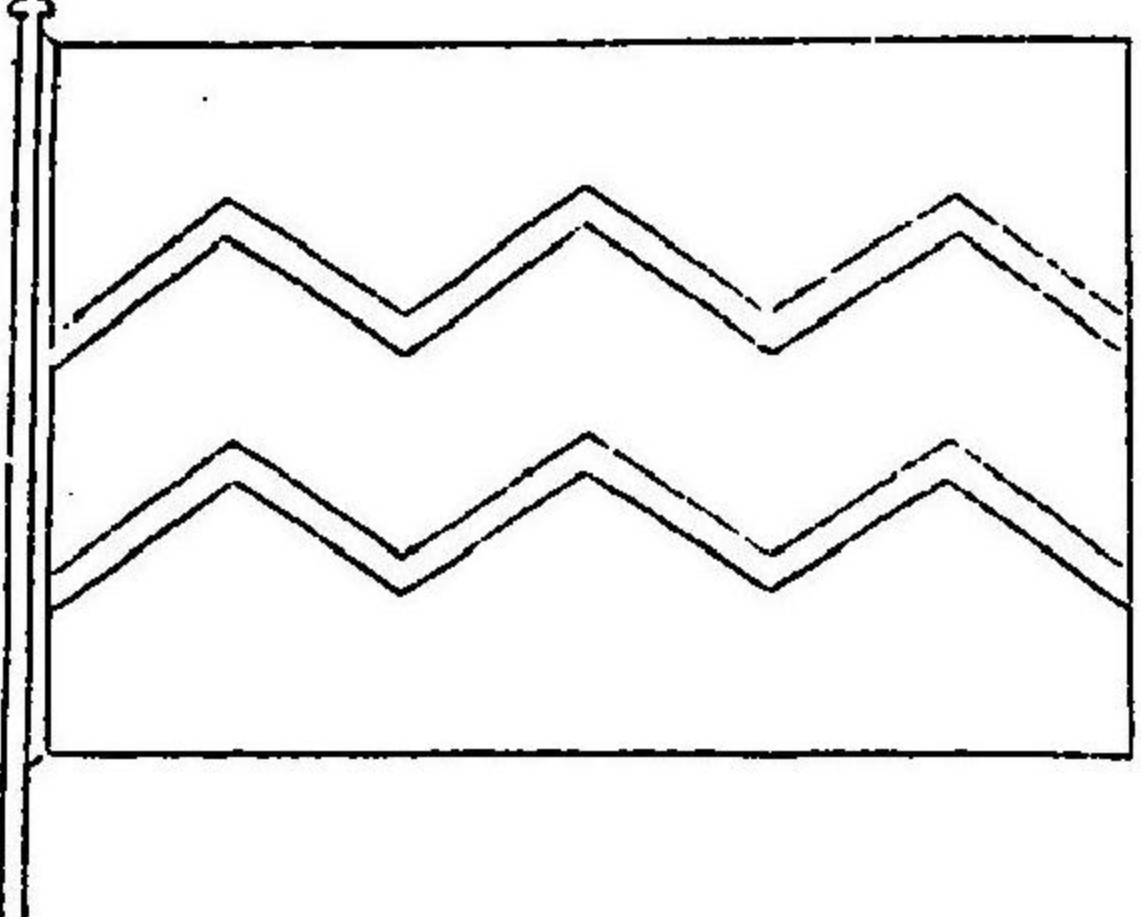
一當直旗 紅布白山形二條

縱六尺橫八尺

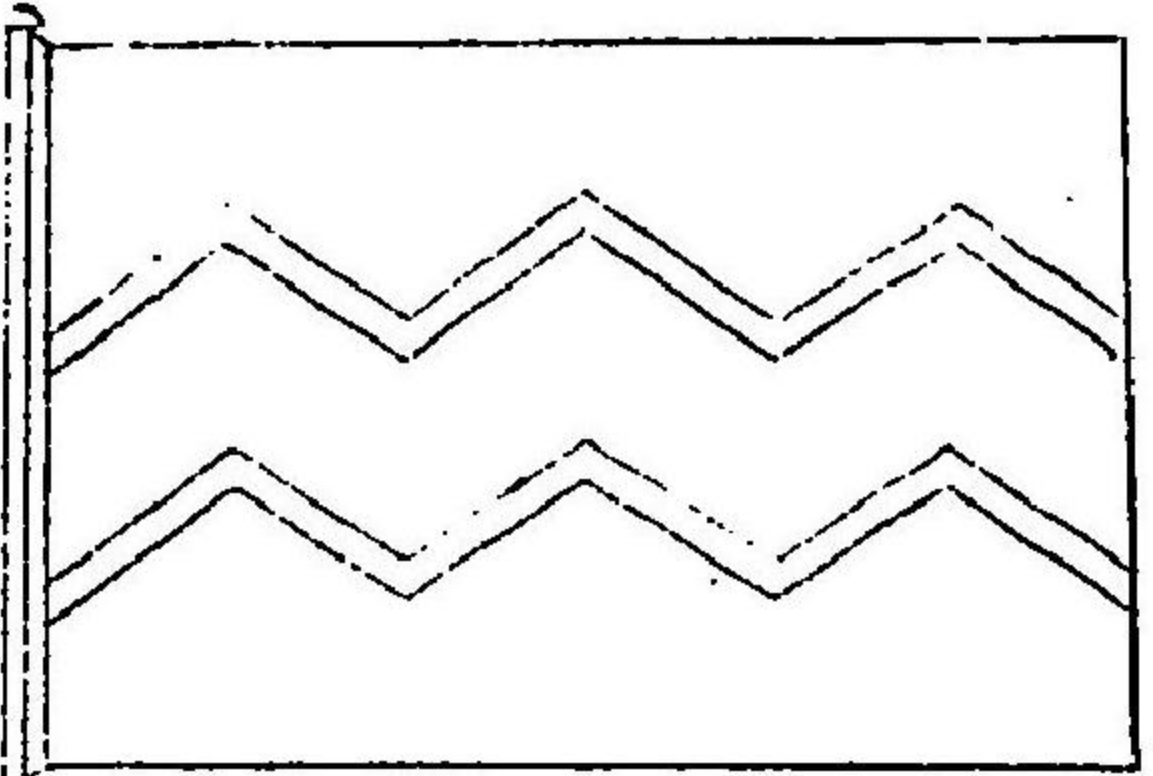
艦當直ノ時之レヲ後檣頭ニ揚ク

風雨中或ハ小艦ニ在テハ小ナル者ヲ用フ縱橫ノ比  
例ハ定法ニ從フ可シ

當 直 旗

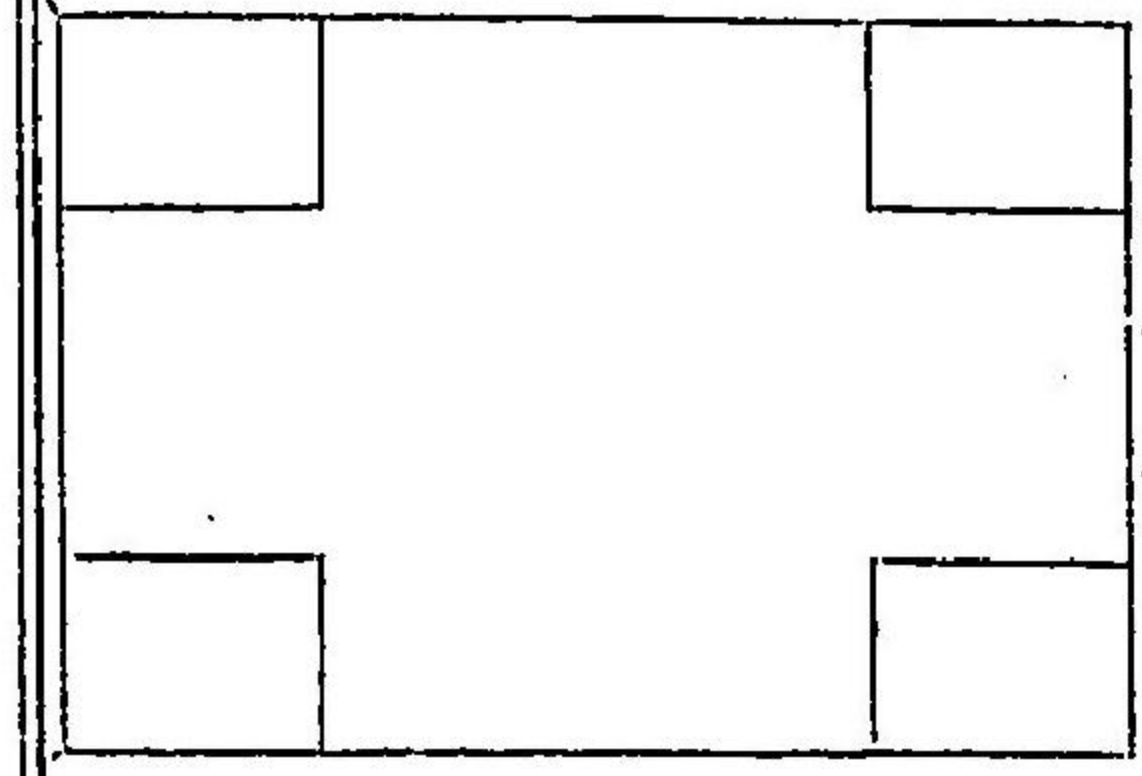


運送船旗



一運送船旗 白布紺山形二條  
縦横右ニ同シ  
但シ艦隊ニ屬スル時ハ旒ヲ揚ク

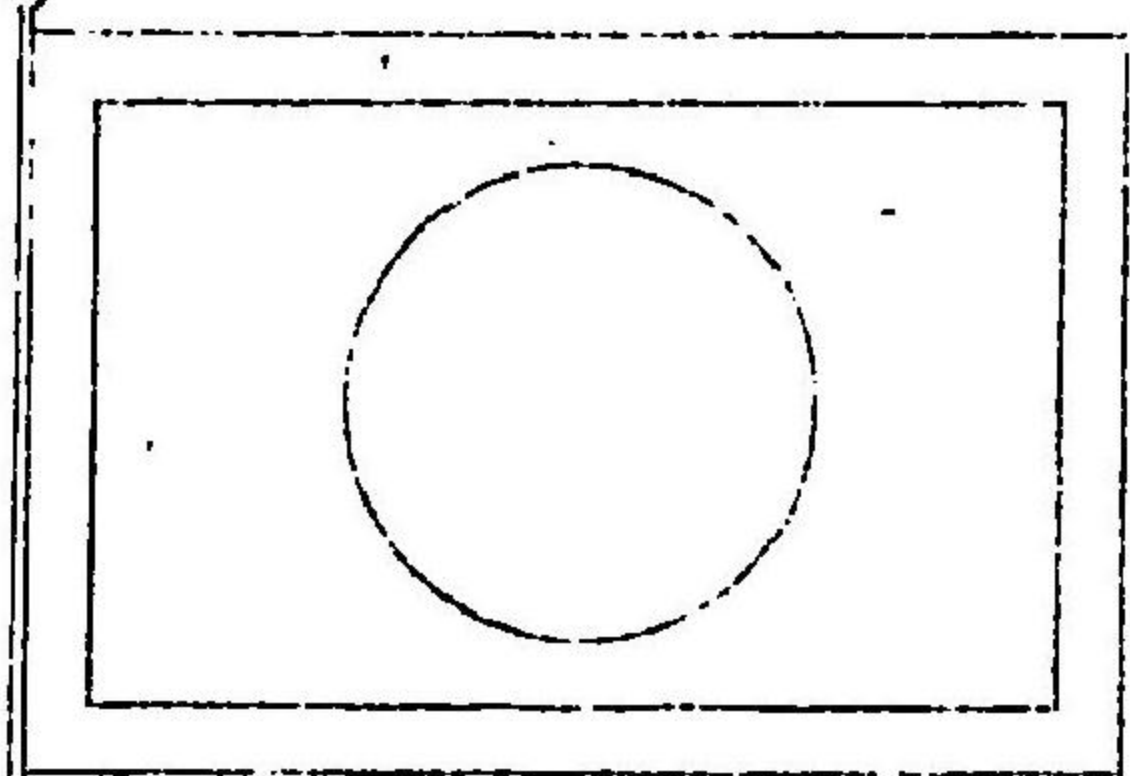
水路嚮導旗



一水路嚮導旗 白布紺  
縦六尺横八尺

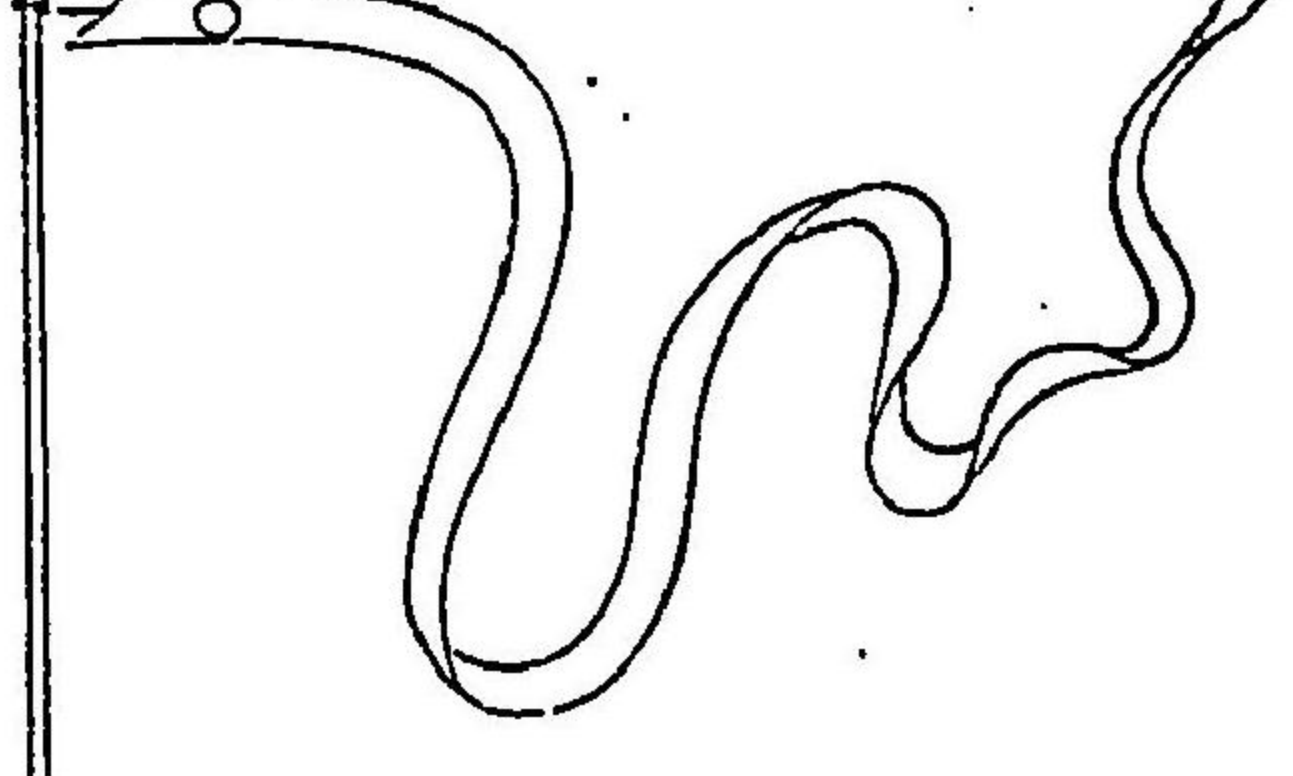
十五年第十三號布  
告ヲ以テ水路嚮導  
旗ヲ要招水先旗ト  
改ム

(改正) 要招水先旗



縦 六尺  
横 八尺  
日章 徑三尺壹寸五分  
紺縁 幅八寸

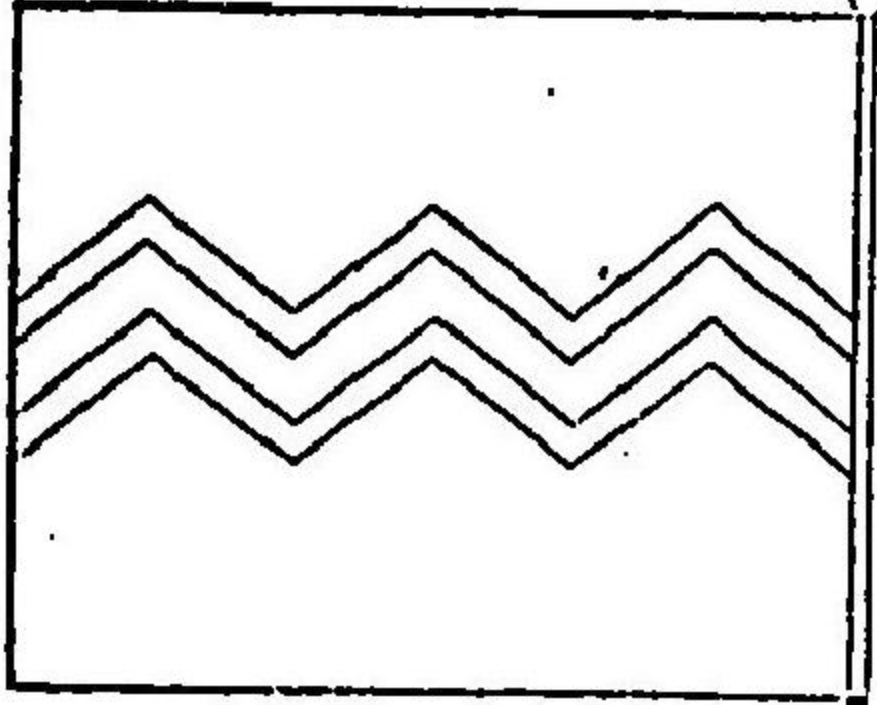
旒



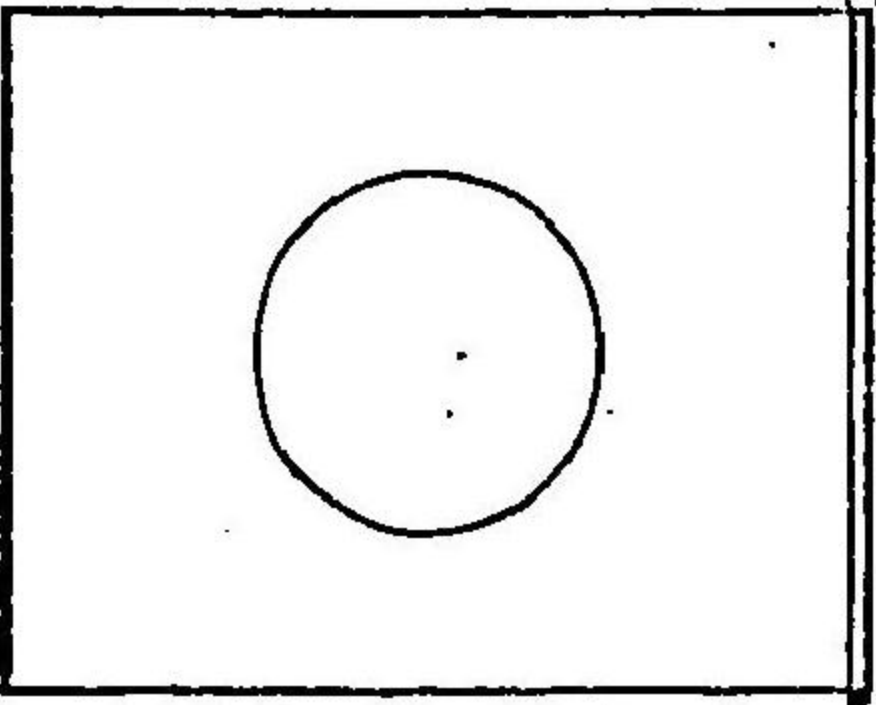
一旒 中楯頭 白布紅日  
大長サ 八間上幅四寸  
中長サ 五間半上幅三寸五分  
小長サ 三間半上幅三寸

十五年第十三號布  
告ヲ以テ隊附國旗  
并隊旗廢止

隊旗



隊附國旗



一、隊附國旗 白布紅日章  
縱三尺橫三尺七寸五分  
日章徑一尺四寸  
旗ノ括リ白革包  
紐紫金打交セ長三尺二寸  
旗竿 堅木黒塗  
長サ七尺九寸直徑九分  
金物 頭綱金燒付二寸  
鍍銀

一、隊旗 白布紅山形二條  
山形幅一寸六分  
縱橫其他前ニ同シ

○第四百十七號 (十二月二十五日) (達)

院省使府縣  
歲末御祝詞トシテ來廿九日ヨリ三日ノ内禮服用在京委任官以上ハ宮内省へ判任官以下ハ其廳ニ於テ名刺取集メ長官ヨリ可及言上此旨相達候事  
但シ時限ハ可爲勝手事

○第四百十八號 (十二月二十五日) (達)

院省使府縣  
本月第四百十號達書來明治七年新歲式中一日午後二時院省使御雇外國人朝拜ノ件假 皇居狹隘難被爲行候ニ付取消候條此旨相達候事

○第四百十九號 (十二月二十五日) 輪廊附(達)

院省使府縣  
諸官員月俸新任轉免等ノ節是迄日割ヲ以渡來候處詮議ノ次第有之右規則ハ悉皆取消來ル明治七年一月ヨリ十五日前後ノ區分ヲ以半箇月或ハ一箇月ト爲シ可相渡尤渡方規則ノ儀ハ追テ頒布候條此旨相達候事

○第四百二十號 (十二月二十五日) 輪廊附(達)

院省使府縣  
官員免職直ニ御用滞在被 仰付候向ハ滿年賜物無之猶再任後免職ノ節前後奉職ノ年月ヲ合算シ來候例規ヲ廢シ自今假令御用滞在被 仰付候共免職ノ都度規則ノ通賜物渡方可取計此旨相達候事  
但襦キニ御用滞在被 仰付候節賜物無之引續在職ノ輩ハ猶先規ノ通前後奉職ノ年數ヲ合算候儀ト可相心得候事

○第四百二十一號 (十二月二十五日) 輪廊附(布)

使府縣  
去ル明治四年辛未五月中相達候神社改正規則今般左ノ通更定候條此旨相心得神官へ布告スヘキ事  
規則  
第一、官幣國幣大社大宮司ハ奏任ナリ、教部省ヨリ伺テ、遂ケ之ヲ進退ス同少宮司以下、中小社宮司以

第四百三十三號案

七年太政官第六十一號達ニ依リ消滅

同上

十二月二十五日達

十年第四號布告ニ依リ消滅

十年第四號布告同  
達二十年內務省訓  
令第十八號ニ依リ  
消滅  
七年第十二號布告  
ヲ以テ改定同第九  
十一號布告及第二十  
一年內務省訓令第十  
五號ニ依リ消滅  
十年第四號布告ヲ  
以テ教部省ヲ廢シ  
事務ヲ內務省ヘ付  
ス  
八年教部省達書第  
五號達書第二十  
內務省乙第四十八  
號達ニ依リ消滅  
十年第七十九號布  
告ヲ以テ廢止  
九年第八號布告  
ニ依リ消滅  
九年第八號布告  
ニ依リ消滅

下、同省ノ判任タリ黜陟ハ同省長官ノ專決ニ任スヘシ  
但官幣國幣社共一切神官ノ能否勤惰ヲ具狀申告シ或ハ當器ノ人材ヲ新ニ撰擧スルハ各地  
方官之ヲ呈稟スルヲ得ヘシ  
第二、官幣國幣社神事及社頭ノ願伺届ハ大社ハ大小宮司中小社ハ宮司權宮司連署シ教部省長官ニ  
宛テ差出ヘシ  
第三、同上ニ社ノ私祭及土地或ハ人民ニ係ル事件ハ其地方官ノ指揮ヲ受クルコト勿論タルヘシ  
第四、官幣社祭典諸式並一社公事ノ入費及式年ノ造營年分ノ修繕等ハ凡テ官費タルヘシ  
第五、府縣社以下ハ地方官ノ管轄ニ屬スト雖其社格等差ヲ定メ或ハ之ヲ増減スル等都テ同省へ上  
申シテ其處分ヲ乞フヘシ其他ノ事件ト雖正臨時難決モノハ亦之ニ同シ  
第六、同上祠官祠掌ノ進退ハ地方官專行シテ後同省へ届出ツヘシ  
○第四百二十二號 (十二月二十五日輪附)(布)  
租稅不納ノ者身代限ヲ以取立ヘキ時ハ素ヨリ他ノ負債ニ關係致スヘキ筋ニ無之ニ付自今六十日間  
揭示スルニ及ハス直ニ處分可致候條此旨布告候事  
○第四百二十三號 (十二月二十七日輪附)(布)  
即今内外國事多端費用モ夥多ノ折柄ニ付陸海軍資ノ爲メ明治七年以後當分ノ所別册ノ通賞典祿ヲ  
除クノ外家祿稅被設候條此旨華士族へ布告スヘキ事 (別册ハ第四百二十四號ニ同シ)  
但金給ノ分ハ前年貢納相場ヲ以米ニ直シ別册稅額ニ引當ヘキ事  
○第四百二十四號 (十二月二十七日輪附)(達)  
使府縣  
華士族賞典祿ヲ除クノ外家祿稅課派方法別册ノ通相設候條明治七年以後管轄廳ニテ家祿相渡候節

一般致收入收稅帳相添大藏省へ上納方可取計此旨相達候事

(別册)

華士族祿稅則

家祿

(現米)	六万五千石未滿	二万二千七百五十石
同	六万四千石未滿	二万二千三百七十石
同	六万三千石未滿	二万二千石
同	六万二千石未滿	二万一千六百二十五石
同	六万一千石未滿	二万一千二百五十石
同	六万石未滿	二万一千二百五十石
同	五万九千石未滿	二万一千二百五十石
同	五万八千石未滿	二万一千二百五十石
同	五万七千石未滿	二万一千二百五十石
同	五万六千石未滿	二万一千二百五十石
同	五万五千石未滿	二万一千二百五十石
同	五万四千石未滿	二万一千二百五十石
同	五万三千石未滿	二万一千二百五十石
同	五万二千石未滿	二万一千二百五十石
同	五万一千石未滿	二万一千二百五十石
同	五万石未滿	二万一千二百五十石
同	四万九千石未滿	二万一千二百五十石
同	四万八千石未滿	二万一千二百五十石
同	四万七千石未滿	二万一千二百五十石
同	四万六千石未滿	二万一千二百五十石
同	四万五千石未滿	二万一千二百五十石
同	四万四千石未滿	二万一千二百五十石
同	四万三千石未滿	二万一千二百五十石
同	四万二千石未滿	二万一千二百五十石
同	四万一千石未滿	二万一千二百五十石
同	四万石未滿	二万一千二百五十石
同	三万九千石未滿	二万一千二百五十石
同	三万八千石未滿	二万一千二百五十石
同	三万七千石未滿	二万一千二百五十石
同	三万六千石未滿	二万一千二百五十石
同	三万五千石未滿	二万一千二百五十石
同	三万四千石未滿	二万一千二百五十石
同	三万三千石未滿	二万一千二百五十石
同	三万二千石未滿	二万一千二百五十石
同	三万一千石未滿	二万一千二百五十石
同	三万石未滿	二万一千二百五十石
同	二万九千石未滿	二万一千二百五十石
同	二万八千石未滿	二万一千二百五十石
同	二万七千石未滿	二万一千二百五十石
同	二万六千石未滿	二万一千二百五十石
同	二万五千石未滿	二万一千二百五十石
同	二万四千石未滿	二万一千二百五十石
同	二万三千石未滿	二万一千二百五十石
同	二万二千石未滿	二万一千二百五十石
同	二万一千石未滿	二万一千二百五十石
同	二万石未滿	二万一千二百五十石
同	一万九千石未滿	二万一千二百五十石
同	一万八千石未滿	二万一千二百五十石
同	一万七千石未滿	二万一千二百五十石
同	一万六千石未滿	二万一千二百五十石
同	一万五千石未滿	二万一千二百五十石
同	一万四千石未滿	二万一千二百五十石
同	一万三千石未滿	二万一千二百五十石
同	一万二千石未滿	二万一千二百五十石
同	一万一千石未滿	二万一千二百五十石
同	一万石未滿	二万一千二百五十石
同	九千石未滿	二万一千二百五十石
同	八千石未滿	二万一千二百五十石
同	七千石未滿	二万一千二百五十石
同	六千石未滿	二万一千二百五十石
同	五千石未滿	二万一千二百五十石
同	四千石未滿	二万一千二百五十石
同	三千石未滿	二万一千二百五十石
同	二千石未滿	二万一千二百五十石
同	一千石未滿	二万一千二百五十石
同	百石未滿	二万一千二百五十石
同	十石未滿	二万一千二百五十石

(同)	五万五千石未滿迄	一万七千五百石
(同)	五万石未滿迄	一万七千二百二十五石
(同)	四万九千石未滿迄	一万六千七百五十石
(同)	四万八千石未滿迄	一万六千三百七十五石
(同)	四万七千石未滿迄	一万六千石
(同)	四万六千石未滿迄	一万五千六百二十五石
(同)	四万五千石未滿迄	一万五千二百五十石
(同)	四万四千石未滿迄	一万四千八百七十五石
(同)	四万三千石未滿迄	一万四千五百石
(同)	四万二千石未滿迄	一万四千二百二十五石
(同)	四万一千石未滿迄	一万三千七百五十石
(同)	四万石未滿迄	一万三千三百七十五石
(同)	三万九千石未滿迄	一万三千石
(同)	三万八千石未滿迄	一万二千六百二十五石
(同)	三万七千石未滿迄	一万二千二百五十石
(同)	三万六千石未滿迄	一万一千八百七十五石
(同)	三万五千石未滿迄	一万一千五百石
(同)	三万四千石未滿迄	
(同)	三万三千石未滿迄	
(同)	三万二千石未滿迄	
(同)	三万一千石未滿迄	
(同)	三万石未滿迄	
(同)	二万九千石未滿迄	
(同)	二万八千石未滿迄	
(同)	二万七千石未滿迄	
(同)	二万六千石未滿迄	
(同)	二万五千石未滿迄	
(同)	二万四千石未滿迄	
(同)	二万三千石未滿迄	
(同)	二万二千石未滿迄	
(同)	二万一千石未滿迄	
(同)	二万石未滿迄	
(同)	一万九千石未滿迄	
(同)	一万八千石未滿迄	
(同)	一万七千石未滿迄	

一万七千五百石  
 一万七千二百二十五石  
 一万六千七百五十石  
 一万六千三百七十五石  
 一万六千石  
 一万五千六百二十五石  
 一万五千二百五十石  
 一万四千八百七十五石  
 一万四千五百石  
 一万四千二百二十五石  
 一万三千七百五十石  
 一万三千三百七十五石  
 一万三千石  
 一万二千六百二十五石  
 一万二千二百五十石  
 一万一千八百七十五石  
 一万一千五百石

(同)	三万四千石未滿迄	一万千二百二十五石
(同)	三万三千石未滿迄	一万七千五百石
(同)	三万二千石未滿迄	一万三百七十五石
(同)	三万一千石未滿迄	一万石
(同)	三万石未滿迄	九千六百二十五石
(同)	二万九千石未滿迄	九千二百五十石
(同)	二万八千石未滿迄	八千八百七十五石
(同)	二万七千石未滿迄	八千五百石
(同)	二万六千石未滿迄	八千二百二十五石
(同)	二万五千石未滿迄	七千七百五十石
(同)	二万四千石未滿迄	七千三百七十五石
(同)	二万三千石未滿迄	七千石
(同)	二万二千石未滿迄	六千六百二十五石
(同)	二万一千石未滿迄	六千二百五十石
(同)	二万石未滿迄	五千八百七十五石
(同)	一万九千石未滿迄	五千五百石
(同)	一万八千石未滿迄	五千二百二十五石
(同)	一万七千石未滿迄	五千石

一万千二百二十五石  
 一万七千五百石  
 一万三百七十五石  
 一万石  
 九千六百二十五石  
 九千二百五十石  
 八千八百七十五石  
 八千五百石  
 八千二百二十五石  
 七千七百五十石  
 七千三百七十五石  
 七千石  
 六千六百二十五石  
 六千二百五十石  
 五千八百七十五石  
 五千五百石  
 五千二百二十五石  
 五千石



同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
九千石未滿	九千九百石未滿	八千九百石未滿	八千八百石未滿	八千七百石未滿	八千六百石未滿	八千五百石未滿	八千四百石未滿	八千三百石未滿	八千二百石未滿	八千石未滿	八千石未滿	八千石未滿	八千石未滿	八千石未滿	八千石未滿	八千石未滿	八千石未滿	八千石未滿	八千石未滿
九千石未滿	九千石未滿	九千石未滿	九千石未滿	九千石未滿	九千石未滿	九千石未滿	九千石未滿	九千石未滿	九千石未滿	九千石未滿	九千石未滿	九千石未滿	九千石未滿	九千石未滿	九千石未滿	九千石未滿	九千石未滿	九千石未滿	九千石未滿

四十七百五十石	四千三百七十五石	四千	三千六百二十五石	三千二百五十石	二千八百七十五石	二千五百石	二千四百七十四石	二千四百四十八石	二千四百二十二石	二千三百九十六石	二千三百七十一石	二千三百四十五石	二千三百十九石	二千二百九十三石	二千二百六十七石	二千二百四十一石
---------	----------	----	----------	---------	----------	-------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	---------	----------	----------	----------

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
九千石未滿	八千九百石未滿	八千八百石未滿	八千七百石未滿	八千六百石未滿	八千五百石未滿	八千四百石未滿	八千三百石未滿	八千二百石未滿	八千石未滿	八千石未滿	八千石未滿	八千石未滿	八千石未滿	八千石未滿	八千石未滿	八千石未滿	八千石未滿	八千石未滿	八千石未滿
九千石未滿	九千石未滿	九千石未滿	九千石未滿	九千石未滿	九千石未滿	九千石未滿	九千石未滿	九千石未滿	九千石未滿	九千石未滿	九千石未滿	九千石未滿	九千石未滿	九千石未滿	九千石未滿	九千石未滿	九千石未滿	九千石未滿	九千石未滿

二千二百十五石	二千一百八十九石	二千一百六十三石	二千一百三十八石	二千一百一十二石	二千零八十六石	二千六十一石	二千三十四石	二千零八石	千九百八十二石	千九百五十六石	千九百三十石	千九百五石	千八百七十九石	千八百五十三石	千八百二十七石	千八百一石
---------	----------	----------	----------	----------	---------	--------	--------	-------	---------	---------	--------	-------	---------	---------	---------	-------

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
五千六百石未滿	五千五百石未滿	五千四百石未滿	五千三百石未滿	五千二百石未滿	五千石未滿	四千九百石未滿	四千八百石未滿	四千七百石未滿	四千六百石未滿	四千五百石未滿	四千四百石未滿	四千三百石未滿	四千二百石未滿	四千石未滿	三千九百石未滿	三千八百石未滿	三千七百石未滿	三千六百石未滿	三千五百石未滿

千七百七十五石	千七百四十九石	千七百二十三石	千六百九十七石	千六百七十二石	千六百四十六石	千六百二十一石	千五百九十四石	千五百六十八石	千五百四十二石	千五百十六石	千四百九十九石	千四百六十四石	千四百三十九石	千四百一十三石	千三百八十七石	千三百六十一石
---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	--------	---------	---------	---------	---------	---------	---------

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
五千六百石未滿	五千五百石未滿	五千四百石未滿	五千三百石未滿	五千二百石未滿	五千石未滿	四千九百石未滿	四千八百石未滿	四千七百石未滿	四千六百石未滿	四千五百石未滿	四千四百石未滿	四千三百石未滿	四千二百石未滿	四千石未滿	三千九百石未滿	三千八百石未滿	三千七百石未滿	三千六百石未滿	三千五百石未滿

千三百三十五石	千三百九石	千二百八十三石	千二百五十七石	千二百三十一石	千二百六石	千八百八十石	千五百五十四石	千二百二十八石	千二百一石	千七十六石	千五十五石	千二十四石	九百九十八石	九百七十三石	九百四十七石	九百二十一石
---------	-------	---------	---------	---------	-------	--------	---------	---------	-------	-------	-------	-------	--------	--------	--------	--------

同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同  
 三千九百石未滿  
 三千八百石未滿  
 三千七百石未滿  
 三千六百石未滿  
 三千五百石未滿  
 三千四百石未滿  
 三千三百石未滿  
 三千二百石未滿  
 三千一百石未滿  
 三千石未滿  
 二千九百石未滿  
 二千八百石未滿  
 二千七百石未滿  
 二千六百石未滿  
 二千五百石未滿  
 二千四百石未滿  
 二千三百石未滿  
 二千二百石未滿

八百九十五石  
 八百六十九石  
 八百四十三石  
 八百一十七石  
 七百九十一石  
 七百六十五石  
 七百四十石  
 七百一十四石  
 六百八十八石  
 六百六十二石  
 六百三十六石  
 六百一十石  
 五百八十四石  
 五百五十八石  
 五百三十二石  
 五百零七石  
 四百八十一石

同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同  
 二千二百石未滿  
 二千一百石未滿  
 二千石未滿  
 一千九百石未滿  
 一千八百石未滿  
 一千七百石未滿  
 一千六百石未滿  
 一千五百石未滿  
 一千四百石未滿  
 一千三百石未滿  
 一千二百石未滿  
 一千一百石未滿  
 一千石未滿  
 九百九十九石未滿  
 九百九十八石未滿  
 九百九十七石未滿  
 九百九十六石未滿  
 九百九十五石未滿  
 九百九十四石未滿  
 九百九十三石未滿  
 九百九十二石未滿  
 九百九十一石未滿  
 九百九十石未滿  
 九百八十九石未滿  
 九百八十八石未滿  
 九百八十七石未滿  
 九百八十六石未滿  
 九百八十五石未滿  
 九百八十四石未滿  
 九百八十三石未滿  
 九百八十二石未滿  
 九百八十一石未滿  
 九百八十石未滿  
 九百七十九石未滿  
 九百七十八石未滿  
 九百七十七石未滿  
 九百七十六石未滿  
 九百七十五石未滿  
 九百七十四石未滿  
 九百七十三石未滿  
 九百七十二石未滿  
 九百七十一石未滿  
 九百七十石未滿  
 九百六十九石未滿  
 九百六十八石未滿  
 九百六十七石未滿  
 九百六十六石未滿  
 九百六十五石未滿  
 九百六十四石未滿  
 九百六十三石未滿  
 九百六十二石未滿  
 九百六十一石未滿  
 九百六十石未滿  
 九百五十九石未滿  
 九百五十八石未滿  
 九百五十七石未滿  
 九百五十六石未滿  
 九百五十五石未滿

四百五十五石  
 四百二十九石  
 四百三石  
 三百七十七石  
 三百五十一石  
 三百二十五石  
 三百十九石  
 三百十三石  
 二百七十四石  
 二百四十八石  
 二百二十二石  
 二百零七石  
 二百零一石  
 一百九十五石  
 一百八十九石  
 一百八十三石  
 一百七十七石  
 一百七十一石  
 一百六十五石  
 一百五十九石  
 一百五十三石  
 一百四十七石  
 一百四十一石  
 一百三十五石  
 一百二十九石  
 一百二十三石  
 一百一十七石  
 一百一十一石  
 一百零五石  
 九十九石  
 九十三石  
 八十七石  
 八十一石  
 七十五石  
 六十九石  
 六十三石  
 五十七石  
 五十一石  
 四十五石  
 三十九石  
 三十三石  
 二十七石  
 二十一石  
 十五石  
 九石  
 三石

同 九百五十五石未滿  
同 九百四十五石未滿  
同 九百三十五石未滿  
同 九百二十五石未滿  
同 九百一十五石未滿  
同 九百零五石未滿  
同 八百九十五石未滿  
同 八百八十五石未滿  
同 八百七十五石未滿  
同 八百六十五石未滿  
同 八百五十五石未滿  
同 八百四十五石未滿  
同 八百三十五石未滿  
同 八百二十五石未滿  
同 八百一十五石未滿  
同 八百零五石未滿  
同 七百九十五石未滿  
同 七百八十五石未滿

百五十九石五斗  
百五十七石八斗  
百五十六石  
百五十四石三斗  
百五十二石六斗  
百五十一石八斗  
百四十九石一斗  
百四十七石三斗  
百四十五石六斗  
百四十三石八斗  
百四十二石一斗  
百三十八石六斗  
百三十六石九斗  
百三十五石一斗  
百三十三石四斗  
百三十一石六斗

同 七百八十五石未滿  
同 七百七十五石未滿  
同 七百六十五石未滿  
同 七百五十五石未滿  
同 七百四十五石未滿  
同 七百三十五石未滿  
同 七百二十五石未滿  
同 七百一十五石未滿  
同 七百零五石未滿  
同 七百石未滿  
同 六百九十五石未滿  
同 六百八十五石未滿  
同 六百七十五石未滿  
同 六百六十五石未滿  
同 六百五十五石未滿  
同 六百四十五石未滿  
同 六百三十五石未滿  
同 六百二十五石未滿  
同 六百一十五石未滿  
同 六百零五石未滿

百二十九石九斗  
百二十八石一斗  
百二十六石四斗  
百二十四石六斗  
百二十二石九斗  
百二十一石二斗  
百十九石四斗  
百十七石七斗  
百十五石九斗  
百十四石二斗  
百十二石四斗  
百十石七斗  
百八石九斗  
百七石二斗  
百五石五斗  
百三石七斗  
百二石





明治六年十二月 太政官 第四百二十四號 (華士族課稅則)

六七八

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
二百七十石未滿迄	二百六十石未滿迄	二百五十石未滿迄	二百四十石未滿迄	二百三十石未滿迄	二百二十石未滿迄	二百一十石未滿迄	二百石未滿迄	一百九十石未滿迄	一百八十石未滿迄	一百七十石未滿迄	一百六十石未滿迄	一百五十石未滿迄	一百四十石未滿迄	一百三十石未滿迄	一百二十石未滿迄	一百一十石未滿迄	一百石未滿迄	同	同	同

四十一石九斗	三十九石二斗	三十七石四斗	三十五石七斗	三十三石九斗	三十二石二斗	三十石四斗	二十八石七斗	二十七石	二十五石二斗	二十三石五斗	二十一石七斗	二十石	十八石二斗	十六石五斗	十四石七斗	十三石	同	同	同	同
--------	--------	--------	--------	--------	--------	-------	--------	------	--------	--------	--------	-----	-------	-------	-------	-----	---	---	---	---

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
九十九石未滿迄	九十八石未滿迄	九十七石未滿迄	九十六石未滿迄	九十五石未滿迄	九十四石未滿迄	九十三石未滿迄	九十二石未滿迄	九十一石未滿迄	九十石未滿迄	八十九石未滿迄	八十八石未滿迄	八十七石未滿迄	八十六石未滿迄	八十五石未滿迄	八十四石未滿迄	八十三石未滿迄	同	同	同	同

十二石九斗	十二石七斗	十二石六斗	十二石四斗	十二石三斗	十二石二斗	十一石九斗	十一石八斗	十一石六斗	十一石五斗	十一石三斗	十一石二斗	十一石一斗	十石九斗	十石八斗	十石七斗	十石六斗	同	同	同	同
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	------	------	------	------	---	---	---	---

明治六年十二月 太政官 第四百二十四號 (華士族課稅則)

六七九





明治六年十二月 太政官 第四百二十四號 (華土族稅則)

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
三十三石未迄滿	三十四石未迄滿	三十五石未迄滿	三十六石未迄滿	三十七石未迄滿	三十八石未迄滿	三十九石未迄滿	四十石未迄滿	四十一石未迄滿	四十二石未迄滿	四十三石未迄滿	四十四石未迄滿	四十五石未迄滿	四十六石未迄滿	四十七石未迄滿	四十八石未迄滿	四十九石未迄滿	四十九石未迄滿	四十九石未迄滿	四十九石未迄滿	四十九石未迄滿	四十九石未迄滿	四十九石未迄滿	四十九石未迄滿	四十九石未迄滿	四十九石未迄滿	四十九石未迄滿	四十九石未迄滿	四十九石未迄滿	四十九石未迄滿	四十九石未迄滿	四十九石未迄滿	四十九石未迄滿	

三	三	三	四	四	四	四	四	四	四	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五
石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石
六	八	九	二	三	五	六	七	九	一	三	四	六	七	八	一	三	四	六	七	八	一	三	四	六	七	八	一	三	四	六	七	八	一	
斗	斗	斗	石	斗	斗	斗	斗	斗	斗	石	斗	斗	斗	斗	斗	斗	斗	斗	斗	斗	斗	石	斗	斗	斗	斗	斗	斗	斗	斗	斗	斗	斗	

明治六年十二月 太政官 第四百二十四號 (華土族稅則)

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
十六石未迄滿	十七石未迄滿	十八石未迄滿	十九石未迄滿	二十石未迄滿	二十一石未迄滿	二十二石未迄滿	二十三石未迄滿	二十四石未迄滿	二十五石未迄滿	二十六石未迄滿	二十七石未迄滿	二十八石未迄滿	二十九石未迄滿	三十石未迄滿	三十一石未迄滿	三十二石未迄滿	三十二石未迄滿	三十二石未迄滿	三十二石未迄滿	三十二石未迄滿	三十二石未迄滿	三十二石未迄滿	三十二石未迄滿	三十二石未迄滿	三十二石未迄滿	三十二石未迄滿	三十二石未迄滿	三十二石未迄滿	三十二石未迄滿	三十二石未迄滿	三十二石未迄滿	三十二石未迄滿	

一	一	一	一	一	二	二	二	二	二	二	二	二	二	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石
三	四	六	七	八	一	三	四	五	七	八	九	一	二	四	五	一	三	四	六	七	八	一	三	四	六	七	八	一	三	四	六	七	八	一
斗	斗	斗	斗	斗	石	斗	斗	斗	斗	斗	斗	斗	斗	斗	斗	斗	斗	斗	斗	斗	斗	石	斗	斗	斗	斗	斗	斗	斗	斗	斗	斗	斗	斗

同 十五石未滿	一石二斗
同 十四石未滿	一石
同 十三石未滿	九斗
同 十二石未滿	七斗
同 十一石未滿	六斗
同 十石未滿	五斗四升一合
同 九石未滿	四斗八升二合
同 八石未滿	四斗二升三合
同 八石五斗未滿	三斗六升四合
同 八石五斗未滿	三斗五合
同 七石五斗未滿	二斗四升六合
同 七石五斗未滿	一斗八升七合
同 六石五斗未滿	一斗二升八合
同 六石五斗未滿	六升九合
同 五石五斗未滿	一升

一百十石ノ祿税十四石七斗百十石未滿百九石五斗ノ祿税十三石如此ノ類ハ百十石ノ祿税ヲ引去リ  
 殘高ノ石數ヲ越ヘサルヲ以テ準據トシ祿税ノ額ヲ定ムヘシ  
 祿税十四石七斗  
 殘高九十五石三斗

七年第四百十八號布告  
 各官署及官立學校  
 以テ分給俸給停止  
 九年第四百八號布告  
 二依テ消滅

同上

七年第四百十八號布告  
 各官署及官立學校  
 以テ分給俸給停止  
 九年第四百八號布告  
 二依テ消滅

一百九石五斗 祿税十四石二斗 殘高九十五石三斗  
 一百九石 祿税十二石七斗 殘高九十五石三斗  
 一百五石 祿税十三石 殘高九十二石  
 一百石 祿税十三石 殘高八十七石  
 百石前後トモ此算則ニ據ルヘシ  
 ○第四百二十五號 (十二月二十七日 輪附(布) 使府縣)  
 華士族卒在官ノ外自今農工商ノ職業相替候儀被差許候旨去ル明治四年辛未十二月布告候處薄祿ノ  
 者資本金無之ヨリ其志ヲ遂ケ兼候輩モ有之哉ニ相開候ニ付特別ノ譯ヲ以テ別冊ノ通方法相設家祿  
 賞典祿百石未滿ノ者ニ限リ奉還開屆候條望ノ者ハ其管轄屬ヘ可願出此旨士族並ニ元卒ヘ布告スヘ  
 キ事(別冊ハ第四百二十六號ニ同シ)  
 但本文願出ノ向ハ祿税上納不及事  
 ○第四百二十六號 (十二月二十七日 輪附(達) 使府縣)  
 士族以下家祿賞典祿百石未滿ノ者願出次第奉還開屆候旨及布告候ニ付別冊方法ノ通相心得夫々處  
 分可致此旨相達候事  
 (別冊)  
 家祿奉還ノ者ヘ資金被下方規則  
 第一條  
 一家祿賞典祿共百石未滿ノ輩自今奉還出願ノ者ヘ產業爲資本永世祿ハ六ヶ年分終身祿ハ四ヶ年分  
 一時ニ下賜候事  
 第二條

七年第三十九號布告ヲ以テ公債證書發行條例ヲ定ム

一前條合算高各府縣當酉年貢納石代相場ヲ以金ニ替凡半數現金半數公債證書ヲ以相渡シ公債證書  
ノ分ハ年ニ八歩ノ利息年々十一月ニ各地方廳ヨリ相渡可申事  
但公債證書ハ五百圓三百圓百圓五十圓二十五圓ノ五種ヲ製造スル故ニ金高ノ都合ニ寄步割増  
減モ有之ヘク事

第三條

一公債證書ハ外國人ヲ除ノ外何人ニ不限讓渡買入トモ可爲勝手都テ取扱方ノ儀ハ新公債證書同様  
タルヘシ但巨細ノ儀ハ猶公布可及事

第四條

一債公證書ハ三ヶ年目ヨリ政府ノ都合ニ因リ七ヶ年ノ間ニ抽籤ノ濫ヲ以現金ニ引換可申事

第五條

一元一代卒ニテ民籍へ編入終身祿被下候分モ奉還ヲ願出者ハ前條ニ照準シ處分スヘキ事

第六條

一年限給ノ分奉還願出候へハ是マテ渡濟及殘年限等詳細取調管轄廳ヨリ別段大藏省へ可伺出事

第七條

一既ニ貫屬替致セシモノハ家祿受取來候舊管轄廳へ可申出事

第八條

一農業或ハ牧畜等志願ノ者ハ官林田畑荒蕪ノ地等故障無之分ハ別紙拂下規則ノ通取計フヘシ尤右  
代價ハ此度可相渡公債證書ヲ以上納不苦候事  
(別紙)

產業資本ノ爲メ官林荒蕪地拂下規則

七年第三十一號布告ヲ以テ第六條ノ規則ヲ定ム

七年第八十三號布告ヲ以テ第九條ヨリ第十一條迄增加

第一條

一家祿奉還資本金受取候者農業或ハ牧畜營業ノ爲メ官有ノ田畑城郭跡屋敷跡並荒蕪地山林等拂下  
相願地元村方組合村方又ハ政府ニ於テ故障無之分ハ相當代價ノ半價ヲ以相渡スヘシ候條附錄雜  
形ニ照準レ來六月三十日限リ封書ヲ以管轄廳へ可願出尤他管轄ノ地所ヲ望ム者ハ本管ノ添書ヲ  
以右期限迄ノ内望地ノ官廳ニ可願出同日以後出願候分ハ公ノ入札法ヲ以拂下可申事  
但拂下出願ノ地所ハ相當代價ノ半價建物立木ノ分ハ相當代價ニテ可拂下事

第二條

一地所拂下願書ハ開札日限相定メ願人立會開封ノ上三番札マテ取揃大藏省へ申出ツヘシ尤同直段  
ノ者有之ハ出願ノ遲速ヲ以可相定事

第三條

一地所拂下許可ニ至リ管轄廳ニ於テ代金上納申付地券相渡可申尤券面ニハ相當代價ヲ以記載シ錄  
下年季明貢租付ノ時ニ至リ更ニ書改可申事

第四條

一地所拂下一人當リ步數ノ制限ハ願人ノ多寡拂下地ノ廣狹ニ寄リ候儀ニ付地方官ニ於テ見込相立  
大藏省へ可申立事  
但田畑並城郭跡屋敷跡ハ一町步以下荒蕪地ハ三町步以下山林ハ五町步以下ニ限ルヘシ尤田畑  
五反山林ニ町半ヲ併セ拂下候テモ不苦且又陸羽諸國其他僻遠ノ地ニテ廣邇ノ場所ハ此限ニ非  
スト雖トモ凡右ノ目的ヲ以取調可申事

第五條

一地所ノ代價政府ニ於テ不相當ト視認ルニ於テハ拂下差止候事

七年太政官第九號  
邊ヲ以テ規則附錄  
ヲ定ム

七年內務省乙第四  
十號邊參看

七年內務省甲第十  
五號布達ヲ以テ七  
年十二月マテ延期

第六條

一地所建物立木共拂下代ノ儀ハ一時上納ノ事

第七條

一熟田畑拂下ノ分ハ直ニ從前ノ貢租ヲ上納致スヘシ尤從前貢租未定ノ分ハ隣地比較ヲ以租額ヲ定メ沽券法施行ノ地ハ地租百分ノ三舊法因襲ノ地ハ舊額ノ米金ヲ貢納スヘキ事

第八條

一城郭跡屋敷跡ハ銀下トシテ十ヶ年ノ間荒蕪地ハ十五ヶ年山林開墾ノ分ハ二十ヶ年免稅タルヘシ尤山林立木其儘存置キ候分ハ隣地比較ヲ以テ稅額取調ヘキ事

第九條

一開墾年期中拂下ノ地所他人へ讓渡ハ勿論質入等ノ儀堅ク禁止セシムヘキ事  
但本人長病一家ノ内他ニ着手スヘキ者ナキ歎或ハ其他已ムコトヲ得サル事故アル者ハ管轄廳へ詳細具狀何分ノ差圖ヲ可受事

第十條

一地所拂下相願候者姓名ヲ他人ニ假與へ或ハ反別木敷ヲ偽ル等各種奸詐ノ所業有之拂下ノ後發覺候ニ於テハ假令地所着手或ハ成功ノ後タリ共右地所引揚當人並ニ連累ノ者相當ノ罪科可申付ハ勿論万一右地所賣買イタシ候後タリトモ同様處斷スヘキ事

離形

第一例

元何々 禮上地  
字何々 寺

何國何郡何村地内

一反別何町何反何畝何步

此從前貢米何程

此相當代價何程

此半金何程

右ハ後來生活ノ目途ヲ以テ私有地ニ御拂下奉願候御開届被下候上ハ前書地價半金何程即納可仕候若シ不正ノ所業有之候歎又ハ漫ニ他人へ讓渡候儀有之候ハ、如何様御所分有之候共決シテ申分無御座候以上

月日

何縣令何ノ誰殿

第二例

何國何郡何町地内

字何々

一反別何町何反何畝何步

此相當代價何程

此半金何程

一建家何百何拾何坪何合

此相當代價何程

一立木何千何百何拾何本

元 城郭地

一反ニ付何程

瓦葺二階家敷 取潰候積敷  
板葺平家敷 存置候積敷  
一坪ニ付何程  
伐採候積敷 存置候積敷  
目通何尺廻リヨリ何尺廻リ迄木

田畝

七年內務省甲第十  
九號布達ヲ以テ海  
ニ他人へ讓渡ノ字  
句刪除

七年第六十四號布  
告ヲ以テ第九條削  
除

此相當代價何程

右ハ後來、、、、以下同

第三例

一反別何町何反何畝何步

此相當代價何程

此半金何程

右ハ後來、、、、以下同

第四例

一反別何町何反何畝何步

此相當代價何程

此半金何程

一立木何千何百何拾何本

此相當代價何程

右ハ後來、、、、以下同

第五例

一反別何町何反何畝何步

字何々

一本ニ付何程

何國何郡何村地内

荒蕪地

一反ニ付何程

何國何郡何村地内

官林

一反ニ付何程

松杉檜歟 雜木歟  
目通何尺廻リヨリ何尺廻リ迄  
一本ニ付何程

何國何郡何村地内

林場歟  
木立歟

此從前何稅何程

此相當代價何程

此半金何程

一立木何千何百何拾何本

此相當代價何程

右ハ後來、、、、以下同

○第四百二十七號 (十二月二十七日 輪廓附)(達)

各應金穀出納ノ順序等一定ノ方法無之ニ付今般右取扱ノ順序並書式勘定帳離形共別册頒布候條右ニ照準來明治七年一月ヨリ施行可致尤從前勘定帳ニ相添差出來候小謬證書ノ儀ハ爾後不及差出候此旨相達候事

但從前唱來候諸縣第一常備ハ常費第二常備ハ豫備凡積置米金ハ概費其他第二常備ヲ以繰替及ヒ臨時支給ノ費用ハ概シテ臨時費ト改稱シ且本年大藏省第百五十四號布達勘定書式ノ内一日本拂ノ分差繼拂ノ廉今般相達候勘定帳書式ノ通更正候條此旨可相心得事

(別册)

金穀出納順序

凡ソ金穀ヲ出納スルノ順序ハ須ク先ツ簿書ノ體裁ヲ精覈ニシ日々ノ入出ヲ遺漏錯雜ナキ様詳記スヘシ日日ノ計算精密ナレハ月計算計ニ至リ自ラ明瞭ニシテ獨調査考檢ノ勞費ヲ省クノミナラス矛盾差謬ノ弊ナキニ至ラン依テ茲ニ其處務ノ順序簿册ノ體裁ヲ約略左ニ掲ク

第一條

一官員月給並常費捕亡費概費金穀共毎年一月ヨリ六月迄ノ經費凡積ヲ立テ前年十一月迄七月ヨリ

十二月二十八日達  
委者七年十月十三日  
日本政官通同第四  
十六號第八年同第三  
十號第九百五十號  
通リ以テ改正

十二月マテノ分ハ其年五月迄大藏省ニ申請シ請取以テ一切ノ費用ニ充ツ其受取ノ手續等ハ大藏省ノ規則ニ從フヘシ

但前年十一月十二月三ヶ月分勘定任上殘金ノ内預備金ハ本年一月ヨリ六月迄ノ費用ヘ差繼其  
他ノ殘金ハ悉皆上納スヘシ尤判任官月給並捕亡費定額殘金ノ類ハ成規ノ如ク其廳ヘ備ヘ置ヘ  
キ

第二條

一金穀ノ出納ヲ登記スル帳簿ノ類ハ左ノ體裁ニ從フヲ則トス

日計簿 一冊

此簿册ハ本假納拂ハ勿論返納交換等ニ至ルマテ毎日出納スル一切ノ金穀ハ無洩員數及ヒ受  
入拂出ノ旨趣人名等ヲ式ノ如ク詳記シ納拂共ニ金ハ切符米ハ主任預リ證書ト同一ノ番號ヲ  
付シ主務ノ吏員檢印課長之ニ割印シ日毎ニ納拂ノ合計ヲ差引現在ノ有高ヲ算定シ而シ其記  
載スル費目ヲ部分シテ諸請拂帳追算簿差繼帳等ニ編入登記シ月末ニ至リ總計各種ノ入拂高  
ヲ區別シ以テ其編入スル所ノ帳簿合計ト照合スヘシ

金銀預ケ帳 銀行ニテハ 金銀預リ帳

同 請取帳

同 金銀上納帳

此簿册ハ縣廳ヨリ銀行等ヘ金銀ヲ預ケ或ハ預金ヲ取出ス時取替ノ證ニシテ元受帳二冊拂出  
帳二冊ヲ製シ金銀ヲ預ル時官ノ預ケ帳ト銀行預リ帳ト兩帳一様ノ證文ヲ登記シ預リ人ノ證  
印ヲ取り長官之ニ割印シ預ケ金ヲ拂出ス時ハ請取帳ト上納帳ト一様ニ記證シ前同様長官割  
印シ一帳ハ其廳ニ備ヘ置一帳ハ預リ人ヘ交付ス而シ其預金ヲ取出ス時並納金ヲ相預クル時  
ハ左ノ順序ニ從フヘシ

一 納金ハ納人ヨリ直ニ預リ人ヘ相渡預人ハ金質見改ノ上其員數事由及ヒ納人ノ姓名ヲ記セシ  
預切符ヲ納人ヘ渡スヘシ納人ハ此切符ヲ以テ廳ヘ上納スヘキナリ廳ニ於テハ式ノ如ク日計  
簿ニ登記シ長官名印ノ領收證書ヲ作り日計簿ト同一番號ヲ付シ主務ノ吏員檢印課長割印ノ  
上納人ニ下付ス而シテ切符ハ月末取束預リ帳ヘ移載シ長官之レニ割印シテ預リ人ヘ下戻ス  
ヘシ

一 預金ヲ取出ス時ハ其金員ト費用ノ要旨ト受取人ノ姓名トヲ載記セシ切符ヲ作り日計簿ト同  
一ノ番號ヲ付シ主務ノ吏員之レニ檢印シ課長割印ノ上受取人ニ交付ス受取人ハ此切符ヲ以  
テ預リ人ヨリ現金ヲ受取ヘキナリ右ノ切符ハ月末ニ至リ集計シテ預リ人ヨリ出サシメ日計  
簿ト照査シ切符ハ消抹シ而シテ預ケ帳ヘ其月出金總計若干預ケ金高若干ト通算登記シ共金  
員ヘ長官割印シ此差引殘金高ヲ以テ翌月預ノ元ニ立ツヘシ

一 凡ソ官金ヲ銀行等ニ預クルニハ例規ニ照シ相當ノ償アル不動産ヲ書入タル證券又ハ公債證  
書ヲ領收シ異日謬違ナキ様精密注意スヘシ

但不動産公債證書等ノ金高ニヨリ其預高ヲ參酌増減シ時々銀行等ニ至リ現金ヲ點檢スヘ  
シ

金穀請拂帳

日計簿金穀納拂ノ内本假ハ勿論重複混淆等ノ儀無之様一々點檢考査ノ上費目ニ隨テ部分登  
記シ而シ後精密算勘シテ元拂殘ノ合計差謬ナキヲ要シ以テ勘定帳仕組ノ根據トスヘシ

追算簿 一冊

凡日計簿ニ掲クル入拂ノ内決算ニ至ラサルモノハ本入拂ト錯綜ナラサル爲詳悉部分シテ如  
式此ノ帳簿ニ明瞭登記シ而シ假拂ノ廉決算ニ至ルルハ最前ノ假拂高ヲ悉ク一旦返納以テ假

拂ノ廉ヲ消抹シ其決算高ヲ更ニ日計簿拂ニ相立若シ半ハ決算濟半ハ未決算ノ節ハ前同様返納シテ假拂ノ廉一旦取消而シテ決算濟ノ分ハ日計簿未拂未決算ノ分ハ同帳假拂ニ立之ヲ追算簿ニ詳記シ順次如此爲サシメ月末ニ至リ之ヲ調査シテ決算ノ濟不濟ヲ辨別シ若夫レ決算遲緩ナルアレハ之ヲ督促スルヲ要ス

差繼帳 一册

此簿冊ハ日計簿ヨリ移載セシ官員月給常費其他總テ一旦本拂ニ相立ル後事故アリテ還納スルモノ及ヒ懲役備工錢ノ類出納重核セサルカ爲メ各種區分シテ其金員事由等ヲ詳細登記シ月末ニ至リ同種仕拂高ノ内へ差繼計算上錯雜ナキヲ要ス

諸渡米出欠差引帳

諸渡米ノ内欠減ハ勘定帳殘高ノ内ニテ差引拂ニ相立量出ハ上納スヘキ順序ナレ共右ハ出欠米差引計算ノ上其全石數ヲ可得ニ付此簿冊ヲ設ケ離形ノ如ク詳記シテ月末ニ至リ決算シテ日計簿ニ登記スヘシ

金穀有高表

此表面ハ各種毎日ノ元受高ト拂出高トノ差引ヲナシ殘金穀ノ現數ヲ一目瞭然タラシム故ニ諸受拂帳其他簿冊ノ合計ヲ移載ス可シ但シ長官之ヲ閱シ一々之ニ檢印シ以テ量爲ノ斟酌ヲナスヘシ

第三條

右之外計算上便利ノ爲メ各種ノ費用ヲ分別シテ計算簿類ヲ製スル等ハ其廳ノ便宜ニ從フヘシ

每月本廳ニ送致シ之ヲ本廳ノ勘定帳へ合算スヘシ

第四條

一 諸經費内譯調査ノ爲メ明細表離形ノ如ク一種毎ニ之ヲ製シ勘定帳一同大藏省へ送致スヘシ  
但諸上納ノ儀モ經費表式ニ倣ヒ毎種明細表ヲ製シ可差出尤貸渡並返納ノ分ハ勘定帳精密ニ付別段製表ニ不及事

第五條

一 不用物品其他賣拂代價手數料官宅宿料等總テ稅外ノ收入金ハ離形ノ如ク毎三月別ニ勘定簿冊ヲ製シ官宅修繕料ノ如キ備金ノ外ハ大藏省並同省主任各寮へ上納スヘシ  
但贖贖金ハ本年第十九號布告ノ通相心得勘定書ヲ添テ司法省へ上納スヘシ

第六條

一 凡ソ金穀ヲ出入スル細大トナク各課主務ノ者必ス考案ヲ具シ逐一其受拂フヘキ員數ト事款トヲ記シ回議ニ付シ長官ノ檢印ヲ經ルノ後タルヘシ假令急遽ノ際些少ノ員數ト云レ長官ノ檢印ナクシテ出納スルヲ許サス而シテ其檢印アル原書ハ宜ク分類編集シ以テ異日ノ照會ニ供スヘシ

第七條

一 官員備士及神官等ノ月給旅費等ニ至ル迄總テ支出スル所ノモノハ必ス受領ノ證書ヲ領收シテ切符ヲ交付シ日用器什買上代等現金交付セスシテ差支ル類ハ其月々費額ヲ見積若干ノ金員別ニ出納課へ受入置一月仕拂高精算相立殘金返還シ更ニ後月ノ費額ヲ受拂フヘシ而シテ徵取スル所ノ證書ハ其時々主任檢印ヲ加へ各款分類編集シテ後照ニ供スヘシ

第八條

一 懲役人等ハ專ラ授工服役ヲ以テ主トス故ニ其力役收入ヲ懲役場一切諸費用ノ元額ニ併セ支給シ

其消費收入トモ正算調理シ程式ニ從ヒ勘定帳ニ組入ルヘシ

第九條

一管下士庶人ヨリ金穀ヲ獻納セント乞フ者アレハ壬申正月第十七號公布ニ照シテ稟議處分シ其官費ニ係ル學校病院堤坊營繕及諸工業ノ費ヲ補フモノハ其納ル所ノ金穀ヲ費用ノ元額ニ組ミ詳細勘定書ヲ製シテ節次大藏省文部省工部省等事務所轄ノ廳ヘ送致ス可シ

第十條

一豫備繰替金請求ノ儀ハ三ヶ月宛取束別紙雛形ノ如ク仕譯書副ヘ大藏省ヘ申牒スヘシ尤繰替高相嵩ミ元金欠乏ニ至ル時ハ三ヶ月ヲ不待シテ請求スヘシ

第十一條

一毎年十二月ニ至リ翌全年ノ經費概算表ヲ大藏省ニ於テ編製シ正院ヘ上申可致答ニ付各廳所管一切ノ費用翌年ノ目的ヲ立常費臨時費ヲ區分シ詳明ニ列載セル概算帳ヲ作り十一月十五日限同省ヘ送致スヘシ

(以下勘定帳等雛形略ス)

○第四百二十八號 (十二月二十七日 輪廓附)(達)

院 省

各廳出納ノ順序等一定ノ方法無之ニ付今般右取扱ノ順序並書式勘定帳雛形共別册頒布候條右ニ照準來明治七年一月ヨリ施行可致尤從前勘定帳ニ相添差出來候小謬證書等ノ儀ハ爾後不及差出候此旨相達候事

但本年大藏省第五百四十四號布達勘定書式ノ内一旦本拂ノ分差繼拂ノ廉ハ今般相達候勘定書式ノ通更正候條此旨可相心得事

(別册)

七年十月十三日太政官達第四百四十八號及第四百四十九號以テ改正

金穀出納順序

凡ツ金穀ヲ出納スルノ順序ハ須ク先ツ簿書ノ體裁ヲ精駁ニシ日々ノ出入ヲ遺漏錯雜ナキ様詳記スヘシ日々ノ計算精密ナレハ月計歲計ニ至リ自ラ明瞭ニシテ獨リ調査考檢ノ勞費ヲ省クノミナラス矛盾差謬ノ弊ナキニ至ラン依テ其處務ノ順序簿書ノ體裁ヲ約略左ニ掲ク

第一條

一常額金ハ年額ヲ十二分シ毎月初旬大藏省ヨリ受取以テ定限ノ費用ニ充ツ其受取ノ手續ハ大藏省ノ規則ニ從フヘシ

第二條

一金穀ノ出納ヲ登記スル帳簿ノ類ハ左ノ體裁ニ從フヲ則トス

日計簿 一册

此簿册ハ本假納拂ハ勿論返納交換等ニ至ル迄毎日出納スル一切ノ金穀ハ無漏員數及ヒ受入拂出ノ旨趣人名等ヲ式ノ如ク詳記シ納拂トモニ金ハ切符米ハ預リ人證書ト同一ノ番號ヲ付シ主務ノ吏員檢印課長之ニ割印シ日毎ニ納拂ノ合計ヲ差引現在ノ有高ヲ算定シ而シテ其記載セシ費目ヲ部分シテ諸受拂帳及ヒ追算簿差繼帳等ニ編入登記シ月末ニ至リ總計各種ノ入拂高ヲ區別シ以テ其編入スル所ノ帳簿合計ト照合スヘシ

銀行ニテハ

同預リ帳

同斷

同上納帳

金銀受取帳

此簿册ハ官廳ヨリ銀行等ニ金銀ヲ預ケ或ハ預金ヲ取出ス時取替ノ證ニシテ元受帳ニ册拂出帳



二冊ヲ製シ金銀ヲ預ル時官ノ預ケ帳ト銀行預リ帳ト兩帳一様ノ證文ヲ登記シ預人ノ證印ヲ取  
リ長官陸軍省監督長海軍省主計大監工部省合之ニ割印シ預ケ金ヲ拂出ス時ハ受取帳ト上納  
帳上一様ニ記證シ前同様長官割印シ一帳ハ其廳ニ備置一帳ハ預人ニ交付ス而シテ其預金ヲ取出  
ス時並納金ヲ相預クル時ハ左ノ順序ニ從フヘシ

一納金ハ納人ヨリ直ニ預リ人ニ相渡預リ人ハ金質見改ノ上其員數事由及ヒ納人ノ姓名ヲ記セシ  
預リ切符ヲ納人ニ渡スヘシ納人ハ此切符ヲ以テ廳ニ上納スヘキナリ廳ニ於テハ式ノ如ク日計簿  
ニ登記シ長官名印ノ領收證書ヲ作り日計簿ト同一ノ番號ヲ付シ主務ノ吏員檢印課長割印ノ上  
納人ニ下付ス而シテ切符ハ月末取束ヲ預リ帳ニ移載シ長官コレニ割印シ預人ニ下戻スヘシ  
一預金ヲ取出ス時ハ其金員ト費用ノ要旨ト受取人ノ姓名トヲ載記セシ切符ヲ作り日計簿ト同一  
ノ番號ヲ付シ主務ノ吏員之ニ檢印シ課長割印ノ上受取人ニ交付ス受取人ハ此切符ヲ以テ預リ  
人ヨリ現金ヲ受取ヘキナリ右ノ切符ハ月末ニ至リ集計シテ預リ人ヨリ出サシメ日計簿ト照査  
シ切符ハ消抹シ而シテ預ケ帳ニ其月出金總計若干預ケ金高若干ト通算登記シ其金員ニ長官割印  
シ此差引殘金高ヲ以テ翌月預ノ元ニ立此ノ金高ヲ預ケ人ト預リ人ト雙方ヨリ五日迄ニ大藏省  
ニ届出ヘシ

一凡ソ官金ヲ銀行等ニ預クルニハ例規ニ照ラシ相當ノ價アル不動産ヲ書入タル證券又ハ公債證  
書ヲ領收シ異日謬違ナキ様精密注意スヘシ  
但不動產公債證券等ノ金高ニヨリ其預ケ高ヲ參酌増減シ時々銀行等ニ至リ之ヲ點檢スヘ  
シ

金穀受拂帳 各冊

日計簿金穀納拂ノ内本假ハ勿論重複混淆等ノ儀無之様一々點檢考査ノ上費目ニ隨テ部分登記  
シ

追算簿 一冊

シ而后精密算勘シテ元拂殘ノ合計差懸ナキヲ要シ以テ勘定帳仕組ノ根據トスヘシ  
凡日計簿ニ掲グル入拂ノ内決算ニ至ラサルモノハ本入拂ト錯綜ナラサル爲詳悉部分シテ如式  
此帳簿ニ明瞭登記シ而シテ假拂ノ廉決算ニ至ルハ最前ノ假拂高ヲ悉ク一旦返納以テ假拂ノ廉  
ヲ消抹シ其決算高ヲ更ニ日計簿ニ相立若シ半ハ決算半ハ未決算ノ節ハ前同様返納シテ假拂  
ノ廉一旦取消而シテ決算濟ノ分ハ日計簿本拂未決算ノ分ハ同帳假拂ニ立コレヲ追算簿ニ詳記  
シ順次如此ナサシメ月末ニ至リ之ヲ調査シテ決算ノ濟未濟ヲ辨別シ若シ決算遲緩ナルアレハ  
之ヲ督促スルヲ要ス

差繼帳 一冊

此簿冊ハ日計簿ヨリ移載セシ官員備士ノ月給旅費等總テ一旦本拂ニ立ル後事故アリテ返納ス  
ルアレハ出納重複ナラサル爲メ各種分別シテ其金員事由等ヲ詳細登記シ月末ニ至リ同種仕拂  
高ノ内ニ差繼計算上錯雜ナキヲ要ス

金穀有高表

此表面ハ各種毎日ノ元受高ト拂出高トノ差引ヲナシ殘金穀ノ現數ヲ一目瞭然タラシム故ニ諸  
受拂帳其他簿冊ノ合計ヲ移載シテ可ナリ但長官之ヲ閱シ一々之ニ檢印シ以テ量爲ノ斟酌ヲナ  
スヘシ

右ノ外計算上便利ノ爲メ各種ノ費用ヲ分別シテ計算簿類ヲ製スル等ハ其廳ノ便宜ニ從フヘシ

第三條

一支廳ハ一ヶ所毎ニ豫メ定額ヲ立定シ毎月本廳常額金ノ内ヲ以テ支派シ日計簿ヨリ之ヲ追算簿ニ  
移載シ漸次決算スヘシ其出納簿記ノ體裁ハ本廳ノ順序ニ倣ヒ勘定帳式ノ如ク整理シテ毎月本廳

ニ送致シ之ヲ本廳ノ勘定帳ニ合算スヘシ

第四條

一 額内外トモ經費内譯調査ノ爲メ明細表離形ノ如ク一種毎ニ之ヲ製シ勘定帳一同大藏省ニ送致ス  
ヘシ尤陸軍省教導團表面ノ如キハ従前ノ通ニテ妨ナシ  
但上納モノ、分モ經費表面ニ做ヒ毎種明細表ヲ製スヘシ

第五條

一 本廳支廳ニ於テ不用物品其外賣却代價又ハ手数料等一切收入スル金額ハ離形ノ如ク每一月別ニ  
勘定簿冊ヲ整理シ大藏省ニ上納スヘシ  
但支廳ノ分ハ本廳勘定帳ニ合算スヘシ

第六條

一 凡ソ金穀ヲ出入スル細大トナク主務ノ者必ス考按ヲ具シ逐一共受拂フヘキ員數ト事款トヲ掲ケ  
テ週議ニ付シ長官ノ檢印ヲ經ルノ後タルヘシ假令ヒ急遽ノ際些少ノ員數ト云フトモ長官ノ檢印  
ナクシテ出納スルヲ許サス而シテ其檢印アル原書ハ宜ク分類編集シ以テ異日ノ照會ニ供スヘシ

第七條

一 官員備士等ノ月給旅費等ニ至ル迄總テ支出スル所ノモノハ必ス受領ノ證書ヲ領收シテ切符ヲ交  
付シ日用器什買上代等現金交付セスシテ差支ル類ハ其月々費額ヲ見積若干ノ金員別ニ出納課ニ  
受入置毎月仕拂高精算相立殘金返還シ更ニ後月ノ費額ヲ受拂フヘシ而シテ徵取スル所ノ證書ハ其  
時々主任檢印ヲ加ヘ各款分類編集シテ後照ニ供スヘシ

第八條

一 每年十一月ニ至リ翌全年其廳所管ノ費用一切ノ目的ヲ立常費臨時費ヲ區分シ詳明ニ列載セル概

七年太政官第二十  
七號達ヲ以テ更正

算帳ヲ作り之ヲ大藏省ニ送付ス於同省ハ院省使府縣ノ概算ヲ集計シテ一表ヲ製シ前年十二月限  
正院ニ上申スヘシ  
(以下勘定帳等離形略ス)

○第四百二十九號 (十二月二十七日)(布)

賣藥取締ノ備明治五年壬申七月第二十二號布告ヲ以廢止候處今般更ニ文部省於テ致檢査候條藥味  
分量及用法功能等取調製劑相添管轄廳ヲ經テ同省ニ可伺出此旨布告候事  
司法省府縣

○第四百三十號 (十二月二十七日)(輪廓附)(達)

本年十一月第三百九十二號達書選卒番人賞與規則左ノ通追加候條此旨相達候事  
一 水ニ溺ル、者ヲ救援セシ者  
金 五拾錢ヨリ  
貳 圓マテ  
但共時ノ難易ニヨリ其實ヲ定ム  
院省使府縣

○第四百三十一號 (十二月二十八日)(輪廓附)(達)

官祿稅被設候段別紙ノ通相達候條明治七年一月ヨリ奉仕ノ官廳ニテ致收入院省及東京府ハ毎月開  
拓使京阪二府並諸縣ハ每三月取束收稅帳相添大藏省ニ納方可取計此旨相達候事  
(別紙)  
院省使府縣

○第四百三十二號 (十二月二十八日)(達)

即今内外國事多端費用夥多ノ折柄ニ付陸海軍資ノ爲メ明治七年以後當分ノ所官祿稅被設候條勅  
任官三百五拾圓以上ハ十分一奏任官一百圓以上ハ二十分一ノ割合ヲ以毎月其廳ニ上納可致此旨  
相達候事  
院省使府縣

○第四百三十三號 (十二月二十八日)(達)

來明治七年一月ヨリ達書布告ヲ區別シ各自ニ番號ヲ附シ候條此旨相達候事  
院省使  
○第四百三十三號 (十二月二十八日)(達)

明治六年十二月 太政官 第四百二十九號 第四百三十號 第四百三十一號 第四百三十二號

八年第百十二號布  
告十年第七號布告  
ニ依リ消滅

七年太政官第三十  
五號達ヲ以テ削除

十二年太政官第五  
十二號達ヲ以テ廢  
止

七年太政官第十六  
號達參看

十年太政官第三號  
第九號達ヲ以テ稅  
額ヲ改ム

十九年勅令第一號  
ニ依リ消滅

雇外國人在東京ノ分委任官以上ニ准スヘキ者ハ來一月一日午後第二時宮内省へ名刺ヲ以テ參賀候  
様可相達此旨更ニ相達候事

九年第四十八號布  
告ヲ以テ廢止

○第四百三十四號 (十二月二十八日 輪廓附)(布)

改定律例第七十六條左ノ通改正候條此旨布告候事

凡府縣官吏ハ知事及ロ令ヲ長官ト爲シ參事ヲ判官ト爲シ屬ヲ主典トナス其公罪ヲ犯ス者ハ此例ニ  
依リ遞減シテ罪ヲ科ス

十一年太政官第五  
十六號通ニ依リ消滅

○第四百三十五號 (十二月二十八日 輪廓附)(達)

有位華族ノ内院省使府縣判任官及教導職ノ向ハ新年紀元節天長節三宴會賜饌ノ儀各其族ヲ以テ取  
扱委任官同様下賜候條左ノ通可相心得此旨相達候事

八年太政官第百八  
十號通ニ依リ消滅  
以下同シ

一有位華族ニテ院省使府縣判任官及教導職奉職在東京ノ者ハ宮中ニ於テ下賜候事  
但時ニ依リ東京府廳ニ於テ下賜候事

一有位華族ニテ院省判任官及教導職ノ輩他所出張ノ者ハ其代料式部寮或ハ東京府ヨリ該廳へ送致  
候條本人へ可相渡事

一有位華族ニ使府縣判任官奉職在東京ノ外ハ該廳ニ於テ下賜候事  
但他所出張ノ者ハ該廳ヨリ代料可相渡事

八年太政官第百八  
十號通ニ依リ消滅

○第四百三十六號 (十二月二十八日 輪廓附)(布)

府縣東京府ヲ外屬並各地寄留ノ有位華族新年紀元節天長節三宴會酒饌賜方左ノ通相定候條此旨華  
族へ布告スヘキ事

一京都大阪並各縣實屬ノ輩其管轄廳ニテ下賜候事

一前條ノ輩東京寄留ノ節ハ東京府實屬同様宮中ニテ下賜候事

但時ニ仍リ東京府廳ニ於テ賜候事

一東京府實屬ノ輩他府縣へ寄留並甲ノ府縣實屬ノ輩乙ノ府縣へ寄留ノ節ハ其寄留廳ニテ下賜候事

○一月四日(迴達)(正院)

來ル八日九日陸軍海軍始ニ候得共休暇無之候間此段爲心得相達候也

院省使府縣局へ

○一月八日(達)(正院)

大手坂下兩御門内襟卷之儘通行不苦候條此旨其筋へ可被相達候也

陸軍省へ

○一月八日(正院局通シ)

來ル十八日歌御會始ニ付歌道ニ心掛有之輩ハ來ル十七日中ニ宮内省へ詠進可有之候也

御題 新年祝道

懷紙端作不及季附候事

諸省使

○一月九日(沙)

東京府下諸官省使寮司御用地ノ儀ニ付別紙ノ通東京府へ相達候條自今 皇城ヲ除ノ外一切地券受  
置區入費出金可致事 (別紙ハ次ニ載ス)

東京府

府下諸官省使寮司御用地ノ儀地租區入費出金ノ儀確定無之ニ付テハ箇所限坪數取調悉皆地券相渡  
區入費可受取且從前ノ御用地ハ各所御用ノ次第柄委曲爲申出具ニ大藏省へ可申立事

諸省使

○一月九日(迴達)(正院)

各省寮司御用地買入拂下等之儀ニ付昨壬申十一月相達置候趣モ有之候得共今度別紙之通御達相成  
候條此段可被相心得候也 (別紙ハ次ニ載ス)

第三百三十一號第  
四百八號ニ依リ消滅

明治六年一月 大政官 (番外並無號)

第三百三十一號第  
四百八號ニ依リ消

同 上

十五年第八號布告  
ニ依リ消滅

戊辰ハ庚午ノ誤リ  
ナラン  
制度變革ニ依リ消

同 上

八年第六十二號  
布告ヲ以テ改定

○一月九日(沙)

諸省開拓使  
自今地所入用ノ節ハ其地方官へ掛合故障無之候ハ、伺ノ上買上方可取計且御用地不用相成候節省  
使限拂下候儀不相成候條其時々地方官へ返附可致事

○一月九日(沙)

府 縣  
自今諸官省使寮司ニテ地所入用ニ付買上ノ儀打合セ有之候ハ、故障ノ有無有稅地無稅地ノ次第相  
札處分ノ儀見込相立其時々大藏省へ可申立事

○一月九日

大藏省

商船ノ儀西洋形日本製共噸數積石ニ應シタル稅金通商司へ相納候條去庚午正月申布告相成候處北  
海道ノ儀ハ遠海隔絶ノ地ニ付別段ノ御處置ヲ以難形通ノ鑑札開拓使ヨリ相渡稅金モ同使へ收入致  
シ度同年十月中同使ヨリ伺出許可相成居候然ル處辛未八月五日船稅規則更正相成候へ共北海道ノ  
儀ハ戊辰年開拓使伺ノ通右船稅ハ諸稅同條同使へ收入候條此旨相達候也

○一月九日(正院)

華族府問

華族府問詰ノ向ハ是迄布告類正院ヨリ直ニ相達來候處以來管轄廳ヨリ相達御諮詢等ニ付府問  
詰ノ向ニ限リ御達有之節ハ是迄ノ通正院ヨリ御達相成候條此段爲心得相達候也

○一月九日(正院)

東京府へ

華族府問詰ノ向ハ別紙ノ通御達相成候條以來布告類其府ヨリ可相達候也(別紙ハ上ノ華族府問詰  
○一月十日 (徵兵令ハ陸軍省ヨリ發布スル所ナリ然レト) (モ太政官布告全書ニ之ヲ載ス故ニ此ニ掲ク) 諸省府縣へ

徵兵令

兵ヲ徵スルノ方法ハ國家ノ大典忽ニスヘカラサル者ニシテ又之ヲ實踐ニ行フノ難キ固ヨリ言フ俟

タス其法タル古今其制ヲ異ニシ各國其趣ヲ同フセスト雖モ要スルニ一ニ民兵ニ因ラサル者ナシ所  
謂民兵ニ二種アリ曰壯兵曰賦兵是ナリ賦兵ナル者ハ全國ノ丁壯ヲシテ兵役ヲ帶ハシメ陸軍ノ兵員  
ヲ充タシ其内沿海ノ住民舟楫波濤ニ慣レシ者ヲ以テ海軍ノ兵員ニ充ツ而シテ壯兵ハ自ラ兵役ヲ望  
ミ出シ者ニシテ服役數年ヲ帶ヒ普ク武技ニ熟練シ一團精兵トナリ頗ル其便益ヲ得ル然レ後日ニ至  
リ或ハ弊害ヲ生スル無キ能ハス是故ニ壯兵ノ法ヲ廢シ賦兵一般ノ制度ヲ建ント欲ス竊ニ各國賦兵  
ノ制ヲ考フルニ大率服役八年乃至二十年ヲ以テ程度トス今 國朝實ニ始テ賦兵ノ大典ヲ起サント  
スルニ方リ兵役ノ久シキ恐ラクハ人民生活ノ業ヲ妨害シ且當今ノ國力ニ於テモ關係無シト謂フヘ  
カラス爰ニ於テ斟酌其宜ヲ採リ折衷其要ヲ拔キ現今實際ニ行フノ法ヲ定メ題シテ徵兵令ト云

徵兵編成並概則

徵兵ハ國民ノ年甫メテ二十歳ニ至ル者ヲ徵シ以テ海陸兩軍ニ充タシムル者ナリ今爰ニ陸軍ヲ大別  
シテ二種トナス其一常備軍其二後備軍其三國民軍是ナリ又其兵丁ノ身材ニ從ヒ五派ノ兵種ニ區別  
ス曰砲兵曰騎兵曰歩兵曰工兵曰輜重兵而シテ各種ノ兵皆各管領臺ノ國郡ヨリ召集シ若干年ノ役ヲ  
帶ハシメ所管領臺ニ備ヘ以テ地方ノ守衛ニ充ツ

其一 常備軍ハ本年徵兵ノ抽籤セシ者ヲ以テ編成シ三ヶ年ノ役ヲ帶ハシムル者ナリ

第一條 在營中定額ノ日給ヲ與ヘ其他服類共官費タルヘシ

第二條 強壯ニシテ技藝ニ熟シ行狀正シキ者ハ拔擢シテ近衛兵ニ充ツ

但近衛兵規則別ニ記ス

第三條 士官ノ望アル者ハ願ニ從テ檢査ノ上管下教導隊ニ入レ學業進歩ノ上ハ上下士官ニ任ス

第四條 技藝ニ熟シ才氣アル者ハ人撰ヲ以テ其隊ノ下士官ニ任ス

第五條 下士官ニ任セラレタル者ハ更ニ七ヶ年以上ノ役ヲ帶ハシメ後備兵籍ヲ除ス最其人材ニ

從テ後備軍ノ上下士官ニ任ス

第六條 兵卒ハ總テ三ヶ年ノ服役ヲ有スト雖モ太平閑暇ノ時ハ服役二ヶ年以上ニシテ技藝熟練スル者ハ詮議ノ上歸休ヲ許ス

歸休證書並規則

年 號	何府縣何郡所住居何族或職業	何 某
	常備第何番 入營第何番	
徵 兵	右入營以來操練ニ勉勵シ其他勳方宜敷候ニ付向キ何ヶ月ノ間休暇申付候最非格ノ節ハ布令次第早キ歸營可致事	
年號 月 日	第何軍管	何 領 臺

第一則 銃器服類屬具共保存ノ手當ヲナシ姓名番號ヲ記シ一ツ書ニシテ給養士官ニ引渡シ置クヘシ

第二則 歸休中ト雖モ在營ノ心得ヲ以テ他出スルモ其管内ヲ出ルヲ禁ス

第三則 歸休中萬一病氣ニテ期限通り歸營相成リ難キ者ハ醫師ノ證書及ヒ府縣ノ證印ヲ以テ届出ヘシ若又父母ノ重病並ニ死没等止ムヲ得サル事故出來ノ者ハ醫師ノ證書並ニ共事故ニ係ハル親族及ヒ府縣ノ證印ヲ以テ願出ル者ハ詮議ノ上日數ヲ定メ之ヲ許ス

其二 後備軍ハ常備軍三ヶ年ノ役ヲ勤メ終リシ者ヲ以テ編成シ常ニ家居シ產業ヲ營マシム復之ヲ

別チテ二種トナス曰第一後備軍曰第二後備軍是ナリ

第一後備軍ハ二ヶ年ノ役ヲ帶ハシメ戰時ニ當リテハ直チニ召集シ常備軍ニ加ヘ其員ヲ充具セシム可キヲ以テ一歲ニ一度屯營ニ召集シ其技ヲ復習セシムル者ナリ

第一條 屯營中ハ定額ノ日給ヲ與ヘ其他服類共官費タルヘシ

第二條 技藝ニ熟シ才氣アル者ハ服役中同軍ノ下士官ニ任ス

第三條 復習ヲ終ヘ歸郷ノ節ハ銃器服類屬具共保存ノ手當ヲナシ姓名番號ヲ記シ一ツ書ニシテ給養士官ニ引渡シ置クヘシ

第四條 服役中他出スルモ管内ヲ出ルヲ禁ス若シ止ムヲ得サル事故アル時ハ其領臺ニ願出免許ヲ請フヘシ最復習期限ニ妨碍スヘカラス

第二後備軍ハ第一後備軍二ヶ年ノ役ヲ勤メ終リシ者ヲ以テ編成シ尙二ヶ年ノ役ヲ帶ハシメ全國大舉ノ時ニ當リ召集スヘキ兵タルヲ以テ平時屯營召集ヲ要セサル者ナリ

但服役中自己ノ管内ヲ出ル時ハ出入並ニ其往ク先キ共詳細ニ其領臺ヘ届出ヘシ最第一後備軍非常屯集ノ節ハ早キ管内ヘ歸ルヘシ

總テ徵兵ノ服役期限ニ滿ル者ト雖モ戰時ハ勿論非常ノ事故アル時ハ其期ヲ延サハルヲ得ス

其三 國民軍ハ常備後備兩軍ノ外ニ全國ノ男兒十七歳ヨリ四十歳迄ノ者悉ク兵籍ニ載セ置キ全國大舉ノ役アルニ方リ均シク隊伍ニ編入シ以テ管内ノ守衛ニ供スル者ナリ

第一章 徵兵官員並職掌  
第一條 徵兵使  
陸軍中佐或ハ少佐ノ内一人之ニ任シ府縣ニ出張シ知事令參事ト贖シ徵兵ノ諸務ヲ總管ス但時宜ニ由リテハ副使ヲ遣ハシ代理セシム

八年第十七號布告  
ヲ以テ文中改正

第二條 徵兵副使

陸軍大少尉ヲ以テ之ニ任ス人員ハ巡迴府縣ノ大小ニ應シ正使ヲ佐ケ議官及ヒ一等軍醫副以下ノ醫官ト共ニ郡邑ヲ巡行シ徵兵規則内ノ事件ヲ決議シ抽籤等ノ事ヲ掌ル

第三條 書記

陸軍中少録ヲ以テ之ニ任ス人員二人乃至三人トス徵兵使ノ諸記録ヲ掌ル

第四條 議長

府縣ノ知事令參事ノ内一人之ニ任ス徵兵ノ事ニ付審斷判決ノ事ヲ掌ル

第五條 議官

典事屬ノ内ヲ以テ之ニ任ス人員ハ徵兵副使ノ數ニ准ス徵兵副使ト共ニ郡邑ヲ巡行シ職掌議長ニ亞ク

第六條 議員

戶長或ハ副戶長ヲ以テ之ニ任ス人員ハ大抵其検査スル所ノ區數ニ倍ス最時宜ニ由テ増減シ公文ヲ布達シ民情ヲ上伸スル事ヲ掌ル

第七條 二等軍醫一人

徵兵使ニ從ヒ兵丁ノ身材骨格兵役ニ適スルヤ否ヲ検査スル事ヲ掌ル

第八條 一等軍醫副ヨリ試補ニ至ル

徵兵副使ニ從ヒ郡邑ヲ巡迴ス職掌二等軍醫ニ同シ人員ハ徵兵副使ノ數ニ准ス

第九條 備醫

府縣ノ撰ヲ以テ之ヲ命ス人員ハ其検査スル所ノ區數ニ准シ軍醫ニ從ヒ地質ニ生スル所ノ疾病ヲ上告シ兼テ史生ヲ助ケ検査ノ事件ヲ記録ス

同上

同上

同上

第十條 史生

府縣ノ撰ヲ以テ之ヲ命ス人員適宜ニ任スト雖モ大抵議員ノ數ニ准シ検査抽籤中ノ件々ヲ記録スル事ヲ掌ル

第十一條 徵兵使並ニ議長二等軍醫ハ各府縣ニ滞在シ徵兵ニ關スル諸務ヲ總裁ス書記之ニ屬ス副使議官一等軍醫副以下備醫共組ヲ立テ各區ニ分行スル者トス

第十二條 徵兵諸官ハ一歳ノ徵兵事務ヲ竣レハ悉ク職ヲ解ク者トス

第二章 徵兵使巡行並検査前事務

第一條 徵兵使巡行ハ二月十五日ヨリ始メ第一章中第一條第二條ニ揭示シタル陸軍武官並ニ軍醫等一行トナリ府縣ニ出張シ地方ノ諸官ト合議シ徵兵署ヲ設ケ常備ノ定員ヲ充タスヲヨリ後備軍ノ出入免役願出ノ者等總テ徵兵ニ關スル事務ヲ裁判ス其出務ノ時間ハ大抵本省ニ准スト雖モ速ニ事務ヲ竣ルヲ要スルヲ以テ時刻ヲ變易スルハ時宜ニ由ルヘシ

第二條 代人料上納兵役免除ヲ願出シ者ハ第六章中ノ第十五條第十六條ニ揭示シタル書面ヲ以テ寫ト取札シ開届ノ上連名簿中本人姓名ノ上ニ徵兵署免役ノ檢印ヲ押スヘシ

第三條 府縣ヨリ陸軍省ヘ差出シタル徵兵連名簿ヲ照シ當府縣ニ於テ當年徵兵幾人其内兵種相當ノ人員及ヒ補充ノ員數ヲ算定シ又免役連名簿並ニ箇條書取札シ中ニ就テ學徒ハ學校ノ證書及ヒ科目免許書等點檢ノ上紛レナキ者ハ姓名ノ上ニ徵兵署免役ノ檢印ヲ押スヘシ

第四條 徵兵ニ採ルヘキ者ハ皆軍人ヲ以テ處置ス故ニ免役規則ニ適スル者ヲ除クノ外如何ナル苦情之レアルトモ決シテ開届クヘカラス最戶長ヨリ故障詳細書ヲ以テ申立ル者ハ此限ニアラス

第三章 常備兵免役概則

第一條 身ノ丈ケ五尺一寸曲未滿者

第二條 羸弱ニシテ宿病及ヒ不具等ニテ兵役ニ堪サル者  
 第二條 官省府縣ニ奉職ノ者  
 但等外モ此例ニ准ス

第四條 海陸軍ノ生徒トナリ兵學寮ニ在ル者

第五條 文部工部開拓其他ノ公塾ニ學ロタル專門生徒及ヒ洋行修業ノ者並ニ醫術馬醫術ヲ學ブ者  
 但教官ノ證書並ニ何等科目ノ免許書アル者科目ノ等未定

第六條 一家ノ主人タル者

第七條 嗣子並ニ承祖ノ孫

第八條 獨子獨孫

第九條 罪科アル者

但徒以上ノ刑ヲ蒙リタル者

第十條 父兄存在スレ共病氣若クハ事故アリテ父兄ニ代リ家ヲ治ル者

第十一條 養子

但約束ノミニテ未タ實家ニアル者ハ此例ニアラス

第十二條 徵兵在役中ノ兄弟タル者

第四章 徵兵検査

第一條 徵兵検査定日ハ三日以前ニ徵兵署ヨリ郡々各區へ布達シ區括リ日割リヲ以テ一日幾人ト定メ戸長副戸長ノ内順序ニ召連出ヘシ

第二條 徵兵使巡行ノ時節ニ至レハ府縣廳ヨリ各區ニ左式雛形ノ如ク野紙ヲ渡シ本年徵兵タル者ニ一枚宛渡シ朱書ニテ示シタル如ク姓名産國住居親ノ名或ハ兄叔伯總テ育ミシ者ノ名本年月日

七年第七十號布告  
 第九條但書改正

第四百三號ヲ以テ  
 第九條但書改正

誕生年號月日其他野紙題號ノ下ニ父母ノ存亡ハ勿論同居ノ祖父母兄弟妻子及ヒ氏神宗門等書載  
 セ人別表ト稱ヘ検査ノ時各個持參シ軍醫ニ渡スヘシ  
 區々ニ渡シタル野紙ノ殘リハ徵兵事務竣ルノ後府縣廳へ返納スヘシ  
 人別表  
 (印ハ朱字)

何郡所産		何府縣何族或職業		何郡所住		何府縣何族或職業		何郡所産		何府縣何族或職業		何郡所住		何府縣何族或職業	
兵		徵		年		月		日		生		年		日	
親		祖		兄		弟		妻		子		門		宗	
男		女		男		女		男		女		男		女	
職		族		名		年		日		數		氏		神	
業		數		日		號		號		號		號		號	
何		某		何		某		何		某		何		某	

但産國ト當時ノ貫屬府縣ト異ナル者ハ表首何郡所産ト書スルノ上ニ其産國ノ府縣ヲ加ヘ若又  
 寄留スル所ニ於テ服役スル者ハ何郡所住ト書スルノ替リニ其寄留スル府縣及ヒ何郡所寄留ト  
 書スヘシ  
 第三條 徵兵ノ體質ヲ検査スル時ハ徵兵副使議官各一名列坐検査ノ件々ハ總テ軍醫ノ專任タルヘ

第四條 徵兵検査ノ席ニ出ル時ハ各個人別表ヲ所持シ醫官ニ渡ス醫官ハ書記ヲ掌トル者ニ渡シ姓名ヲ検査簿ニ留メシメ身體骨格検査ノ件ヲ記セシム

第五條 検査呼出シノ時ニ病氣ニテ出席成リ難キ者ハ其家ニ就キ診斷ノ上一時或ハ固着等ノ病質ヲ糺シ一時病氣ノ者ハ翌年ノ徵兵ニ迴シ固着ノ者ハ免役規則宿病ノ者同斷タルヘシ

第六條 検査呼出シノ時ニ父母ノ喪ニ罹リ未タ三週間ヲ過キサル者或ハ父母ノ重病及ヒ一家ノ安危ニ係リ一時止ムヲ得サル事故出來ノ者ハ夫々詳細書及ヒ戸長ノ證印ヲ以テ願出ル者ハ翌年ノ徵兵ニ迴スヘシ

但翌年ニ迴スヘキ徵兵ハ府縣毎ニ別簿ニ認メ徵兵署ノ檢印ヲ押シ府縣廳ヘ留置キ當冬ノ徵兵連名簿ト共ニ陸軍省ヘ差出スヘシ

第七條 徵兵署ニ隔リタル郡邑ハ副使一等副以下ノ軍醫議官及ヒ史生一行トナリ郡邑高ニ應シ分界ヲ立テ組ヲ分チ巡迴セシメ相應ノ場所ニ於テ假ニ検査場ヲ設ケ其式本署ニ異ナルコトナシ

第五章 抽籤並算筆試驗

第一條 身体検査終リタル後検査簿ヲ案シ兵役ニ適スヘキ者ヲ點檢シ府縣毎ニ常備抽籤召集ノ爲メ其定日及ヒ場所共三日以前ニ布達スヘシ

第二條 抽籤ノ場所ハ府縣下或ハ管内便宜ノ地ヲ以テス

第三條 抽籤ヲ五種ニ分チ其身材ニ從ヒ歩騎砲工輜ノ籤ヲ抽カシム

第四條 本年常備ノ缺員ヲ補フ爲メ補充兵トシテ一ケ年ヲ期トシ常備一ケ年ノ徵員二分ノ一以内ノ員數ヲ常備籤ト同時ニ抽カシム

第五條 抽籤ノ法ハ籤丁ヲ調ヘ左式雛形ノ如ク籤札ニ其員數丈ケノ番號ヲ記シ籤箱ニ納レ籤簿方ノ側ニ置キ區分ケ或ハ郡分ケニシテ混雜セサル様一人宛之ヲ抽カシメ籤簿方ハ始終籤簿ニ對シ

八年第十七號布告  
ヲ以テ文中改正

抽籤ノ正不正ヲ檢シ抽キ舉レハ其番號ヲ自ラ高聲ニ唱ヘシメ籤札ヲ受取り籤簿ニ姓名番號ヲ記シ復當人ニ返ス

假令ハ籤丁五百人ナルハ第一番ヨリ五百番迄ノ札ヲ納レ之ヲ抽カシム本年常備定員二百人補充百人ナルハ二百番迄ノ籤ヲ抽キシ者ヲ常備トナシ二百一番ヨリ三百番迄ノ籤ヲ抽キシ者ヲ補充トシ其餘ヲ以テ落籤トス

(歩) (騎) (砲) (工) (輜)
籤札ハ厚紙縱橫三ツ或ハ四ツ切ニシテ四ツ折ニナシ中分ヲ捻ル
何番

第六條 抽籤當日病氣ノ者ハ其親戚ハ親族時トシテハ戸長ヲ以テ代人トス

第七條 籤丁ニ當府縣ニ於テ常備幾人補充幾人及ヒ籤丁ノ總員幾人ト抽籤以前ニ申聞セ置クヘシ

第八條 抽籤終リ常備及ヒ補充ニ當リタル者ハ書翰往復算筆等出來得ルヤ否ヤヲ試ムヘシ

第九條 書翰並ニ算筆ノ試驗ハ史生ノ内算筆ヲ心得居ル者ヲ撰任シ試驗場ヲ設ケ上下二等ニ區別ス其仕法ノ二三行ノ翰牘ヲ讀ミ易キ様三四枚認メ並ニ十露盤等備ヘ置キ一人宛算筆ノ内出來得ルヤ否ヤヲ問ヒ出來得ル者ニハ右翰牘ヲ讀マシメ無滞讀ミ得ル者ヲ上等トシ二字以上誤ル者ヲ下等トス算ハ除法(即ハ算見一)以上出來得ル者ヲ上等トナシ其以下ヲ下等トナス

第十條 試驗全ク終ルノ後籤簿ヲ照シ人別表ト引合セ姓名住居其他左式雛形ノ如ク厚紙長サ五寸幅三寸ノ野紙ニ陸軍徵兵署ト題シタル割符ニ書載セ籤簿ニ引合セ割印ヲナシ番號並ニ服役年期ヲ書加ヘ籤簿順ニ呼出シ籤札ヲ出サシメ相違ナキ者ハ籤札ト右番號割符ト引替ヘ相渡シ第六章程ノ第一條ニ揭示シタル如ク各個入營致スヘシ



番號割符

割印年		日 月 號	
陸軍		徵兵	
現名何男或兄叔伯名弟甥又厄介		各種	
右何鎮臺第一後備軍二ヶ年服役申付候事		第何番	
右何鎮臺第二後備軍二ヶ年服役申付候事		何 某	
右何鎮臺常備軍三ヶ年服役申付候事			

補充籤ヲ抽キシ者ハ

第一後備軍ニ入ル者ハ

第二後備軍ニ入ル者ハ

右何鎮臺補充兵一ヶ年服役申付候事

右何鎮臺第一後備軍二ヶ年服役申付候事

右何鎮臺第二後備軍二ヶ年服役申付候事

八年第十七號布告  
ヲ以テ文中改正

附 上

第十一條 補充役ヲ命セラレタル者ハ其家ニ歸居シ落籤ノ者ト異ナルコトナシ常備缺員ノ節ハ其鎮臺ヨリ籤順ニ布達シ何時ニテモ入營ナサシムヘキニ付服役中ハ自分ノ管内ヲ出ルヲ禁ス但服役ヲ命セラレタル其日ヨリ一ヶ年目ノ其日迄ニ常備入營ヲ命セラレサル者ハ其役除籍ト心得ヘシ

第十二條 補充ヨリ常備軍ニ命セラレタル者ハ矢張り補充抽籤其日ヨリ三ヶ年ノ期ヲ保ツヘシ

第十三條 本年常備軍滿期ノ者ハ出營ノ日後備籤ヲ抽カシメ以テ番號ノ順序ヲ定ム而シテ常備役ノ番號割符ニ滿期ノ檢印ヲ押シ後備軍ノ番號割符ヲ相渡スヘシ但當日病氣ノ者ハ其戰友ヲシテ之ヲ抽カシム

第十四條 本年第一後備軍滿期ノ者ハ第二後備軍ノ籍ニ入ルヘキヲ以テ第二回屯營復習ノ節第一後備役ノ番號割符ニ滿期ノ檢印ヲ押シ第二後備軍番號割符ヲ相渡スヘシ

第十五條 第二後備軍ノ番號割符ヲ受ケ二ヶ年目ノ其日ヨリ第二後備軍ノ籍ヲ除セラレシ者ト心得ヘシ

第十六條 本年各府縣ニ於テ徵兵事件全ク竣ルノ後徵スル所ノ兵員ヲ精算シ兵種ヲ分チ左式雛形ノ如ク野紙ニ各個持參致シタル徵兵人別表ヲ寫シ取リ身體検査簿算筆試驗簿及ヒ籤番號ヨリ額額其他題號ノ下ニ悉ク書載セ人別明細連名籍ヲ認メ常備補充ヲ區別シ一府縣ニ應メ各二部ヲ作リ陸軍省及ヒ所管ノ鎮臺ヘ差出スヘシ

但鎮臺へ渡ス人別明細連名籍ニ籤簿相添へ四月十五日迄ニ差廻スヘシ

親或兄叔伯名	何	某	同	同
本人姓名	何	某	同	同
産 國				
住 所				
族 姓				
職 業				
宗 氏				
親 門				
祖 男				
兄弟 女				
妻 子				

別	徵	検査		兵卒明細連名籍	陸軍省
		尺度備置	簿筆		
頭	長短方圓大小扁平廣濶等字				
額	長短廣狹扁凸等字				
眼	大小銳鈍凹陷凸起舉垂細圓等字				
鼻	隆卑大小反屈曲鼻梁高低鼻翼大小鼻孔朝天大小等字				
口	大小上下唇厚薄露齒等字				
頰	長短尖圓張彎曲等字				
鬚	濃淡疎密茶褐卷鬚等字				
眉	濃淡疎密長短細大等字				
痘	天然種				

第十七條 本年徵兵出席ノ名簿ヨリ代人料上納名簿免役名簿其他種々ノ願書及ロ居書區長戸長ノ取調證書總テ徵兵ニ關スル書類ハ一切人別明細連名籍ト共ニ陸軍省ヘ差出スヘシ

第六章 徵兵雜則並扱方

第一條 常備軍ヲ抽キタル徵兵ハ四月廿日ヨリ五月一日迄ニ入營致スヘシ其營所迄ハ府縣毎ニ區括リニシテ戸長副戸長ノ内召連レ出ヘシ最營所ニテハ籤ノ番號ヲ目的ニ入營ナサシムヘキニ付 齟齬ナキ者ハ銘々勝手ニ入營致スヘシ夫迄ノ入費ハ總テ府縣ニテ辨スヘシ若シ事故アリ入營遲緩

八年第十七號布告  
以テ文中改正

ニ及フニハ共事故ヲ生スル所ヨリ辨スヘシ  
但書中區括リト稱スル者ハ區ノ大小人口ノ疎密ニ由リ一區或ハ三四區括リ總テ府縣ノ便利ニ從フ

第二條 籤ノ番號ハ服役中ノ目的タルヘキヲ以テ各個丁寧ニ所持致スヘシ

第三條 病氣或ハ事故出來期限通リ入營相成リ難キ者ハ其段詳細ニ書認メ區長及ロ其病氣事故ニ係リタル者ノ證印ヲ以テ至急ニ其領臺ヘ届出ヘシ

第四條 常備軍服役在營中其身元轉居スルニハ其隊ノ軍曹ヘ届出ヘシ歸休中ノ者ハ第九條第一後備服役中轉居ノ屆同斷タルヘシ最其隊ノ軍曹ヘモ同様届出ヘシ

第五條 常備軍服役中歸休郷里ニ在テ死没スル者ハ其親或ハ兄叔伯ニテモ育ミシ者ヨリ當人營所ノ士官及ロ其領臺ヘ届出ヘシ

第六條 常備軍在營中病氣ノ者ハ軍醫ノ診斷ヲ以テ病院ニ入レ治療セシメ其上ニテ兵役ニ堪ヘ難キ者ハ兵籍ヲ除スヘシ最歸縣迄ノ旅費ハ定則ニ照準シ賜ルヘシ

第七條 父母ノ重病或ハ非常ノ事故出來一時止ヲ得サル歸省ヲ願フ者ハ其親或ハ親族ノ者ヨリ府縣廳ノ與書證印ヲ以テ所管ノ領臺ヘ願出ルニ於テハ證議ヲ遂ケ許可スヘシ最滞郷日數ハ往來ヲ除クノ外二週間ヨリ長カルヘカラス  
但旅費ハ往來共自辨タルヘシ

願書案文

何府縣何郡所住居何族或職業  
何 某

右私<sup>何年</sup>何年ヨリ御臺常備軍入營罷在候處父或ハ母何某病氣大切云々ニ付或ハ何何ノ事

故出來ニ付何卒御規則之日數御暇被 仰付度奉願上候以上

年號 月 日

何鎮臺

御中

何 某 印

前書之通相違無御坐候以上

同日

何府縣印

第八條 第一後備軍ノ復習期限ハ年々十日以前ニ其鎮臺ヨリ布達シ旅費等ハ陸軍兵卒旅費定則ニ

照準シ里程ニ應シ相渡スヘシ若シ病氣或ハ事故出來ノ者ハ第三條ノ通り届出ヘシ

第九條 第一後備軍服役中轉居スルルハ受ケ送り双方共戸長ノ姓名與書證印ヲ以テ其鎮臺ヘ届出

ヘシ

但其管内ヲ出ルヲ禁ス

届書案文

私儀此度何郡所へ轉居仕候間此段御届申上候以上

年號 月 日 年號第一後 備軍第何番

何鎮臺

御中

何府縣何郡所住何族或職業  
何 某 印

前書之通相違無御坐候以上

同日

送り何郡所戸長  
受ケ何郡所戸長  
何 某 印

第十條 後備軍服役中ノ者若シ官省府縣ヨリ登庸セント欲スルルハ其官廳ヨリ其鎮臺ヘ掛合フヘ

第十一條 後備軍服役中死没ハ親或ハ兄叔伯ニテモ育ミシ者ヨリ届出ヘシ若シ又後備軍服役中

禁ヲ犯シ或ハ脱走等ノ者アルルハ其府縣廳ヨリ箇條書ヲ以テ陸軍省及口所管ノ鎮臺ヘ届出ヘシ

第十二條 全國ノ男兒齡十七歳ヨリ國民軍籍ニ入り外寇或ハ有事ノ時ニ當リ隊伍ニ編入シ管内守

衛トナルヘキヲ以テ前年十六歳ノ冬十一月十日迄ニ其親或ハ兄叔伯ニテモ育ミシ者ヨリ戸長ヘ

左式ノ通り届出ヘシ最一家ノ主人タル者ハ自分ヨリ届出ヘシ戸長之ヲ取調ヘ十一月廿日迄ニ所

轄ノ區ヘ差出シ區長點檢ノ上十一月三十日ヲ限リ區括リニシテ府縣廳ヘ差出シ翌年ノ成丁簿ニ

載セ置クヘシ

男兒十六歳ニ滿レハ其年ノ冬十一月十日迄ニ各箇戸長ヘ左式ノ書付ヲ以テ届出ヘキ様府縣

廳ヨリ郡々村々ニ至ル迄洩レサル様布達致シ置クヘシ

私儀某儀明年十七歳ニ相成候間此段御届申上候以上

何郡所住何族或職業

何 某 印

年號 月 日

戸長

何某殿

戸長ハ十一月廿日迄ニ右届出ノ姓名ヲ一纏ニシテ左ノ通り區長ヘ届出ヘシ

當何郡ニ於テ明年十七歳ニ相成候者別冊ノ通り機名御坐候此段御届申上候也

何郡所戸長

何 某 印

年號 月 日

八年第十七號布告  
ヲ以テ文中改正

第何大區

御中

區長ハ十一月三十日迄ニ戸長ヨリノ居書ヲ一纏ニシテ左ノ通り府縣ノ戸籍掛ヘ届出ヘ  
營區内ニ於テ明年十七歳ニ相成候者別冊ノ通り戸長ヨリ届出候間及進達候也

年號 月 日

何府縣戸籍掛

御中

何 某 印

第十三條 男兒二十歳ニ至レハ兵役ニ就クヘキヲ以テ毎年十二月廿五日迄ニ府縣廳ニ於テ十九歳ノ者ヲ調ヘ徵兵連名簿ニ載スルコトス是故二十九歳ノ者ハ其年ノ十一月十日迄ニ前條十七歳ノ届式ノ如ク戸長ヘ届出テ戸長十一月廿日迄ニ成丁簿ヲ照シ現人ニ引合セ其内免役ニ適スル者ハ篤ト取調ヘ夫々簡條書相添ヘ區長ヘ差出シ區長ハ十一月三十日迄ニ區括リニシテ證印シ府縣廳ヘ差出スヘン府縣廳之ヲ點檢シ徵兵連名簿ニ載セ十二月廿五日迄ニ陸軍省ヘ差出スヘン最免役ニ適スル者ハ區々ヨリ差出シタル免役簡條書ヲ取札シ免役連名簿ヲ認メ各個簡條ヲ詳細ニ書載セ徵兵連名簿ト共ニ差出スヘン其中官員ハ其勤仕スル官廳ノ名及ヒ等級學徒ハ夫々其修業スル處ノ學校ヘ掛合ヒ教官ノ證書及ヒ科目免許書等取寄セ置キ徵兵使巡行ノ日差出スヘン若シ右證書科目書等之ナキ者ハ正月中ニ呼返シ置クヘン最洋行修業ノ者ハ此例ニアラス

戸長居書案文

當何郡ニ於テ當年十九歳ニ相成リ候者別冊ノ通り幾名其内免役御規則ニ當リ候者幾名御坐

候ニ付夫々簡條書相添ヘ此段御届申上候以上

年號 月 日

第何大區

御中

何 某 印

區長進達書案文

營區内ニ於テ當年十九歳ニ相成候者別冊ノ通り幾名其内免役御規則ニ當リ候者幾名夫々簡條書差添ヘ戸長ヨリ届出候間篤ト取調ヘ候處相違無御坐候間及進達候也

年號 月 日

何府縣戸籍掛

御中

何 某 印

第十四條 寄留スル者ノ子弟及ヒ厄介タル者ハ現今寄留スル府縣ノ兵籍ニ入ルヘン

但本籍ニ歸リ兵役ヲ勤メント欲スル者ハ十九歳十一月十日迄ニ此段ヲ戸長ニ届出ヨリノ送リ書ヲ以テ本籍ニ歸ルヘン

第十五條 本年徵兵ニ當リ自己ノ便宜ニ由リ代人料金二百七十圓上納願出ル者ハ常備後備兩軍共之ヲ免ス

免役上納金ハ區長ヘ差出シ府縣廳ニ纏メ五月中ニ陸軍省ヘ相納ムヘン

第十六條 免役ヲ願出ル者ハ其親或ハ親族ノ者ヨリ徵兵使巡行徵兵検査以前左ノ願書ヲ認メ戸長ノ與書證印ヲ以テ區長ヘ差出スヘン

其親或ハ親族ノ者願書并戸長與書案文

私弟 何某 當年二十歲ニ相成服役可仕管之處家事差支リ有之ニ付代人料金二百七十圓上納仕候間何卒常備後備兩軍共御差除被下度奉願上候以上

年號 月 日

陸軍徵兵署

御中

前書願出之通相違無御坐候以上

同日

區長進達書案文

當區内免役願出候者幾名戸長ヨリ奥書證印ヲ以テ別冊ノ通り差出候間精細吟味仕候處毛頭不都合ノ筋無御坐候間及進達候也

年號 月 日

陸軍徵兵署

御中

何郡所第何大區長  
何某 印

何郡所戸長  
何某 印

第十七條 總テ區長戸長ノ取扱フヘキ事件未タ區長戸長ヲ差置レサル所柄ラハ區長戸長ニ相當スル從前ノ莊屋以上ノ者ヲ以テ之ニ代フヘシ  
第十八條 徵兵ニ關スル事件ニ付年齡及ヒ父母兄弟ノ有無又ハ虛病其他詐偽スル者ハ官ヲ欺罔スルノ罪若シ又戸長或ハ區長取調ヘ證印ノ上ハ其證印ヲナセシ官吏ハ粗漏ノ罪尙又徵兵ノ欺妄ヲ隱匿スル者ハ其罪最重カルヘシ右就レモ新律綱領ニ照準シ其罪ヲ糺ス可キナリ

明治六年第一月

陸軍省

八年陸軍省布第十  
五號ヲ以テ改定

徵兵令附錄

六管鎮臺徵員并式

第一軍管東京鎮臺常備

- 步兵 三聯隊
- 騎兵 二大隊
- 砲兵 四小隊
- 工兵 三小隊
- 輜重兵 一隊
- 海岸砲兵 三隊

人員七千四百八十人

内一ヶ年徵員二千三百八十八人

管下府縣

東京	神奈川	埼玉	入間	足柄	静岡
山梨	印旛	木更津	新治	茨城	宇都宮
新潟	柏崎	群馬	栃木	長野	相川

府一縣十七  
萬七百三十七万石

第二軍管仙臺鎮臺常備

步兵

明治六年一月 太政官 (番外並無號) (徵兵令)

騎兵	一大隊	管下諸縣	磐前	福島	水澤	岩松	青森
砲兵	二小隊	宮城	酒田	山形	置賜		
工兵	一小隊	岩手					
輜重兵	一隊	縣十一 高四百二十二万石					
海岸砲兵	一隊	第三軍管名古屋鎮臺常備					
		人員四千四百六十八人					
		內一ヶ年徵員一千四百八十六人					
		管下諸縣	秋田				
		人員四千二百六十人					
		內一ヶ年徵員千四百二十人					
		管下諸縣	額田	濱松	筑摩	愛知	石川
		岐阜					

新川	足羽	管下府縣	兵庫	堺	和歌山	奈良	京都
縣八 高四百八十二万石		大阪	敦賀	三重	度會	飾磨	豐岡
第四軍管大阪鎮臺常備		滋賀	北條	岡山			
步兵	三聯隊	鳥取					
砲兵	四小隊	府二縣十三 高六百二十九万石					
工兵	二小隊	第五軍管廣島鎮臺常備					
輜重兵	一隊	人員六千七百人					
海岸砲兵	二隊	內一ヶ年徵員二千二百三十四人					
		管下府縣					
		步兵					
		砲兵					
		工兵					
		輜重兵					
		砲兵					
		工兵					
		輜重兵					
		二聯隊					
		二小隊					
		一小隊					
		一隊					

海岸砲兵 一隊

人員四千三百四十人

内一ヶ年徴員一千四百四十六人

管下諸縣

- 廣島 小田 島根 濱田 山口 香川
- 名東 高知 神山 石鏡

高十 四百〇四万石

第六軍管熊本鎮臺常備

- 歩兵 二聯隊
- 砲兵 四小隊
- 工兵 二小隊
- 輜重兵 一隊
- 海岸砲兵 二隊

人員四千七百八十八人

内一ヶ年徴員一千五百九十四人

管下諸縣

- 白川 八代 鹿兒島 都城 美々津 大分
- 小倉 福岡 三潞 佐賀 長崎

縣十一 高四百四十八万石

總計

人員 三万一千六百八十八人  
 内一ヶ年徴員 壹万〇五百六十八人  
 府三 縣七十  
 石高 三千二百二十二万石

以上六鎮ヲ以テ全國兵備ヲ管シ所屬ノ府縣ヨリ毎歲ノ定員ヲ徵募シ以テ管内ノ守衛ニ充ツ而シテ沿海ノ丁壯舟楫波濤ニ慣レタル者ヲ以テ海軍ノ兵員ヲ充タシム蓋此書ハ陸軍ヲ限ル

全國徴兵表

歳次	毎歳徴數	合計	備考
七	年一万〇五百六十	二万二千二百	此兵ハ漸ク年月ヲ經ルヲ以テ緩急ノ用ニ供スヘキ者五分ノ二トス
六	年一万〇五百六十	八千四百四十八	
五	年一万〇五百六十	二万二千二百	緩急ノ用ニ供ス可キ者五分ノ四トス
四	年一万〇五百六十	一万六千八百九十六	
三	年一万〇五百六十		
二	年一万〇五百六十	三万二千六百八十	此兵常ニ充足ヲ要スルヲ以テ缺員アル毎ニ補充兵ヲ以テ之ヲ補フ
初	年一万〇五百六十		

常備歩兵ニ付各種兵員ノ比較

- 歩兵 二万六千八百八十八人
- 凡七十五分ノ一 騎 兵 卽三百六十八人
- 凡十二分ノ一 砲 兵 卽二千六百六十八人

凡二十二分ノ一 工 兵即千二百人  
 凡七十五分ノ一 輜重兵即三百六十八人  
 凡二十七分ノ一 海岸砲兵即七百二十人  
 合計三万六千八百八十人  
 各種常備兵一ケ年ノ徵員

歩 八千九百六十人  
 騎 百二十八人  
 砲 七百二十人  
 工 四百人  
 輜重 百二十人  
 海岸砲 二百四十八人  
 合計壹万〇五百六十八人

補充兵トシテ常備一ケ年徵員五分ノ二中ニ就テ常備騎兵ハ之ヲ他種ノ兵員ニ比スレハ最少ニシテ  
 近衛ニ撰擧スル最夥ヲ以テ倍數輜重兵是ニ睨ヲ以テ五分ノ三合數四千三百二十人トス之ヲ各管鎮  
 臺各種ノ兵員ニ應シテ常備同時ニ徵募シ一ケ年ヲ期トシ本年管内常備ノ缺員ヲ充タシム  
 但非常ノ缺員ヲ生シ本年補充ニテ充足セサルハ前年補充ヲ以テ之ヲ充タス  
 補充一ケ年ノ徵員

歩 三千五百八十四人  
 騎 百二十八人  
 砲 一百八十八人

工 百六十八人  
 輜重 七十二人  
 海岸砲 九十六人  
 合計四千三百二十八人

常備補充一ケ年徵員ノ合數

歩 壹万二千五百四十四人 内補充三千五百八十四人  
 騎 二百四十人 同 百二十人  
 砲 千〇〇八人 同 二百八十八人  
 工 五百六十八人 同 百六十八人  
 輜重 百九十二人 同 七十二人  
 海岸砲 三百三十六人 同 九十六人  
 合計一万四千八百八十八人  
 各種兵卒ノ定尺<sub>尺曲</sub>

砲兵 五尺四寸以上  
 海岸砲兵  
 騎兵 五尺三寸五分以上  
 工兵  
 輜重兵  
 歩兵 五尺一寸以上



各種兵卒ノ定尺ニ照準シ步兵百人ニ付テ各種兵卒ノ比較

歩	百人
騎	一人、九二三
砲	八八、〇三五
工	四人、四六四
輜重	一人、五三〇
海岸砲	二人、六七八

海岸砲墩ハ目今山野砲ヲ以テ之ニ充ツ因テ其兵員ヲ除キ追漸海岸砲ヲ備付ルルニ當リ各處其定員ヲ徵ス

明治六年第一月

陸軍省

八年陸軍省布第十  
六號通ヲ以テ改定

近衛兵編成並兵額

近衛兵編成

近衛兵ハ常ニ 禁下ヲ護衛シ他ノ徵發ニ應スル者ニ非ス偏ヘニ 天子ノ命令ヲ奉戴シ千軍萬馬ノ中ト雖モ整々獨歩スルノ膽勇ヲ持有シ又平常ニ在テハ信義ヲ本トシ先進ヲ敬マヒ後進ヲ教導シ總テ隊中ノ掟ヲ守リ全國諸兵ノ模範タル可キヲ以テ諸兵ノ上ニ位セシメ其給俸ヲ増加ス就中此兵ハ全國共戴ノ 至尊ヲ護衛スルノ兵タルヲ以テ各鎮管内常備熟練兵ノ中強壯ニシテ行狀正シキ者ヲ一小隊毎ニ兵種ニ應シ若干人ヲ撰舉シタル者ヨリ編成シ奉命其日ヨリ更ニ五ヶ年ノ役ヲ帶ハシメ満期ノ上ハ後備軍ノ籍ヲ免スル者ナリ

近衛兵額

近衛兵額表		平常其員ヲ充足セシムルヲ以テ缺員毎ニ各鎮常備軍ヨリ撰舉シ其員ヲ充タシメ戰時ノ増加ヲ要セス	
隊	數	每一隊人數	總員
步兵	二聯隊 <small>即チ四大隊</small>	八百	三千二百
騎兵	一大隊	百五十	百五十
砲兵	二小隊	百五十	三百
工兵	一小隊	百五十	百五十
輜重兵	一小隊	八十	八十
合計		三千八百八十	

鎮臺兵ニ付近衛兵ノ比較

鎮臺	近衛
歩	二万六千八百八十人 凡八分ノ一 即三千二百人
騎	三百六十八人 凡二分ノ一 即百五十八人
砲	二千六百六十八人 凡七分ノ一 即三百人
工	千二百人 凡八分ノ一 即百五十八人
輜	三百六十八人 凡四分ノ一 即八十八人
合計	合計三万〇九百六十八人 合計三千八百八十人

近衛兵毎年撰舉ノ兵員

鎮臺各種ノ兵百人ニ付近衛兵撰擧ノ比較

歩	六百四十人	近衛	二百三十八
騎	三十八人		八十三
砲	六十八人		二八七七
工	三十八人		一八五〇
輜	十六人		四八四四
合計	七百七十六人		

陸軍省

六管鎮臺兵額表

兵種	平時		戰時	
	隊數	人員	隊數	人員
歩兵	十四聯隊即四十二大隊	六千四百	九百六十	二万六千八百八十
騎兵	三大隊	百二十	百五十	三百六十
砲兵	十八小隊	百二十	百五十	四百五十
工兵	十小隊	百二十	百五十	四百五十
輜重兵	六隊	六十	八十	四百八十
海岸砲	九隊	八十	百	四百
計		三万六千八百八十		四万六千三百五十

兵種	平時		戰時	
	隊數	人員	隊數	人員
歩兵	十四聯隊即四十二大隊	三万八千八百八十	二聯隊即二千二百	十六聯隊即三万〇八十
騎兵	三大隊	三百六十	一大隊	五百四十
砲兵	十八小隊	二千六百二十	二小隊	二百二十
工兵	十小隊	二千	一小隊	五十
輜重兵	六隊	三百六十	四隊	二百四十
海岸砲	九隊	二百二十九	〇	九
合計		五万五千五百六十		七万二千二百九十

國軍兵額并配分表

○鎮臺兵ハ全國六管十四部ニ分置ス  
○近衛兵ハ常ニ京城ニ駐在ス

附	平時		戰時	
	人員	隊數	人員	隊數
歩兵	三万八千八百八十	十四聯隊即四十二大隊	三万〇八十	十六聯隊即四十六大隊
騎兵	三百六十	三大隊	五百四十	一大隊
砲兵	二千六百二十	十八小隊	二百二十	二小隊
工兵	二千	十小隊	五十	一小隊
輜重兵	三百六十	六隊	二百四十	四隊
海岸砲	二百二十九	九隊	九	〇
合計	五万五千五百六十		七万二千二百九十	

○戰時増加ノ人員ハ第一後備即前二年間放ツ所ノ兵ヲ以テス  
○近衛ハ平時其員ヲ充足セシムルヲ以テ戰時ノ増加ヲ要セス  
○輜重海岸砲ノ二兵ハ戰時ノ増加甚夥ヲ要スト雖モ第一後備ヲ以テ充足シ難キ分ハ之ヲ除ク且  
○海岸砲ハ追漸盛大ヲ要スト雖モ目前必用ノ一二ヲ示ス

○一月十二日(達)

鐵道取建ノ儀自今人民會社ニ被任右會社取結方等ノ儀ハ其省ヘ御委任相成候條規則方法取調可伺出

○一月十二日(達)

靜岡縣ヲ始東海道六縣ヘ裁判所被置候段先般御達相成候處御詮議之次第有之靜岡縣ヲ除ク之外官員派出之儀當分可相見合尤不得止之情實有之官員差出候節者其時々可伺出候此段相達候也

○一月十四日(達)

全國城郭及軍事ニ關涉スル地所建物は迄其省管轄ノ處今度別冊第一號ノ通陸軍必用ノ分改テ管轄被 仰付其餘第二號ノ通舊來ノ城郭陳屋等被廢候條附屬ノ建物木石ニ至ル迄其省ヘ可引渡ニ付同省ヨリ受取候上處分可致事(第一號第二號別冊ハ次ニ載ス)

一右管轄ノ土地ヘ屯營建築落成ノ土地所木石等有餘ハ其省ヘ引渡地所不足スレハ更ニ撰定シ其省協議ノ上伺出候ハ、無代ニテ可相渡管ニ付地代等ハ其省ニ於テ可取計事

一今後屯營地所練兵場等有節且全國防禦線決定ノ日ニ至リ砲壘壘壁等建築ノ地所ハ無代ニテ可相渡候條陸軍省ニ於テ撰定シ其省ヘ協議ノ上伺出候ハ、無代ニテ可相渡管ニ付地代等ハ是亦其省ニ於テ可取計事

一木更津新瀨水澤青森岐阜七尾兵庫大津敦賀濱田須崎浦千歲長崎十三箇所必用ノ區域陸軍省協議ノ土地所可受取管ニ付引渡方可取計

○一月十四日(達)

全國城郭及軍事ニ關涉スル地所建物は迄其省管轄ノ處今度別冊第一號ノ通陸軍必用ノ分改テ管轄被 仰付其餘第二號ノ通舊來ノ城郭陳屋等被廢候條附屬ノ建物木石ニ至ル迄總テ大藏省ヘ可引渡

陸軍省

事  
一右管轄ノ土地ヘ屯營建築落成ノ土地所木石等有餘ハ大藏省ヘ可引渡地所不足スレハ更ニ撰定シ大藏省ヘ協議ノ上伺出候ハ、無代ニテ可相渡事  
一今後屯營地所練兵場等有節且全國防禦線決定ノ日ニ至リ砲壘壘壁等建築ノ地所ハ無代ニテ可相渡候條其省ニ於テ撰定シ大藏省ヘ協議ノ上伺出候事  
一木更津新瀨水澤青森岐阜七尾兵庫大津敦賀濱田須崎浦千歲長崎十三箇所ハ必用ノ區域相立大藏省協議ノ土地所可受取事

第一號

諸國存城調查

第一軍管	一水戸	○一水澤 一盛岡	美濃國
武藏國	下野國	陸奥國	○一岐阜 加賀國
一東京	一字都宮	○一青森 羽前國	一金澤 能登國
相模國	越後國	一山形 羽後國	○一七尾 越前國
一小田原	一新發田 ○一新潟	一秋田	一福井
駿河國	一高田	第二軍管	尾張國
一靜岡	上野國	陸前國	一名古屋 美濃國
甲斐國	一高附	一仙臺	一豐橋 信濃國
一山梨	下總國	岩代國	一松本
一佐倉	上總國	一福島 一若松	
一木更津	常陸國		

明治六年一月 太政官 (番外並無號) (諸國存城並廢城調查)

十一月陸軍省邊乙第百五十五號邊シヲ以テ福島城ヲ廢シ白川城ヲ存城ト爲

二月三日邊ヲ以テ新發田ヲ廢シ五月十七日邊ヲ以テ復テ陸軍省ニ屬ス

十七年宮内省甲第一號告示ヲ以テニ  
條城ヲ離宮トス

明治六年一月 太政官 (番外並無號) (諸國存城並廢城調査)

七三六

一二條	近江國	一岡山	一丸龜	一鹿兒島
一彦根	〇一犬津	但馬國	阿波國	豐前國
越前國	第五軍管	一豐岡	一徳島	一小倉
一敦賀	安藝國	土佐國	〇一須崎浦	豐後國
伊勢國	一廣島	伊豫國	一字和島	一干歳
一津	山雲國	第六軍管	肥後國	筑前國
播磨國	一松江	一熊本	日向國	一福岡
一姫路	石見國	日向國	一肥前	一長崎
因幡國	〇一濱田	日向國	一鹿原	對馬國
一鳥取	山口	薩摩國	一鹿原	
備前國	讃岐國			
以上〇印ノ分ハ現今城郭ナシト雖モ新規ニ受取ルヘキ所				
第二號 諸國廢城調査				
山城國	淀	一練兵場	一和泉國	岸和田
一城郭		一擊劍場	一城郭	同 伯太
一火藥庫		大和國	一城郭	同 吉見
一練兵場		一陸屋	一陸屋	同 尼ヶ崎
一滋武場		三 同	河内國	
大和國	柳生	一陸屋	同 丹南	
一陸屋	同 郡山	同 柳本		
一城郭		同 芝村		

攝津國	三田	一練兵場	一武場	上總國	久留里
一陸屋		一火藥庫	一城郭	同 佐賀	
一火藥庫		伊勢國	同 田原	一城郭	同 結城
一武庫	麻田	一城郭	一城郭	一城郭	同 古河
同		一練兵場	一城郭	同 關宿	
一陸屋	高槻	同 久居	一城郭	同 土浦	
一火藥庫		一火藥庫	同 横須賀	一城郭	同 下館
同		同 田丸	一城郭	同 松岡	
一城郭	上野	一城郭	一城郭	同 笠間	
伊賀國		志摩國	同 掛川	一城郭	同 野所
一城郭		鳥羽	一城郭	同 水口	
一城郭	長島	一城郭	一城郭		
一火藥庫		一火藥製造所	一城郭		
伊勢國	桑名	一練兵場	一城郭		
同		尾張國	同 田中		
一城郭	菟野	一城郭	一城郭		
同		一城郭	武藏國		
一陸屋	菟野	一城郭	同 忍		
一練兵場並市所	龜山	同 翠母	一城郭		
同		一城郭	同 大瀧		
一城郭	神戶	同 荻谷	一城郭		
一城郭		一城郭	上總國		
		一城郭	同 大瀧		
		一城郭			

明治六年一月 太政官 (番外並無號) (諸國存城並廢城調査)

七三七











九年第百十二號布告ヲ以テ宮崎縣ヲ廢シ鹿兒島縣ニ併ス

同上

但物成ハ壬申歲分ヨリ可引渡事

都城縣

○一月十五日(沙) 其縣被廢宮崎縣被置候條從前所轄ノ地所物成鄉村等日向國三郡ノ分ハ宮崎縣ヘ大隅國ノ内所轄ノ分ハ鹿兒島縣ヘ可引渡事

但物成ハ壬申歲分ヨリ可引渡事

○一月十五日(沙)

宮崎縣

今般其縣被置日向國一圓管轄被 仰付候條美々津都城二縣所轄ノ地所物成鄉村等可受取事 但物成ハ壬申歲分ヨリ可受取且縣廳ハ宮崎郡北方村ニ被置候事

○一月十五日(沙)

鹿兒島縣

都城縣被廢大隅國ノ内同縣從前所轄ノ分其縣管轄被 仰付候條地所物成鄉村等可受取事 但物成ハ壬申歲分ヨリ可受取事

○一月十九日(達)(正院)

諸省等ヘ

歐米各國在勤之公使領事ヘ諸省使ヨリ注文品或ハ買入品等類遺シ候節凡直段相分リ次第前以代金差送り候様ニ無之テハ公使領事館何レモ備金多分ニ無之様替金難相調隨テ遂ニ外國人ヘ對シ不都合之儀モ出來候付以來公使領事館ニ於テ繰替金ハ不致候條前以代金差送り候様可致候此段相達候也

諸省

○一月十九日(沙) 諸省ニ於テ罰金科料等取扱ノ事務有之向ハ右取立金以來總テ司法省ヘ納付可致事 但委細ノ儀ハ同省ヘ可打合事

○一月十九日(沙)

開拓使

諸省ヘ別紙ノ通御達相成候條其使ニ於テモ同様可相心得事 (別紙ハ上ノ諸省ヘ達ニ同シ)

八年第百九十一號布告ニ依リ十六號布告ニ依リ消滅

同上 六月十八日迄ヲ以テ毎月納付セシム

同上

○一月十九日(沙)

司法省

諸省使府縣ニ於テ取立候罰金諸科料ノ類自今一切其省ヘ爲相納候ニ付別紙ノ通夫々御達相成候條其旨相心得毎年十一月中取東大藏省ヘ納付可致事 (別紙ハ諸省使ヘノ達ハ第十九號ニ同シ)

但稅則上ヨリ出ル諸科料取立方等ノ儀ハ大藏省ヘ打合取調可致事

○一月十九日(沙)

大藏省

諸省使府縣ニ於テ取立候罰金諸科料ノ類自今一切司法省ヘ爲相納候儀ニ付同省其外ヘ別紙ノ通夫々御達相成候條此旨可相心得事 (別紙諸省使ヘノ達ハ前ノ三件府縣ヘノ達ハ第十九號ニ同シ)

○番外 (二月十九日)(正院)

左院局廻シ

來ル廿三日 孝明天皇御例祭ニ付正院以下諸省及東京出張ノ開拓使府縣委任官以下并非役華族等正午十二時ヨリ午後四時迄參拜可致事

但參拜道筋共諸省以下判任官諸御門通行印鑑等ノ儀ハ元始祭ノ節通り可相心得候事

○番外 (二月十九日)(正院)

大臣參議大內史

來ル廿三日 孝明天皇御例祭ニ付勅任官ノ禮禮服著用午前九時參 朝可有之候也

○番外 (二月十九日)(正院)

左院局廻シ

來ル廿三日 孝明天皇御例祭ニ付諸官員參拜ノ外參朝ノ輩ハ大手坂下兩御門ニ於テ印鑑不改御車寄御裏御門等ニテ相改候間此段爲御心得申入候也

○一月二十日

宮内省ヘ

半藏竹橋兩御門ノ儀日出ヨリ日没迄開門番兵差出有之候處自今番兵不差出晝夜共開門致時々巡邏爲致度非常又ハ御近火等ノ節ハ番兵差出或ハ臨機閉扉致候様時宜ニ依リ取計申度陸軍省伺ノ通り御許可相成候條爲心得相達候也

七年五月二十七日 太政官達參看

○番外 (二月二十二日)(正院)

來ル廿九日 神武天皇御即位日相當ニ付御祭典並宴會被爲行候間休暇ノ事

○番外 (二月二十四日)(正院)

局 廻

來ル廿九日 神武天皇御即位日相當ニ付御祭典被爲行候條正院以下諸省東京府並在京ノ開拓使府縣奏任官以下及非役華族午第十二時ヨリ四時迄大禮服着用神殿參拜可致事

但參拜道筋以下御門通行繼札等總テ去廿三日 孝明天皇御祭典ノ節ノ通ニ候事

○番外 (二月二十四日)(正院)

局 廻

來ル廿九日 神武天皇御祭典ニ付テハ諸官員參拜ノ外參 朝ノ輩ハ大手坂下兩御門ニテ印鑑不改御車寄並御裏御門ニテ相改候條此段爲御心得申入候也

○一月二十七日(沙)

京都府 滋賀縣 奈良縣 各通

元門跡比丘尼御所等無住ノ向ハ留守居差置候様辛未五月相達置候處自今住職被差置候條僧侶人撰ノ上住職申付道テ教部省へ可届出事(滋賀縣へ送ハ五月ノ下元大津縣へノ五字アリ)

但本寺本山ノ列ニ無之分及ヒ堂宇頽廢寺號ノミ存在ノ向等ハ適宜廢合ノ見込相立同省へ可申立候事

○二月三日(沙)

陸軍省

其省管轄越後國新發田城被廢候條城郭並同所演武場射的場共總テ大藏省へ可引渡事(陸軍省管轄受取旨同日大藏省へ御達アリ略ス)

○番外 (二月八日)(正院)

三府開港場諸縣へ

新紙幣百圓五十圓ノ兩種壬申第二百廿四號ヲ以相達置候通爲見本各二枚ツ、下渡候條管内へ可及布達候也(見本略ス)

五月十七日達ヲ以テ再ヒ陸軍省ニ管ス

○二月八日(沙)

京都府

來廿六日 後光嚴院天皇五百年ニ付於御陵御祭典執行被 仰付候事

○番外 (二月九日)(正院)

諸省府縣

新紙幣各種見本下ケ渡置候處追々實物流通致シ最早見本無之候テモ無差支相開候間早々取纏メ可差出事

○二月十二日(迴達)(史官)

諸省等

毎月兩度改正差札職員録中各員年齡書式之儀自今左之雛形之通改正可被差出候此段御達及候也

雛形

(△印ハ朱書)

△任被歲月ヲ記スル從前之通

△本貫國族苗字名

△年號幾年支何月生

○二月十三日(迴達)(史官)

諸省

正院記録中諸省使往復文書等頗末不相整儀往々有之差支候ニ付爲照準主記一兩名各省へ差出記録掛官員へ直ニ示談之上騰寫可爲致候條預メ其掛へ可被相達置此段及御掛合候也

○二月十五日(達)

陸軍省

近衛兵免役ニ付恩賞之儀ニ付別紙寫之通大藏省へ御達相成候條受取方之儀同省申合可取計候此段相達候也

(別紙)

○二月十五日(沙)

大藏省

近衛兵服役滿期ニ付今般伍長以下免役歸郷被 仰候ニ付テハ萬機艸創之際ニ當リ釐下護衛之役ヲ奉シ功勞有之輩ニ付特典ヲ以テ去秋別紙陸軍省同濟之通第一次被徵候者ハ一ヶ年二人口宛

三月二十七日達參

五ヶ年間第二次被徵候者へハ同一人口宛二ヶ年之間恩賞トシテ下賜候條同省申合渡方可取計事  
(別紙)

陸軍省伺五年七月

- 一 近衛隊伍長以下兵卒服役來西春迄ノ事
- 一 免役歸縣申渡候上賑恤金並旅費被下其餘勳功ノ賞典トシテ從前俸祿ノ外一ヶ年二人口五ヶ年間下賜度候事
- 一 初度被召出候人員ノ外其後編入ノ人員ハ免役ノ時賑恤金並旅費被下賞典トシテ前條同斷一ヶ年二人口二ヶ年下賜度候事
- 一 免役後猶服役願出候者ハ後次諸隊へ編入可致候事
- 但本文ノ分ハ賞典被下旅費ハ不被下候事
- 一 歸縣後猶國家有事ノ際徵召ノ命アレハ速ニ出張致候様兼テ申渡置候事
- 右ノ通御決定相成度此段相伺候也
- 伺之通 壬申八月四日

○二月二十二日(達)(正院)

陸軍省

魯國皇子長崎へ再渡來ニ付澤全權公使同所へ出張致シ候ニ付テハ右皇子彌着港日限ノ確報ヲ得候ハ、熊本鎮臺へ同人ヨリ通達可及候條此旨兼テ熊本鎮臺へ可被相達候也

○三月二日(達)(正院)

陸軍省

親王以下各國公使參朝之節下乘下馬之儀ニ付別紙ノ通御決相成候條此段相達候尤明日午後第二時白露國公使參朝之儀モ有之候旁至急御門御守衛兵へ相達可被申候也  
(別紙)

第七十七號參看

第三十一號參看

自今親王三職一等官ハ車寄迄二等官以下勅任官ハ中仕切御門外迄乘車乘馬被差許候事  
各國公使參朝之節以來車寄迄乘車乘馬被差許候條此段相達候事

司法省

○三月二日(達)  
今般僕婢馬車其外諸稅則發行相成右規則第五條無届ニテ僕婢抱置云々露顯ニ於テハ過料一ヶ年定稅ノ五倍可爲差出ト揭載有之府下違式罪目第二十四條ニハ無檢印ノ舟車ヲ以致渡世者ト有之人民一犯兩條ノ罪ヲ受候儀ニテ不都合ニ付違式罪目中ノ第二十四條ハ以來剛削可致候此段相達候也

○番外 (三月二日)(式部寮)

一 官國幣大中小社幣帛各地到着ノ上日限ヲ撰ヒ祭祀可執行事

但奉幣相濟候ハ、其趣可届出事

一 當日社頭ノ諸雜費ハ總テ幣帛並神饌ノ料ヲ以テ仕拂致シ右金高ヲ不踰様取計可申事

但仕拂後殘金有之候ハ、各地方廳へ預リ置社頭年中經費ノ内へ可差加事

官國幣社祈年祭式

地方ノ長官以下祭ニ關ル官員及神官共ニ前日ヨリ齋戒シ地方ノ長官正廳ニ臨ミ幣物ヲ點檢シ屬ニ附ス

當日早旦神官神服ヲ裝飾ス

午前第八時神官ノ長官以下帳舎ニ着ク

次地方ノ長官以下帳舎ニ着ク

次屬幣櫃ヲ門内ニ入レ砌上ニ置ク

次神官ノ長官殿ニ昇リ御扉ヲ開キ畢テ側ニ坐ス

此間奏樂 神官奏樂ヲ心得サレハ略スルモ妨ナシ下同シ

七年第九十一號布  
參看

八年四月十三日太  
政官達ヲ以テ改正

明治六年三月 太政官 (番外並無號)

七四九

次同次官以下神饌ヲ傳供ス

此間奏樂

次屬幣物ヲ辛櫃ヨリ出シ殿ニ昇リ假ニ案上ニ置ク案ハ殿ノ便宜ノ所ニ設クヘシ

次神宮ノ長宮幣物ヲ神前ノ案上ニ奉ル拍再拜

次同官祝詞ヲ奏ス

掛卷母恐支

某神社乃大前爾宮司位苗名恐美恐母白左今年三月乃祈年祭爾御幣捧奉其志給布是以御酒波饗上  
高知癩腹滿並豆鱈乃廢物鱈乃狄物與津藻菜邊津藻菜甘菜辛菜爾至留麻置足波志奉留事乎平其氣  
開食豆敷坐留公民等我取作其五穀物乎始豆處々爾生出乎種々乃物等乎彌益々爾成幸倍給比平其氣  
久安其氣新嘗祭仕奉其志給倍白須事乎聞食世恐美恐母白須

次地方ノ長官玉串ヲ獻テ拜禮再拜拍手〇玉串ハ縣掌執畢テ下殿帳舎ニ復ス

次地方ノ官員拜禮再拜拍手〇玉串ハ主典執畢テ附之

次神官ノ長官玉串ヲ獻テ拜禮再拜拍手〇玉串ハ主典執畢テ附之

次同次官以下拜禮

次同官以下幣物及神饌ヲ撤ス

此間奏樂

次同長官御扉ヲ閉ツ畢テ下殿帳舎ニ復ス

此間奏樂

次各退出

○神饌 大社九盞 〇中社七盞 八盞 〇小社七盞

洗米 二瓶

酒 二瓶

海魚

川魚

鳥 〇中小社ニハ除之

海菜 二品

野菜 同上

菓 〇小社ニハ除之

鹽

水

大社 知府事縣令正權ノ内參向

中社 府縣參事正權ノ内參向

小社 府縣奏任出仕參向

右府縣長官差支アレハ次官之ニ代リ奏任出仕差支アレハ長次官之ニ代ル各其時ノ宜ニ任スヘシ

○番外 (三月)式部寮

一官幣諸社官祭式別紙ノ通候條毎年曆面ニ掲ケタル相當ノ月日ヲ以テ執行可致尤祭日前各廳ヨリ

共由ヲ神官ヘ可相達事

但御神樂東遊走馬等有之社頭賀茂上下社氷川社男山八幡ノ式ハ追テ可相達事

一祝詞ハ各廳ニテ可相認事

明治六年三月 太政官 (番外並無號)

八年四月十三日太  
政官達ヲ以テ改正

但料紙ハ白ノ鳥ノ子ノ事  
 一幣帛神饌料ハ其祭日ノ前當寮ヨリ可相渡事  
 一當日社頭ノ雜費ハ總テ右料金ヲ以テ仕拂ヒ其金高ヲ不踰様可取計事  
 但御神樂東遊走馬等有之社頭ハ此限ニ非ス候條祭典濟後入費取調當寮へ可申出事  
 一社頭狹小ニテ祭式難被行向ハ再興迄ノ處當日假ニ拜殿取設可申事  
 一祭典相濟候ハ、其趣當寮へ可届出事  
 (別紙)

官幣諸社官祭式

早且神官神殿ノ御裝束ヲ奉仕ス  
 午前第八時知事以下社頭ニ參向シ神門外ニ於テ手水ノ儀アリ  
 次知事以下同所祓ノ帷ニ着ク神官祓ノ詞ヲ讀ミ神ノ枝ヲ執テ祓フ  
 次知事以下神門ヲ入り幄舎ニ候ス  
 次屬御幣櫃ニ副テ進ミ庭上ノ便所ニ置ク  
 次神官ノ長官祭儀具スルノ由ヲ知事ニ申ス  
 次開扉 神官ノ長官之ヲ勸ム  
 神樂歌ヲ奏ス 神官奏樂ヲ心得サレハ之ヲ  
 略スルモ妨ケナシ下同シ  
 次神饌ヲ供ス 神官傳供  
 神樂歌ヲ奏ス  
 次屬御幣物ヲ辛櫃ヨリ出シ殿ニ昇リ假ニ案上ニ置ク 案ハ豫メ便宜  
 次神官ノ長官御幣物ヲ執テ神前ノ案上ニ奉リ再拜柏手シテ退ソク

次知事殿ニ昇リ先ニ拜祝詞ヲ奏シ又ニ拜祝詞ヲ懷ニシ本ノ幄舎ニ退ク  
 次神饌ヲ撤ス 神官之ヲ勸ム

神樂歌ヲ奏ス

次開扉 神官ノ長官之ヲ勸ム

神樂歌ヲ奏ス

次知事以下退出ス

大社

神饌

拾一臺但一前  
 一荒稻 一酒 一餅 一海魚 一川魚 一山鳥 一水鳥 一野菜三種 一海菜二種  
 一菓二種 一水

中社

神饌

拾壹同上  
 一荒稻 一酒 一餅 一海魚 一川魚 一鳥 一野菜二種 一海菜二種 一菓 一水

小社

神饌

九臺同上  
 一荒稻 一海魚 一川魚 一鳥 一野菜二種 一海菜二種 一酒 一菓 一水

大社

知府事縣令正權ノ内

中社

府縣參事正權ノ内

小社

府縣奏任出仕ノ内

右府縣長官差支アレハ次官之ニ代リ奏任出仕差支アレハ長次官之ニ代ル各其時ノ宜シキニ任スヘシ

祝詞

掛卷母忍支

某神社乃大前爾 官位苗名忍美 恐美白左例乃 隨今日乃 御祭仕奉留 爲 奉出 幣帛 波 御服 波 明妙照妙 御食 波 和稻荒稻御酒 甕上高知 甕腹滿並 爲 廣物 爲 狹物 與津藻菜 邊津藻菜 甘菜 辛菜 至 置足 爲 奉留事 乎 平 氣 安 氣 開食 爲 天皇乃 大御代 乎 足御代 乃 茂御代 爾 幸 給 比 仕奉留 百官人 四方國 乃 公民等 至 伊賀志夜具 波 衣 乃 如 久 立 榮 志 給 止 白 須 事 乎 開食 止 恐美 恐美 白 須

○三月四日(達)(式部寮)

札幌神社 七月九日

右每年官祭其使官員參向執行可致此段相達候也

○三月五日(達)

司法省

諸省使府縣取立候副金諸科料一切共省へ爲相納候段去一月相達候處開拓使ニ限リ其官員贈金類ヲ除ノ外所管部民ノ贖金科料等ハ共省へ不相納同使ニ於テ處分候條此旨更ニ相達候事

○三月七日(達)

諸省

官員免職之節滿年被下物之儀ハ奉職中事故有之其筋ニ於テ札彈ヲ受ケ職務被免候者ハ不下賜其餘ハ總テ御規則之通下賜候條爲心得此段相達候也

十五年第八號布告  
ヲ以テ開拓使廢止

八年十一月二十九日  
司法省 番外達參

七年第六十一號達  
ニ依リ消滅

三月二十四日達  
三年十二月九日太  
政官達參

但一旦札彈ヲ受ルト雖モ追テ無罪明白ナル者ヘハ下賜候事

○三月九日(達)(正院)

諸省等

各省使ヨリ職務上之儀ニ付各國在留公使領事へ是迄直ニ書通致シ候向モ有之候所以來私用除之外公務ニ屬スル分ハ總テ外務卿之手ヲ經テ書通可致候此段相達候也

○三月九日(沙)

陸軍省

近衛兵今般解隊可相成内騎兵二小队砲兵一番大隊二番大隊來ル十二日午前第十時吹上御苑ニ於テ整列 天覽被 仰出候條此旨相達候事

但雨天御延引ノ事

○三月十四日(回達)(正院)

諸省

郵便配達ハ極テ迅速ナルヲ主意トシ殊ニ三府下横濱神戸ニ於テハ日々五六回ツ、時限ヲ刻シテ配達致シ候ニ付最迅速ヲ要シ候所諸省使寮司府縣廳及諸出張所兵隊屯所其他ノ官廳へ配達ノ分寄員ニ達スル壹封ノ爲ニ動モスレハ取次ノ都合ニ寄リ多分ノ時間相費候間來月一日ヨリ玄關或ハ通用門等之内一ヶ所便宜ノ場所へ郵便受取箱ト記シ候箱ヲ差出置書留郵便之外受取證書ヲ要セサル信書等ハ其箱へ爲差入受取人へ分配之儀ハ仕丁或ハ門番ノ者共へ可被申付候且西京大阪横濱神戸等へ出張所有之向ハ右之通取計候様早々可被相達候也

但郵便受取箱ハ本月三十一日迄ニ製造可有之候也

司法省

○三月十四日(達)(正院)  
兼テ諸縣へ御預相成居候長崎縣下巽宗徒今般歸籍被 仰付候ニ付別紙之通縣々へ 御沙汰相成候條爲心得此旨相達候也

(別紙一)

其縣下異宗徒兼テ左之縣々へ御預相成居候處今般歸籍被 仰付候條其旨相心得各縣ヨリ受取方取計可申事

明治六年三月十四日

太政官

長崎縣

(別紙二)

三十八人	廣島縣	百十三人	愛知縣	五十人	和歌山縣
百四人	山口縣	八十二人	島根縣	四百六十四人	石川縣
四十六人	新川縣	百四十六人	度會縣	八十三人	奈良縣
五十九人	岡山縣	八十七人	深津縣	六十一人	濱田縣
三十八人	鳥取縣	百四十八人	名東縣	七十九人	愛媛縣
八十一人	高知縣	二百五十九人	鹿兒島縣		
合計千九百三十八人					

(別紙三)

兼テ御預ケ相成居候長崎縣下異宗徒今般歸籍被 仰付候條同縣へ引渡可申事 廣島始外十六縣

明治六年三月十四日

太政官

○三月十九日(達)

博覽會事務局

文部省博物館書籍館博物館小石川藝園共共局へ合併候條其旨可相心得事(同日同縣ニ付文部省へ御送アリ略之)但受取ノ儀へ文部省へ可打合事

八年二月九日太政官達ヲ以テ再ヒ文部省ニ送ス

○三月二十四日(達)(正院)

大藏省へ

先般恭明宮御建設相成宮中之佛體ヲ被移置候處今般廢撤致度官宮内省ヨリ伺出允許候ニ付右宮殿其省へ引受可申候此段相達候也

○三月二十四日(回達)(正院)

諸省等

各省使ヨリ職務上之儀ニ付各國在留公使領事へ書通致候節ハ外務卿ノ手ヲ經テ可申遣段過日相達置候處封書ニテ相廻候向モ有之由右ニテハ外務省ニ於テ取計方ニモ差支候間可申遣事件之云云ヲ書取候歟又ハ書狀ノミ相認無封ニテ相廻候歟兩様之内ニ可取計候此段爲心得更ニ相達候也

但公使領事ハ各國ニ在留スル我公使領事ニ限り候儀ニ付爲念此段ヲモ申入候也

○番外 (三月二十四日)(正院)

開拓使府縣へ

今般地誌提要編輯相成候處專ラ圖籍上ニ就テ編纂有之實驗ニ涉ラサルニ付事實相違遺脱ノ條件不少仍テ原稿ニ訂正例則ヲ添ヘ質問ニ及候條各應ニ於テ一々訂正ヲ加ヘ不分明ノ條ハ其地ノ戶長等ニ諏詢シ實地ニ照シ掛紙或ハ別冊ニ綴リ明白可申出尤御用嚴急ニ候間往還日數ヲ除キ五十日ヲ限リ取調可差出候事

但全誌取調ノ儀ハ追テ指圖可致此節ハ專ラ原稿訂正ノ御用候條其段可相心得候事

訂正例則

某國

形勢 山川ノ險夷土性ノ肥瘠及ヒ民產風俗氣候等共要領ヲ提ケ一覽瞭然ヲラシムルヲ要トス  
疆域 四隣ノ方位及ヒ西ハ某郡某村ヨリ東ハ某郡某村ニ至ルマテ若干里ト記ス南北之ニ準ス  
但シ國中幅員尤廣キ所ニ就テ之ヲ算ス若シ長短廣狹大異アル者ハ廣キ所若干里狹キ所若干里ト記ス

明治六年三月 太政官 (番外並無號)

七五七

十三年十二月九日 太政官達送ス

郡數 每郡村數ヲ揭ケ末ニ合數若干ト擧ク

戶數 新檢戶籍ノ調ニ仍ル

人口 同上但男幾人女幾人ト揭ク

歲額 草高若干現石若干雜稅若干ト擧ク

縣治 但シ以上三條原稿凡ノ字ヲ去リ某年ノ調ニ仍ルト注ス

首ニ縣廳ノ所在ヲ揭ケ其地ノ戶口及三府隣縣ヘノ距離ヲ注ス兩道アル者ハ各某道若干里ト

記ス其法本文ニ依テ次ニ全國幾郡何十萬石又ハ及ヒ何國幾郡何十萬石大國分縣ハ何々幾郡何十萬

石ヲ管スト書ス支廳ヲ別ニ提ケ管所ノ郡名歲額ヲ擧ク若シ半郡ヲ管スル所ハ村數歲額ヲ擧

ク末ニ管内士族戶口若干平民戶口若干ヲ別擧ス府廳ニ依テ

軍鎮 鎮臺分營及ヒ出張兵アル所ハ隊數ヲ揭ク

學校 大學某地中學某地生徒幾人ト擧ク未タ開サル縣ハ未置ト記ス小學ハ某郡幾所ト記ス未タ開

サハ縣ハ未置ト記ス

名邑 千戶以上ノ邑及ヒ舊藩城下ヲ擧ク

但シ物貨輻湊物力豐盛商道四通ノ地ハ千戶ニ滿タスト雖モ之ヲ擧ク寥落ノ地ハ舊藩城下

ト雖モ之ヲ除ク更ニ每邑下本縣ヘ幾里及ヒ廣狹ノ架ヲ記ス

驛路 官道ハ勿論支道ノ大ニシテ人馬ヲ繼キ立何路何通リト稱スル者悉ク之ヲ擧ク從前寺社領朱

印地又ハ各藩刑場等里數ヲ除クノ弊習アリ且ツ五十町又ハ七十町一里ト稱シ或ハ川缺ケ

山崩レ築地等ニテ別路ヲ開ク類ハ實際里數ヲ調ヘ三十六町一里ノ定數ヲ以テ之ヲ擧ク

港灣 灣内周廻幾町長若干幅若干何方ニ向ヒ深サ幾何實測ヲ經サル者ハ口實測ノ正シキニ依ル大船凡幾隻ヲ繫クト

云ヲ擧ク

島嶼 但シ最大港ヲ首ニ揭クヘシ

周廻一里以上ノ大島ヲ擧ク 但シ島中ニ村落又ハ名産アリ或舟行ノ標目等トナル者ハ一里ニ滿スト雖モ之ヲ擧ク其形

勢ノ大略ヲ注ス

岬角 俗ニ鼻或ハ崎ト唱フル者或ハ沙或ハ山或ハ暗礁或ハ遠淺悉皆之ヲ記ス

海峽 俗ニ追戸ト稱スル者長幾里及ヒ兩岸ノ距離ヲ記ス

暗礁 其深淺大小ノ大略ヲ注ス

燈臺 新置燈臺ハ勿論從前有リ來ル分ヲモ揭ク

名山 國中ノ大山ヲ擧ケ大川亦之ニ依テ更ニ山下某村ヨリ絶頂マテ若干里ト土人唱ヘ來ル里數ヲ正シ

テ之ヲ注ス

大川 何郡何山ヨリ出テ何川ヲ合セ何郡ヲ經何郡何村ニ至リ海ニ入ルト注ス

但シ大河ハ流レ幾里幅最廣キ所幾町ト注ス

池沼 某郡何村東西何里南北何里ト記ス

但シ周廻一里以上ヲ擧ク

瀑布 何郡何村某川ノ源又ハ何川ニ注ク及高サ幾丈幅幾間ト注ス

但シ高サ一丈以下ハ之ヲ略ス

温泉 某郡某村幾所泉質鹽氣ヲ混シ或ハ硫氣ヲ混シ何病ニ宜シキ等姑ク土俗ノ所說ニヨリテ注ス

大社 某郡某村某神ヲ祭ル某年中之ヲ建ツ及ヒ官幣國幣縣社ノ別ヲ注ス村社以下略之

巨刹 國中ノ大寺ヲ擧ク某郡某村某寺某僧開基某年中某之ヲ建ツ寺地何坪ト記ス

物産 國中盛ニ産出スル物品四方ニ販賣其地ノ潤澤ニナル者ヲ擧ク



七年太政官第三號  
控ニ依リ消滅

但シ每品産出ノ地名ヲ舉ク尤モ金銀銅鐵等原稿物産ノ部ニ收ムル者ハ別ニ鑛山ノ標目ヲ  
掲ク移シテ彼部ニ入ルヘシ

鑛山 何山 金銀銅鐵 鉛鋅石炭ト掲ケ何郡何村何山ノ奥採出ノ定額若干ト記ス

但シ廢山休山ナレハ幾年ヨリ休山又ハ廢山ト云フ記ス

一山川及ヒ地名物名社寺號等其地現今ノ稱呼ニ依リ悉ク假名ヲ加フ

一表目ヲ掲クト雖モ其國ニ在サル者ハ載セス無海國ノ港灣岬角ノ類是ナリ若シ其國ニヨリ舉サル  
可ラサル者アラハ別ニ表目ヲ立ルモ可ナリ

一國兩縣ニ跨ル者ハ兩縣打合セ訂正ヲ加フヘシ

○三月二十五日(達)

司法省へ

各縣官宅創立迄之間宿代賜方内規則別紙之通ニ候條去月廿五日伺濟相成候各地裁判所官員借宅宿  
料奏任以下之分ハ右ニ照準シ取計可有之候勅任官宿料之儀ハ追テ可相達候也

(別紙)

各縣官宅創立迄之間宿代賜方内規則

令	參事	判任	自典事至 權少尉	史生	縣掌	等	外自一至 至四等
一ヶ月金	三圓	同金	二圓	四圓	同金壹圓七十五錢	同金壹圓五十錢	

共月十五日前後ヲ以一ヶ月半ヶ月ノ區別ヲ立可相渡事

○三月二十五日(達)

閑院易宮

故一品孝仁親王後室吉子薨去ニ付御葬式ノ節儀仗隊トシテ步兵一大隊被差立候條此旨相達候事

○番外 (三月二十七日(正院))

諸省 府縣

十二年内務省成第  
二號達參看

新紙幣各種見本早々取廻メ可差出旨去ル二月九日相達置候處今以返納不致向有之不都合ノ事ニ候  
條四月廿日限悉皆返納可致事

○三月二十九日(達)

各通

金剛峰寺

今般其寺並教王護國寺ノ兩刹ヲ以テ古義真言宗總本寺ト被定候條未派所轄等ハ従前ノ通可相心得  
候事(教王護國寺へハ本文中教王護國寺ヲ金剛峰寺ニ作ル)

但席順ハ住職ノ先後ヲ以テ被定候事

○三月二十九日(達)

教王護國寺へ

別紙之通被 仰出候ニ付テハ住職ノ儀東寺一山衆議ヲ以テ人才撰舉共管轄應へ可申立候事(別紙ハ  
ヲ云)

○番外 (四月三日(正院))

諸省 府縣

來ル七日 神武天皇御例祭ニ付奏任官以下大禮服着用午十二時ヨリ四時迄ノ内參拜可有之事  
但大禮服所持無之輩直垂上下換用ノ儀ハ兼テ御布告ノ通道筋等ハ總テ一月廿九日ノ通可相心得事

○番外 (三月四日(正院))

諸省 府縣

來ル七日 神武天皇御例祭ニ付休暇ノ事  
來ル七日 神武天皇御例祭ニ付參拜ノ外參 朝ノ節大手阪下兩御門ニテ印鑑不相改御車寄御裏兩  
御門ニテ印鑑相改候條爲心得相達候事

○四月三日(逋達)(式部奏)

諸省 府縣

來ル七日 神武天皇御例祭ニ付各廳在京之奏任官以下大禮服着用午十二時ヨリ四時迄參拜可有之

明治六年四月 太政官 (番外並無號)

七六一

九年十二月二十八日陸軍省號外達參看

候也  
但參拜道筋御門通行印鑑等之儀ハ總テ一月廿九日之節通之事

○四月三日(迴達)(式部寮)

諸省等ハ

來ル七日 神武天皇御例祭ニ付勅任官之輩大禮服用午前第九時參朝可有之候也

○四月十二日(達)

陸軍省

神奈川砲臺祝砲式之儀別紙寫之通外務省ハ御達相成候條此旨相達候事

(別紙)

神奈川砲臺備附之砲床修繕落成ニ付内外祝事等之節祝砲式執行相整候條此旨爲心得相達候事(神奈川砲臺備付之砲床修繕中内外祝事等有之陸軍省ニテ祝砲式執行可致旨海軍省ハ御達ノ段二月二十三日陸軍省ハ達アリ略ス)

○四月十二日(迴達)(正院)

諸省等

官員歸省御暇日數之儀ハ往來ヲ除キ三十日御開屆相成候旨ニ付諸省使府縣ニ於テモ同様可取計且湯治御暇等之儀モ右ニ准シ候條此段爲心得相達候也

但病氣其外無據事故有之向ハ日延之儀追願爲致更ニ三十日間差許不苦候事

○五月二日(達)

別紙之通被 仰出候ニ付テハ最前御渡相成候各省事務章程中此權限ニ抵觸矛盾スル者ハ被廢止候條此旨可相心得事

(別紙)

勅旨

明治四年辛未七月制定スル所官省ノ位置職員ノ權限各其序ヲ得ルト雖モ當今ノ時勢現務上ニ於テ或ハ其弊ナキ能ハス故ニ太政官ノ職制章程ヲ潤飾ス百官其レ之ヲ奉承セヨ

八年四月十四日太政官達ヲ以テ改定

明治六年五月二日

太政官職制

天皇陛下親臨

正院

太政大臣

一員

天皇陛下ヲ輔弼シ萬機ヲ統理スル事ヲ掌ル

諸上書ヲ奏聞シテ制可ノ裁印ヲ鈴ス

左右大臣

職掌太政大臣ニ亞ク太政大臣缺席ノ時ハ其事務ヲ代理スルヲ得ル

參議

内閣ノ議官ニシテ諸機務議判ノ事ヲ掌ル

以上三職トス

大内史

諸機務ノ文書法案ヲ勘査シ國史ヲ修メ官記位記等ノ事ヲ掌ル

權大内史

職掌大内史ニ同シ

少内史

機務ノ文案ヲ草シ官記位記ヲ造リ記録ノ事ヲ掌ル

權少内史

職掌少内史ニ同シ

明治六年五月 太政官 (番外並無號) (太政官職制並正院事務章程)

大外史

文書記録傳達受付官中用度等ノ事ヲ掌ル

權大外史

職掌大外史ニ同シ

少外史

文書法案記録等ノ事ヲ掌ル

權少外史

職掌少外史ニ同シ

大主記

權大主記

中主記

權中主記

少主記

權少主記

各課ヲ分テ官中書記計算其他ノ事務ヲ處ス

内史所管七課一局ヲ置キ各其事務ヲ處ス其課長局長ハ奏任以上ノ官之ヲ專任又ハ兼任ス

履歷課

監部課

財務課

法制課

庶務課

歴史課

地誌課

翻譯局

外史所管二課一局ヲ置キ各其事務ヲ處ス其課長局長ハ奏任以上ノ官之ヲ專任又ハ兼任ス

記録課

用度課

印書局

博覽會事務局

式部寮

頭

寮中諸官員ノ首長ニシテ式禮祭祀一切ノ事務ヲ管理スル事ヲ掌ル

寮中諸官員ノ處務ヲ指令シ各課ノ事ヲ統督ス

寮中諸般ノ事務章程成規ニ照シテ之ヲ踐行整理シ三職ニ對シ其擔保ノ責ニ任ス

掌管ノ事務ニ於テハ三職ニ對シ其當否ヲ辨明スルヲ得ル各課ヲ廢立シ及寮中ノ諸規則ヲ更正ス

ル等ノ事アレハ正院ノ決裁ヲ乞テ之ヲ處置ス

寮中諸官員ノ能否勸惰ヲ監視シテ之ヲ進退黜陟スルト其員ヲ増減スル等ハ審核具狀シテ正院ノ

決裁ヲ乞フ

權頭

職掌頭ニ同シ

八年第五十九號布告ヲ以テ官内省ニ關ス

助

寮中各課ノ長トナリ其事務ヲ擔當スル事ヲ掌ル

各掌管ノ事務ヲ整理スルニ於テ頭權頭ニ對シテ其責ニ任ス

權助

職掌助ニ同シ

大掌典

祭事神饌ヲ掌ル

大屬

中掌典

權大屬

少掌典

中屬

權中屬

大神部

大舍人番長

大舍人

少屬

中神部

大舍人

中伶人

權少屬

少神部

權大舍人

少伶人

各課ヲ分テ寮中諸般ノ事務ヲ處ス

左院

職制章程追テ定ムヘシ

右院

各省長官次官

各當務實際ノ可否ヲ議スルヲ掌ル

勅命ヲ以テ臨時之ヲ開ク

太政官

正院事務章程

正院ハ天皇陛下臨御シテ萬機ヲ總判シ太政大臣左右大臣之ヲ輔弼シ參議之ヲ議判シテ庶政ヲ獎

督スル所ナリ

太政大臣左右大臣ハ各一員ヲ限リ參議ハ定員ナシ

凡ソ立法ノ事務ハ本院ノ特權ニシテ總テ内閣議官ノ議判ニヨリテ其得失緩急ヲ審察シ行政實際ニ

附スヘキモノハ奏書ニ允裁ノ鈐印ヲナシ然ル後主任ニ下達シテ之ヲ處分セシム

凡ソ允裁ヲ乞フ奏書ハ内閣議官議判ノ上内史其部類ヲ分チ之ヲ本帖及副本ニ寫シ本帖ニハ議官之

ニ連印シ内史之ニ記名シ之ヲ太政大臣ニ出ス太政大臣之ニ鈐印シテ御批允裁ヲ受ケ之ヲ外史ニ付

六月二十四日左院  
職制章程ヲ定ムルハ  
年第五十九號布告  
ヲ以テ左右院廢止

シテ奉行セシム

但内閣ノ議決スレハ即日本文ノ手續ヲナシ御批允裁ヲ經レハ翌日之ヲ頒布スルヲ恒例トス  
 凡ソ帝國一般ニ布告スル制度條例及勅旨特例ノ事件ハ太政大臣ノ名ヲ以テ本院ヨリ之ヲ發令ス  
 諸省使察司局ヲ廢立分合シ行政事務取捨ノ便宜ヲ謀リ緩急ヲ判スルハ皆本院ノ特權タリ  
 勅書奏書ニ加名鈐印スルハ太政大臣ノ任タルヘシ  
 凡ソ勅任官ノ薦舉免黜ハ宸斷ニ出ルト云モ必ス内閣議官ニ諮リ太政大臣之ヲ補替シテ進退ス  
 凡ソ奏任官ノ進退ハ其所轄ノ奏聞ニヨルト雖モ必ス内閣議官ニ諮リ太政大臣之ヲ處置ス  
 本院中判任官ノ進退ハ其所轄ノ具狀ヲ得内史ヲシテ之ヲ處置セシム  
 凡ソ裁判上重大ノ訟獄アレハ内閣議官共事ヲ審議シ或ハ臨時裁判所ニ出席シテ之ヲ監視スル事ア  
 ルヘシ

議政行政ニ屬スル諸文書法案又ハ勅書令條差除黜陟ノ記録等ハ内史ニ付シテ司掌セシム  
 恒例ノ公文既發ノ命令通常ノ達書等ハ外史ニ付シテ司掌セシム

内外史所屬ノ各局課式部察等ノ事務ハ各其主任ヲシテ之ヲ管理セシム  
 本院中專掌スル事務ノ條款左ノ如シ

第一款 帝國經理事業ノ緩急ヲ考勘シ之カ目的ヲ定ムル事

第二款 諸制度諸法律及諸規則ヲ草案シ之ヲ議決スル事

第三款 賞罰ノ事

第四款 歳入ノ事

既定ノ諸租稅ヲ増減變更スル事

新ニ諸租稅ヲ興ス事

第五款 歳出ノ事

諸官省各局各地方官公費ノ額ヲ定ムル事

諸官錄及旅費其他雜費ノ制限ヲ定ムル事

諸族ノ秩祿及社寺給與ノ制限ヲ定ムル事

臨時諸費ノ制限ヲ定ムル事

非常ノ軍費及國費ヲ裁定スル事

第六款 貨幣製造ノ方法及其品量ヲ定ムル事

第七款 金券ヲ發行スル事

第八款 内外國債ノ事

第九款 度量衡等ヲ改正スル事

第十款 州郡ノ經界ヲ畫定シ及府縣ノ制置土地ノ名稱等ヲ更正スル事

第十一款 諸港津ヲ開閉スル事

第十二款 驛遞運輸ノ法及郵便規則ヲ改メ道路ヲ變換シ里程ヲ釐正スル事

第十三款 地方警邏ノ規則ヲ定メ或ハ之ヲ變革スル事

第十四款 鐵道電信ノ行線燈臺設置ノ場所ヲ定ムル事

第十五款 兵制ヲ改革スル事

第十六款 兵員ヲ増減スル事

第十七款 鎮臺兵營及提督府等ヲ變更スル事

第十八款 城壘武庫等ヲ築造スル事

第十九款 裁判所ノ權限ヲ定ムル事

第二十款 各國條約ノ事  
第二十一款 官員ヲ増減スル事

内閣ハ 天皇陛下參議ニ特任シテ諸立法ノ事及行政事務ノ當否ヲ臆判セシメ凡百施政ノ機軸タル所ナリ

内閣ノ職員ハ各地方監察按撫布政等ノ故ヲ以テ特命派出シ各部ヲ巡回スルヲアルヘシ  
凡ソ行政實際ニ涉ル事項ハ必ス其便否得失ヲ主任ノ長官ヲ呼ビ之ニ諮問シテ後太政大臣ニ出スヘ  
當爾不參ノ者アレハ回議ヲ其邸ニ送リ其所見ヲ取ルヘシ

御批

右職制事務章程

上裁欽定スル所ナリ能ク之ヲ守リ其程限ヲ愆ル勿レ

明治六年五月二日 奉勅

太政大臣三條實美

司法省

○五月三日(達)  
昨年來大藏省官員府縣へ出張舊藩負債調査候處舊官員共金主ト申合詐偽ノ取計致レ候者往々有之  
孰モ及自首事實明白ニ相成其罪狀夫々相當ノ處分可相成答ノ處畢竟積年封建ノ餘習ニ出曾テ私計  
ヲ爲シタル者ニ無之其情實憫諒スヘキニ付壬申第百三號布告ニ照シ自訴ノ廉ニ擬シ以特旨一切無  
罪ノ沙汰ニ相成候條此段相達候事

府 縣

○五月四日(達)(吏官)  
全國ニ布告スル制度條例及ヒ勅旨特例ノ事件ハ自今太政大臣ノ名ヲ以御發令相成候條爲心得此段

十四年太政官第百一號達若十九年同第六十九號達ニ依リ消滅

及御達候也

○番外 (五月五日)(達)(正院)

皇城炎上ニ付テハ各省使府縣等ヨリ上申有之未タ下達不相成條件過半燒失候條更ニ進達可有之尤

諸省使府縣

○五月五日(達)

御用筋ヲ繁雜ニ付差向キ難相延件而已可差出其他ハ漸々順次開申可有之候事

外務省

○五月五日(達)

其省語學所文部省へ可引渡事

陸軍省

○番外 (五月五日)(正院)

明六日正院休暇無之候間此旨爲心得相達候也

陸軍省

○五月七日(逕達)(式部寮)

馬場先門内元教部省ヲ以テ太政官代ト被相定ニ付テハ表裏二門へ番兵可差出候此旨相達候事

諸省

○五月八日(達)

諸官員御用ニ付 皇城炎上跡へ通行之儀當分之内當寮紙印鑑並大藏省印鑑之外ハ從前之御門印鑑

諸省

○五月八日(達)

皇城炎上正院記録大半燒失ニ付建省以來御達願伺届往復書類及舊官省ヨリ引繼ノ簿册中同様ノ事

諸省

件共總テ漸次騰寫可差出尤幸未八月御改正後ノ分ハ可成丈ケ早々差出候條可致候此段相達候也

但當年一月以來ノ分差向入用有之候ニ付記録課官員向々へ出頭寫取候間其時々差支無之様掛リ

諸府

○五月八日(達)

皇城炎上正院記録大半燒失ニ付置府以來御達願伺届往復書等ノ諸簿册早々騰寫可差出尤當年一月

諸府

明治六年五月 太政官 (番外並無號)

文部省第七十三號 達

十年八月十三日太 政官ヲ赤紙假皇居 内ニ移ス

七月二十四日達ヲ 以テ改ム

以來分ハ至急差出候様可致候此段相達候也

但舊府藩縣ヨリ引繼ノ諸記録中御一新以來御達伺願届往復等ノ分ハ漸次謄寫可差出候也(同日請  
願ハ同  
様速ア)

十月二十七日達  
以テ兼任大藏卿

○番外 (五月九日)(正院)

諸省使府縣へ

六月十日達

參議大隈重信本官ヲ以テ當分大藏省事務總裁被

仰付候條爲心得此段相達候事

○番外 (五月九日)(正院)

明十日ヨリ午前第九時出頭午後第三時退出ノ事

但官中拍子木ヲ以テ三時ヲ報シ候ハ、各退出可致尤臨時御用有之者ハ此限ニ非ス

○番外 (五月十日)(正院)

諸省使府縣へ

十月二十七日達  
以テ免兼官十年行  
在所達第四號ヲ以  
テ官位職務

參議西鄉隆盛被任陸軍大將兼參議候條爲心得此段相達候事

○番外 (五月十日)(正院)

諸省使府縣へ

諸省使寮司各府縣並華士族等ヨリ差出置候記録圖籍類 皇城炎上ニ付燒失候條此段爲心得相達候

○五月十日(達)

大藏省

皇城燒失跡取片付ノ儀悉皆土木寮へ委任被

仰付候條早速取掛リ候様可致尤金銀銅鐵ハ勿論石瓦

ノ類等夫々相當所置可致事

但燒毀御物取出シ方ノ儀ハ宮内省式部寮官員へ打合可申事(同日宮内省式部寮へ心得速アリ略ス)

○五月十五日(達)

大藏省

米金獻納ノ儀ニ付テハ壬申第十七號公布ノ旨モ有之候所今般皇居炎上ニ付獻金願出ル者往々有之

右ハ非常ノ儀強テ不被爲受候テハ却テ臣民ノ誠意モ貫徹不致筋ニ相當リ候ニ付願ノ通御開届相成

六月三日達ヲ以テ  
改ム

上納ノ儀ハ其省へ可伺出旨及指令候條此段相達候事

大藏省

○五月十七日(達)

陸軍省

下總國千葉郡大和田原ヲ習志野原ト名ケ自今操練場ト可相定旨被

○五月十七日(達)

陸軍省

元箱館府砲兵其省管轄被 仰付候條開拓使ヨリ可受取事

○五月十七日(達)

開拓使へ

其使管轄元函館府砲兵陸軍省管轄被 仰付候條同省へ可引渡事

○五月十七日(達)

大藏省

越後國新發田城陸軍省管轄被 仰付候條同省へ可引渡事(新發田城陸軍省管轄被仰付旨同日同省へ速アリ略ス)

○五月十八日(太政大臣演說)

在京府縣知事令參事等一同へ

各地方官集會ノ折柄ニ付左之趣旨及演說候

各地方ノ事務實際精究ノ上近々釐正周備ヲ求ムヘキ御趣旨ニテ既ニ今般議會ニ於テ決定セシ箇條

ハ奏進ノ上允裁ヲ受クヘシ一體各地方官ノ議會ハ民務ノ便宜ヲ實地ニ徵考スル緊要ノ事ニテ政理

上得益少トセス故ニ今後議事ノ體裁ヲ撰定シ左院ニ於テ每歲之ヲ開クヘシ其規則等ハ決定ノ上頒

布可及ト雖モ今般太政官職制並事務章程潤飾ノ上御發令相成右御趣意ノ綱領ハ既ニ 勅旨ニテ略

承知モ可有之候得共辛未七月制定ノ官省位置職員權限各其序ヲ得ルト雖モ實地現務上ニ於テ各省

委任ノ權限ヲ充擴シ各自其規模ノ皇張ヲ期望スルヨリ其未弊或ハ彼此權力相軋スルノ勢ヲ生シ動

モスレハ理論ニ空馳シテ實際ノ事業緩急前後其適度ヲ失ヒ一致平均ノ準ヲ得ス故ニ太政官ノ職制

五月三十日仙臺  
三ノ函館砲兵  
ト稱ス二十年陸軍  
會達第三十六號  
達ヲ以テ廢止

章程ヲ潤飾シ各省ノ權力ヲ平準シ國勢民力ヲ審ニシテ經理事業ノ緩急ヲ定メ歳入歳出ヲ量テ百般政務ヲ議行セシメ以テ前件ノ弊ヲ釐正セントノ旨趣ニテ各縣ノ體裁ニ至ツテハ目下實務ノ妨碍ヲツテ更正ヲ加ヘサルヲ得サルノ外ハ左院ノ議會ヲ開ク迄都テ從前ノ通据置更ニ分合附削ヲ爲サ、ルヘシ各地方官能ク此旨ヲ體シ營務一層勉勵可有之候事

○五月十九日(達)

式部 寮

八年太政官第五十六號  
六號迄ヲ以テ正院  
ヨリ修達ス

同 上

海軍 省

○五月十九日(達)

陸軍海軍兩省委任官任敍ノ節以來官位記トモ封書ヲ以テ其省ヘ可相達事

○五月二十二日(達)

大藏 省

七年三月二十二日太  
政官達ニ依リ消滅

其省陸軍省委任官任敍ノ節以來官位記トモ封書ヲ以テ式部寮ヨリ兩省ヘ相達候條此段可相心得事

裁判所設置ノ府縣ニ限リ捕亡定額金ノ半高本年六月一日ヨリ月割ヲ以テ司法省ヘ相渡來明治七年ヨリハ全年ノ半高可相渡候尤六月一日以來ノ半高ハ第一常備金ノ内ヘ結込管下取締探索等ノ費用ニ充テ捕亡ノ名目ハ可相廢候此旨相達候事

但本文ノ金額司法省ヘ渡方取計候上詳細可申出事

○五月二十二日(達)

司法 省

同 上

先般裁判所被置候府縣ニ限リ捕亡吏自今其省所轄被 仰付候然ルニ右經費ノ備於地方官モ聽訟斷獄ノ外部内ノ探索或ハ取締ヲ始一般ノ警備無之テハ撫御ノ道難相立施政實際上差支有之仍テ定額金ノ半高ハ其儘地方官ニ委シ候ニ付本年六月一日ヨリ半高月割ヲ以テ致支給來ル明治七年ヨリハ全年ノ半高可相渡候條右金額ヲ以テ目的トシ捕亡一切ニ費用ニ辦給可致候此旨相達候事

但金額受取方ハ大藏省ヘ可打合事

○五月二十二日(達)

司法 省

九年第四十八號布

開拓使ノ備任官ト雖杖以下ノ處罰ハ律面ニ照シ可致處分旨兼テ御委任候處自今同使東京詰ノ分ハ判任官以下犯罪ノ輩糺彈ハ勿論待罪書指出候分共其省ニ於テ可致處決候此旨相達候事

但北海道本支廳ハ御委任如舊候事

○番外 (五月二十九日(正院))

諸省使府縣ヘ  
諸願伺届等ノ文面中往々簡略ニ過キ事理判然セサルニ因テ往復推問等ノ手數ヲ重キ自然差圖及遷延候次第ニ付向後ハ其顛末順序等詳細記載シ事理明瞭候條有之度且前日差出候事件ニ付再差出候類ハ辛未八月中相達候趣モ有之候得共見合スヘキノ諸記類悉皆熾失ニ付追テ記録整備候迄都テ前日ノ寫ヲ添可差出其他ハ最前相達候通可心得候此段更ニ相達候事

○五月二十九日(達)

文部 省

太陽曆御頒行ノ節干支ヲ除キ候處既往ノ年日推歩候ニハ干支相用候方便利ニ付自今曆上ニ年日トモ干支記載可致事

○六月三日(達)

大藏 省

皇城炎上ニ付獻金願出候者ハ御許容相成上納ノ儀ハ其省ヘ可伺出旨及指令候段先般相達置候處御詮議ノ次第有之以來都テ宮内省ヘ爲相納候條此旨爲心得相達候事

○六月三日(達)

宮内 省

皇城炎上ニ付諸向ヨリ獻金願出候節以來都テ其省ヘ相納候條及指令候條此旨相達候事

○六月八日(達)

外務 省

各國公使館地所其省用地ノ名義ヲ以テ貸渡來候處自今東京府ニ於テ處分候ニ付同府ヘ可引渡事

○六月八日(達)

外務 省

各省公使館地所其省用地ノ名義ヲ以テ貸渡來候處自今東京府ニ於テ處分候ニ付同府ヘ可引渡事

明治六年六月 太政官 (番外並無號)

七七五

九年四月十四日  
二十一日開張使東  
京出張所廢止十五  
年第八號布告ニ依  
リ消滅

八年三月二十三日  
内務省三編ス十六  
年太政官第十九號  
布告ニ依リ消滅



○番外 (六月九日) (達)

各省使府縣

前大藏大輔井上馨同三等出仕澁澤榮一前日差出候建言中謬誤ノ廉有之候ニ付歲計概算更精密取調候様大藏省事務總裁參議大隈重信へ兼而相達置候處此度別紙ノ通取調差出候ニ付爲心得此段相達候事

明治六年六月九日

太政大臣三條實美

(別紙)

參議大隈重信謹テ 太政大臣閣下ニ白ス獲キニ前大藏大輔井上馨同三等出仕澁澤榮一カ辭職ニ臨ミ閣下ニ上ル所ノ建議其論固ヨリ愛國ノ衷情ニ出ルト雖モ措辭實ニ過キ議論激ニ超ヘ且歲出入ヲ計ルニ至テハ多ク臆測ノ概算ニ出ツ是レ閣下ノ其書ヲ黜テ採用セサル所以ナリ然而シテ誤テ新聞紙ニ刊行セシヨリ中外人民其主職ノ上書タルヲ以テ固ヨリ眞確ナルト信シ大ニ紛紜ノ物議ヲ生スルニ至ル重信現職大藏ノ總裁ヲ辱クス特ニ其會計實況ノ當否ヲ辨明スヘキノ欽命ヲ奉セリ於是テ其省ニ就キ其主職ノ官員ニ審問シ其簿記ヲ查覈シ實額ヲ計算シ乃チ別記ノ正數ヲ得タリ因テ簿錄上呈ス抑モ財政ハ皇國安危ノ關係スル所苟モ其當ヲ誤レハ不測ノ患害ヲ釀スヲ彈指ノ間ニ在ルヤ固ヨリ論ヲ俟サルナリ然ルニ今二氏ノ論スル所ノ如クナレハ我政府ニ對シ中外人民ノ信憑依頼ヲ薄クシ是カ爲メニ疑惑ヲ生スルニ至ラン然ル時ハ其關係スル所亦大ナリトス故ニ切ニ望ム今錄呈スル所ノ歲計表ヲ端ニ中外人民ニ公布シ以テ其疑惑ヲ解キ其物議ヲ止シコトヲ誠恐ノ至ニ堪ヘス

一此歲入ハ近年ノ收納ノ科目ニ準據シテ今後周年ノ稅額ヲ計上シ其收入得ヘキノ大數ヲ舉クルモノナリト雖モ既往ハ實際之レヲ收課スルニ及ンテハ未納或ハ延納其他種々ノ通弊アルヲ以テ常ニ其額ニ充ツル能ハサルコトアリシナリ然レトモ今實際ニ付テ監督シ如此ノ通弊ヲ釐正

シテ高緒其序ヲ得ルニ至ラントスレハ歲入ノ額ハ増加ストモ減損スルノ理斷ヘテナキナリ

一此歲出モ亦前年ノ科目ニ因據シテ計上セシナレハ今後ニ至テモ大ナル差異ヲ生スルコトナカルヘシ然レモ定數ノ費ハ省冗節制シ百般其序ヲ得ルニ至テ必ス減省スヘキモノナリ然リ而シテ臨時失費ノ如キハ豫算シ得難キモノナレハ其額或ハ之レヨリ増加スルヤモ難測モノナリ然レモ歲入ノ歲出ヲ償フ能ハサルノ害ナキハ決然疑フヘカラサルナリ

一先次倫覽ニテ告知セシ我歲入歲出ノ表澳國博覽會ニ我公使ノ攜帶セシ表及ヒ今此ニ掲クルモノト歲入歲出ノ金額相異ル所以ヲ辨明セン抑我邦ヤ各外邦ト異ニシテ庶民ヨリ納ルノ所ノ租稅多クハ米ヲ以テスレハ其米價ノ高低ニ依リ出入ノ額ニ於テ大ナル差異ヲ生スルナリ實ニ今年ノコトキハ米價低下ノ極度ト雖モ猶今此ニ揭示スル金額ノ歲入アリ又近時ノ如キハ辰巳兩度ノ戰爭及ヒ廢藩立縣ノ改革ヲ施行セシナレハ其費莫大ニシテ二三ヶ月間ノ算計ニ於テモ亦大ナル差異ヲ生セシナリ又稅法更正ノ際大ニ收納ノ額上ニ差異ヲ生セシニ因テナリ今ヤ廢藩立縣ノ舉モ整ロ其序ニ就キ稅法ノ釐正モ其端緒ヲ得ルニ至リシナレハ從來ノ田地ハ是迄一般政府ノ所有民所有タルノ確據ヲ得セシメ且從來ノ米納額シ金納ノ稅カ近時地券ヲ施行シ人額ニ釐正スレハ米價ノ高低ニヨリテ歲入ノ増減ナキ等ヲ云歲入ノ稅日ニ増シ月ニ加ルニ從テ起手ノ事業モ大ニ増加スヘシト雖モ歲入ノ歲出ヨリ多キハ論ヲ待サルナリ

一今此ニ掲クル定費臨時費ノ如キハ素ヨリ確定ノ數ニハアラス今ヤ創業ノ際新タニ着手スヘキ百般ノ作業則チ轍路ヲ設ケ燈臺ヲ築キ電線ヲ架シ諸般ノ工場ヲ開設シ或ハ官廳ヲ造營シ陸營ヲ建築スル等ノ費用ヲモ計上セシモノナレハ明年歲出ノ額減損スルコト必然ナリ上ニ掲クル件々ノ如キハ一時成功ノ上ハ年々新建スヘキモノニアラス唯修繕ノ細費ヲ要スヘキモノニシテ又夫レヨリ生スル利益アルコト疑ナシ然ラハ追年歲出ハ減シ歲入ハ加ルニ至ルヘキナリ万一歲入ノ額不足ノコトアルトキハ上ノ如キ起手スヘキ業ニ付キ緩急輕重ヲ計リ簡裏ノ緩輕ナルモノヲ次年

ニ譲リ得ルコトナレハ到底歳入ノ歳出ヲ償フ能ハサルノ害ナキコトヲ重言スルモノナリ諸事ノ成功及ヒ其費用ノ如キハ次年ニ出ス處ノ表中ニ於テ明了ニ揭示スヘキナリ

一國債ノ如キハ内外ノ兩債ヲ負フト雖モ外債ヲ償ニハ諸族ノ祿制ヲ定メ有餘ヲ以テ不足ヲ償フノ規ヲ設ケテ以テ之ヲ支消スルノ一處法アリ又内債ノ如キハ之レニ充ルモノアリ則チ政府ヨリ庶民ヘ貸出セシ金穀ナリ又紙幣ノ發行アリト雖モ之レニ充ルニ準備金ト稱スルモノニシテ大藏省ノ倉庫中ニ藏蓄セシモノアリ此三條ノ分明ナル解説ハ不日精細ニ調査シテ公布スヘキモノナリ

明治六年歳入出見込會計表

歳入之部

第一 正租 總計金四千万六千四百四十八圓二十八錢三釐

内譯

田租

金四千二十六万三千五百八十八圓六十錢

三府地稅商賣  
免許稅其外

金三十一万六千二百三十三圓六十八錢三釐

各種ノ鑑札稅

金三十三万五千圓

船稅

金三万四千圓

婢僕車馬ノ稅

金六万三千二百三十六圓

第二 印紙稅 總計金百三十万圓

第三 酒類其外各種ノ稅 總計金二百十三万七千六百四十一圓

内譯

酒類稅

金七十七万四千圓

絞油稅

金五万五千圓

砂糖稅

金二十八万七千七百七圓

各種ノ稅

金百二万九百三十四圓

第四 海關稅並諸稅 總計金百八十二万三千九百九圓

内譯

東京

金四千六百八十四圓

橫濱

金百二十七万四千八十一圓

兵庫

金三十万五千二百三十八圓

大坂

金八万九千三百三十四圓

長崎

金十五万三千七百二十三圓

新潟

金四百四十九圓

第五 郵便稅汽車電信ノ收入總計金四十万圓

内譯

郵便稅

金二十万圓

汽車電信ノ收入

金二十万圓

第六 北海道收納高 總計金三十三万八千八百十二圓五十錢

内譯

產物ノ稅

金三十一万圓

海關稅

金二万二千圓

正租雜稅

金六千八百十二圓五十錢

第七	臨時種々ノ入高	總計金百七十三万七千二百五十錢
內譯		
	貸出金及利足	金百二十二万九千八百八十二圓五十錢
	欠所物其外拂下々	金二十万八千九百十圓
	贖贖金	金二十万圓
通計		
	通常歲入	金四千七百万六千八百八十圓七十八錢三釐
通計		
	臨時歲入	金百七十三万七千二百五十錢
歲入	總計金四千八百七十三万六千八百八十三圓二十八錢三釐	
歲出之部		
第一	國債消却	總計金二百六十七万九千九百圓
內譯		
	無利足ニテ元金ヲ	金五十万八千七百圓
	償還スヘキ内國債	同 明治五年分
	利足ト共ニ元金ヲ償還	金百十万四百圓
	スヘキ内國債及利足	同上
	一時償還ス	金二十五万圓
	ヘキ内國債	元金四十五万圓
	外國債	利足金三十七万圓
第二	實業米	總計金千二百六十一万三千八百一十八圓三十五錢五釐
第三	營繕堤防	總計金四百萬圓
第四	外國交際	總計金十万六千四百四十圓

第五	太政官	總計金三十三万圓
第六	各省使 府縣	總計金二千三百二十五万五千六百七十二圓十錢九釐
內譯		
	外務省	金十六万八千七百圓
	大藏省	金八十九万三千四百九十九圓
	陸軍省	金八百万圓
	海軍省	金百八十万圓
	文部省	金百三十万圓
	教部省	金五万圓
	工部省	金二百九十万圓
	司法省	金六十三万圓
	宮内省	金六十四万三千五百五十二圓六十錢九釐
	開拓使	金百十七万七千三百一十二圓五十錢
	三府	金八十万三千四百一十一圓
	諸縣	金二百九十九万二千二百六十七圓
第七	府縣捕亡及選卒費	總計金八十五万圓
內譯		
	三府選卒	金五十七万九千三百十三圓
	各縣捕亡	金二十七万六千八百八十七圓
	及選卒	
	米英公使館	金八万九千二百圓
第八	佛英公使館	

第九 紐育領事館 金二万百六十圓  
第十 臨時歲出 總計金四百五十五万七千三十圓

内譯

大藏省郵便改正積蓄摺引 金百六十四万二千六百圓  
換改造及國債證券製造其外 金十七万二千三百圓  
特命全權大使各洲巡行 金二十四万二千三百三十圓  
澳國博覽會 金二百五十万圓  
一般臨時費豫備

通計

通常歲出 金四千二百三万九千四百八十八圓四十六錢四釐

通計

臨時歲出 金四百五十五万七千三十圓

歲出總計金四千六百五十九万六千五百八十八圓四十六錢四釐

歲入總計金四千八百七十三万六千八百八十三圓二十八錢三釐

歲出總計金四千六百五十九万六千五百八十八圓四十六錢四釐

歲入ノ歲出ヨリ多キ高

金二百十四万三百六十四圓八十一錢九釐

内國債

國債

有利足債金千三百七十五万五千八百七十三圓

無利足債金千二百七十一万八千四百七十八圓

正誤参照卷看

同上

同上

合金二千六百四十七万四千三百五十一圓

内

金七十五万八千七百圓 年賦ノ内明治五年六年分并時支消ノ分共本年債却ノ高

殘債金二千五百七十一万五千六百五十一圓 明治七年以後可償却分一

外國債

債金五百五十万九千五十圓

合内外國債 三千二百二十二万四千七百一圓

(參照)○番外(六月十七日)(達)

本年六月九日布達ニ及候歲入出見込會計表申候寫有之左ノ通正誤候條此段相違候事

正誤

一通常歲出金四千二百三万九千四百八十四圓二千三百八十八圓八錢九釐

一歲出總計金四千六百五十九万六千五百八十八圓四十六圓五十九圓五錢九釐

一歲入ノ歲出ヨリ多キ高金二百十四万三百六十四圓八十一圓二錢九釐

諸

省 使府縣ハ  
ハ心得達

○番外 (六月十日)(達)(正院)

各廳トモ午前第九時出頭午後三時退出ノ事  
但事務ノ都合ニ因リ時限ヲ伸ヘ候儀ハ適宜タルヘキ事

右ノ通被定候條此段相違候也

○番外 (六月十日)(正院)

官用界紙是迄八行ノ處今般十行ニ相改候條各廳ニ於テモ同様相改可申事  
但八行界紙遣ヒ殘ノ分ハ當分取交セ相用ヒ不苦候事

○六月十二日(達)

司法省

七月二十三日達探

八年太政官第五十二號達ヲ以テ改ム

八年内務省丙第五號達ヲ以テ改ム

明治六年六月 大政官 (番外並無號)

郵便脚夫へ短銃提携差許候ニ付別冊之通各府縣へ布達可取計旨大藏省へ相達候條爲心得此段相達候也(別冊ハ十二月二十八日大藏寄達ニ同シ)

○番外 (六月十三日)(正院)

第九十八號布告中本年第七十九號布告ト記載セルハ第七十九號ノ誤ニ候條此旨更ニ相達候事  
○六月十五日 司法省

七年第八十一號布告ヲ以テ第五十六號布告ヲ廢シ證券印稅規則ヲ定ム

證印紙發行ノ儀ニ付其省申立ノ趣モ有之候得共本年第五十六號ノ通御治定公布相成候ニ付六月一日以後ノ證書ニ印紙貼用無之分ハ規則ノ通相心得其以前ノ證書ハ印紙貼用無之トモ取揚裁判可致事  
○六月十五日(達) 文部省

醫制取調被 仰付候事

○六月十五日(達) 文部省

今般醫制取調被 仰付候ニ付テハ先般上陳相成候司藥局ノ儀モ醫制ノ一部分ニ有之候條醫務ノ章程着手ノ順序等見込相立更ニ可申出事  
○六月十五日(達) 宮崎縣

九年第百十二號布告ヲ以テ廢止

其縣廳日向國宮崎郡上別府村ニ被移候事

○六月十七日(達) 大藏省

皇城燒失跡取片付ノ儀ニ付燒毀御物ノ儀ハ宮内省式部寮官員打合セ右取出シ候上ハ宮内省へ可引渡此旨更ニ相達候事  
○六月十八日(沙) 大藏省

司法省第二十五號 送達布

司法省並各裁判所及ヒ諸省府縣ニ於テ取立候罰金諸科料ノ類自今有合候金高本月ヨリ月々其省へ可相納旨司法省へ相達候條此旨可相心得事

同上

○六月十八日(沙)

司法省

其省並各裁判所及ヒ諸省府縣ニ於テ取立候罰金科料ノ類毎年十一月中取東大藏省へ納付可致旨本年一月相達候處自今其省ニテ取立ノ分或ハ他向ヨリ相納候分共有合候金高本月ヨリ月々大藏省へ納付可致此旨更ニ相達候事  
但去ル己巳ノ年ヨリ本年迄取立候諸賍贖金ハ早々大藏省へ納付可致尤右ノ内流用致シ置候分ハ決算ノ上納拂取可取計事

○六月十九日(達) 司法省

○六月十九日(達)

外國人訴訟規則第二百五號公布相成候處各國公使へ談判之都合モ有之候條實際施行ノ分ハ暫時見合可申依而此段申入候也

○六月二十日(達)

司法省

出火ノ節場所出張ノ警保寮官員ハ選卒番人等ヲ指揮シ家財掠奪ノ惡徒或ハ防禦ノ妨ヲ成シ候輩ヲ巡察制止可致事

但消防筋ノ儀ハ總テ東京府官員指揮候儀ト可相心得事

○六月二十四日

左院職制

議長

會議ヲ提掌シ國憲民法ヲ編纂スル事ヲ總裁シ或ハ命ニ應シテ法案ヲ草ス

諸建白ノ可否ヲ審辨シテ上呈スルヲ掌ル

各省ノ卿ハ議事ニ出席スルノ職權アリ

副議長

七年一月九日太政官送以テ警保寮ヲ内務省ニ屬ス  
十二月二十五日達ニ依リ但改正  
七年二月十二日太政官送以テ改正

議長閣席スレハ共事務ヲ代理ス

- 一等議員
- 二等議員
- 三等議員
- 四等議員
- 五等議員

右ヲ常在官トス

常在議員之外地方委任以上ノ官之ニ兼任シ又各省委任以上ノ官之ニ兼任シ總テ議事ヲ掌リ常在議員ハ兼テ編纂及ヒ法案ヲ草スル事ヲ掌ル人民建白書ニ附議スルヲ掌ル

- 一等書記官
- 二等書記官
- 三等書記官

文案記録會計ノ事ヲ掌リ及建白書ヲ勘査シ或ハ編纂ノ事ニ兼任ス

- 一等書記生
- 二等書記生
- 三等書記生
- 四等書記生
- 五等書記生

書記官ニ分屬シテ文案記録會計等ノ事ヲ掌ル

- 一等筆生
- 二等筆生
- 三等筆生

淨寫記録計算ノ事ヲ掌ル

左院事務章程

一本院之事務ハ會議及國憲民法ノ編纂或ハ命ニ應シテ法案ヲ草スルヲ掌ル所ナリ

一凡制度條例ヲ創立シ或ハ成規定則ヲ增損更革スルヲ總テ議決之上正院ニ上達スヘシ

一議長院中決議ノ事ニ付正院ニ出テ可否ヲ審辨スルヲ得ルト雖トモ之ヲ行フト否トハ固ヨリ論スルヲ得ス

一凡事ヲ議スル時ハ衆論ノ協同スル所ニ從ヒ其說ノ多キヲ取ルヘシ其說ノ多少相伴シキ者ハ議長之ヲ決スヘシ

一議員黜陟轉任セシムル事正院ノ審辨ニアリト雖トモ亦本院ノ具案ヲ徵スヘシ

一議事ニ當リ行政ノ官員ニ諮詢スヘキ事アル時ハ正院ニ乞ヒ其人ヲ出席セシムル事ヲ得ヘシ

○

十月十二日 逡參行

一議事章程及本院ノ開閉ハ特裁ニ依リ定ムヘシ

一此ノ章程更ニ增補改正スヘキ事アレハ尙衆議ヲ盡シ上裁ヲ經テ定ムヘシ

○六月二十四日(週達)(武部奏) 諸省等

來ル三十日大被例之通被執行候得共今度之儀ハ御場所御狹少ニ付各屬勅奏判之官員不及參任候條

此段相達候也

○六月二十五日(週達)(史官) 諸省等

本月二十八日以來三八ノ日ニ限リ内閣ニ於テ午前第九時ヨリ十二時マテ會議ニ付其當日三職ヘ面

謁等ノ爲メ出頭ハ午後第二時後ト御心得相成度此段申入置候也

○七月二日(達) 東京府

共府下古着古金等渡世ノ者取締規則別冊ノ通被相定候條施行可致候事

但警保寮ヘ打合可取計事

(別冊)

今般盜ノ品並遺失品搜索便利ノ爲メ左ノ商業ノ者夫々規則相立候事

一質屋

一古衣類商賈

一古銅鐵類商賈

一古道具類商賈附古本商賈

一兩替屋

一紙屑屋

社ヲ結フノ規則

九年警視廳乙第五  
號連ヲ以テ事務ヲ  
警視廳ノ管理ト爲  
ス十六年第十五號  
布告ニ依リ消滅  
布告ニ依リ消滅

七年十一月二十七日  
日本政官達ヲ以テ  
但書刪除

- 第一則 各商共毎小區ニ社ヲ結フヘシ共同商ノ多寡ニ隨ヒ每區内兩社或ハ隣區ニ亘リ一社トスルノ類共適宜ニ任セ毎社人撰シテ頭取一人或ハ數人ヲ置テ取締ヲ爲サシム可シ
  - 第二則 質屋兩替屋皆同業ニテ社ヲ結フ可シ
  - 第三則 古衣類商賣ハ從前ノ古著屋古著買西洋服ノ古ル品等ヲ取扱フ者ヲ編入シテ社ヲ結フ可シ
  - 第四則 古銅鐵金銀類商賣ハ從前ノ唐物屋小道具屋古鐵買並ニ潰シ金銀地金賣買時計屋袋物屋刀劍類ヲ取扱フ者ヲ編入シテ社ヲ結フ可シ
  - 第五則 古道具類商賣ハ從前ノ雜道具屋大道具西洋靴等ノ古ル器ヲ取扱フ者ヲ編入シテ社ヲ結フヘシ
  - 第六則 紙屑屋ハ同業ニテ社ヲ結フ可シ  
但シ其一家ヲ成サスシテ紙屑ヲ買廻リ身元儘ナラサル者ハ紙屑屋ノ買子或ハ雇丁トナシ鑑札ニ何某買子ト記シ所持セシム可シ
  - 第七則 從來商業ノ者又ハ新ニ其商業ヲ營ム者悉皆其地方廳ノ鑑札所持致スヘシ
  - 第八則 各社毎ニ名前帳二冊ヲ製シ商業並住所本籍寄留姓名年齡等ヲ記シ銘々印形ヲ押シ其區戶長へ差出ス可シ戶長ハ一冊ヲ有シ一冊ハ警部ニ付シ若シ移住シ從前ノ業ヲ營ム者ハ鑑札名前帳共相改メ又ハ新加入改業病死等其時々届出ヘシ  
但名前帳ヲ製スル等ハ其社頭取ノ任タル可シ
  - 第九則 新ニ入社致ス者ヨリ入金ヲ食リ取リ又ハ飲食其他ノ入費ヲ相懸ル等ノ事相成ラス
  - 第十則 鑑札料商社頭取手数料等ノ入費ハ戶長ニテ取調フヘシ不相當ノ儀相成ラス
- 揭示條款
- 第一條 銘々明細帳ヲ製シ其社頭取戶長ノ押切判ヲ取リ紙數ヲ記シ置キ其商業取引人ノ住所姓名物品等總テ此帳ニ記載ス可シ且又別ニ品觸寫帳ヲ製シ置キ品觸アラハ之ヲ詳記ス可シ  
但品觸寫帳ハ頭取戶長等ノ押切判ニ及ハス
  - 第二條 典賣主ノ住所姓名ハ兼テ熟知ノ者ト雖トモ必ス詳細ニ明細帳ニ記載シ當人ノ一判ヲ取リ置ク可シ若シ住所姓名等ヲ熟知セサル者ハ證人ヲ同道致サセ其兩判ヲ取リ置ク可シ兩替屋モ金高並ニ替主ノ姓名住所等ハ同様タル可シ  
但證人ハ男女ヲ不論其住所姓名ヲ知ル者ニ限ル可シ
  - 第三條 兩替屋ハ替へ主所持ノ分體札疊金ト見受ル時ハ其旨ヲ申開速ニ巡查番人等へ届出可シ又ハ古金銀或ハ身分不相應ノ金銀ヲ兩替スル者アラハ必證人ヲ立サセ兩判ヲ取リ置ク可シ
  - 第四條 同商ニテ鑑札所持ノ者ト賣買ハ一判ニテ然ル可シ
  - 第五條 官廳ノ印アル品或ハ官品ト見定メタル物ヲ典賣スル者アラハ留メ置巡查番人又ハ其詰所ニ訴出ツ可シ
  - 第六條 典賣主又ハ兩替ヘテ頼ム者ヲ怪シク見受タル時ハ速ニ巡查番人等へ届出ツ可シ
  - 第七條 不正品ト心付キ品觸ヲ待タス速ニ訴へ出タル分ハ他日不正タル事相顯レシ節共全價ヲ證議ノ上へ下ケ與フ可シ
  - 品觸アリテ速ニ訴出不正品ノ事蹟相顯レタル時ハ時宜ニヨリ原價十分ノ三分ヲ與フ可シ  
但シ全價ヲ下ケ與フルハ盜マシ主ヨリ十分ノ四分ヲ出サシメ官ヨリ贖金ノ内ヲ以テ六分ヲ給ス三分ヲ與フルハ盜マシ主一分ヲ出シ官ヨリ二分ヲ給ス可シ
  - 第八條 居商ハ店頭ニ看板ヲ掲ケ置ク可シ行商ハ腰ニ鑑札ヲ帶フ可シ
  - 第九條 品觸ノ節品觸寫シ帳ニ記載シ似寄リノ物アラハ速ニ其區番人詰所ニ訴へ出ツ可シ
  - 第十條 無鑑札ノ者及ヒ身元儘ナラサル者ヨリ街衢途上郊路等ニテ物品ヲ買取儀相成ラス

七年十一月二十七日  
日本政官達ヲ以テ  
改正

同上

明治六年七月 太政官 (番外並無號)

七八九

七年十一月二十七日  
日本太政官達ヲ以テ  
改正  
十六年五月五日  
八日靖國神社太  
ノ節打揚花火奉  
ヲ許ス  
八年第百三十五號  
布告ニ依リ消滅

第十一條 紙屑屋買子雇丁ハ紙屑ノ外買取ル可カラヌ  
○七月四日(達)

陸軍省

招魂社大祭之節執行候打揚ケ煙火自今被廢止候事  
但空中破裂不致仕掛ケ花火之類ハ不苦候條與行之節々東京府及警保寮へ可相達事

○七月七日(達)

文部省

全國貢租海關稅及歲出入其他國債等總テ計算ニ關シ候類臆慮謬算ヲ以テ致上梓傳播候テハ自然人  
民ノ疑惑ヲ生シ不可然右ハ政府ニ於テ精確取調年々政表ヲ製シ一般發行致シ候旨ニ付向後ハ書類  
上木願出候節前文計算ニ係リ候分ハ檢査ノ上除去候様指令可致此段相達候事  
但發行ノ政表ヲ抄出シテ上梓ノ分ハ不苦候事

○七月七日(達)

京都府

比叡山山城近江兩國ニ亘ル境界ノ儀ハ山脈連續自然ノ分界ニ據リ北ハ八瀬道釋迦多寶ヨリ中央相  
輪檜南ハ四明嶽ノ東大比叡ヲ中斷シ檜木島山中村重子石迄ノ場所東ハ近江國西ハ山城國ト被定候  
條此旨相達候事

但國界新定ニ付テハ延曆寺坊舍府縣分管相成不都合候條從前ノ通滋賀縣管轄被 仰付候間此段  
可相心得且分界榜示等ノ儀ハ同縣打合ノ上適宜ヲ以取計可申事

○七月七日(達)

滋賀縣

前同文

但國界新定ニ付テハ標石取設ノ儀伺出候處右ハ廢壞移動ノ患有之往々紛紜ヲ可釀ニ付記載ヲ以  
後世へ相傳可申尤一時人民熟知ノ爲榜示等相建候儀ハ適宜取計可致且延曆寺坊舍府縣分管相成  
不都合候條從前ノ通總テ其縣管轄被 仰付候間諸事京都府へ打合ノ上取計可申事

○七月九日(達)

司法省

於各地裁判所罪人一時留置中之入費有無宿之別ナク官費相立候趣ニ有之候處右ハ從前各地方仕來  
之通相心得地方官へ打合不都合無之様可取計此旨相達候事

○七月九日(達)

水澤縣

本年第二百十三號布告各府縣へ諸布告到達日限表中其縣七十四里三十三丁五十九間ト記載有之ハ百  
十四里十七丁二十五間ノ誤リニ候條此旨可相心得事  
但到着日限ハ差違無之事

○七月十四日(達)

諸省

本年六月第二百十三號布告到達日限ノ儀開拓使管轄北海道ハ其管内地理ノ不辨ヨリシテ書信往來  
若干ノ時日ヲ費シ就中氷海中ニハ秋末ノ書信翌春尾ヲテハ不相達儀モ有之豫メ日限難定ニ付向  
後同使ニ限リ其管内各所到達揭示ノ初日ヲ取纏可届出段許可相成候條此旨可相心得事

○無號 (七月十五日)

本年六月第二百二十二號布告改定官位記書式中轉免等記入辛未十二月云々ト掲載セルハ轉免等記  
入其他總テ壬申二月改定官位記式云々ノ誤ニ候條此旨更ニ相達候也  
○七月二十二日(達)

院省使府縣

院省使府縣之官員奏任官以上ハ本年八月一日ヨリ十五日以内判任以下同五日以内之休暇ヲ賜リ候  
條御用向差支無之様便宜見計休暇可申付事

一長官之儀ハ次官ト可申合事

一休暇中旅行致候儀ハ勝手次第第二候得共行ク先々其筋へ相届可申事  
但東京在官之分ハ八月一日ヨリ同三十一日迄地方ハ九月三十日迄之内ヲ以本文ノ如ク休暇賜

明治六年七月 太政官 (番外並無號)

第二百四十一號  
第七年太政官第百  
二十三號達ニ依リ  
消滅

九年太政官第二十  
四號達ニ依リ消滅

同上

第二百三十二號達  
看



十一年文部省第四號布達ニ依リ消滅

八月三十一日達奉

同上

候儀ト可心得事

○七月二十二日(達)

學校教則中所載尊稱ノ二字美稱ト改メ可申此旨相達候事

文部省

○無號 (七月二十三日)

各廳トモ出頭退出時限去六月相達置候處來八月二日ヨリ同月三十一日迄午前第八時出頭正午十二時退出ト被定候條此旨相達候事

院省

但事務ノ都合ニヨリ時限ヲ伸ヘ候儀ハ適宜タルヘキ事

○無號 (七月二十三日)(史官)

使府縣

別紙之通左院諸省ヘ御達相成候ニ付爲心得此旨相達候也(別紙ハ上ノ院省ヘ達メ同シ)

○七月二十四日(達)

皇城炎燬跡御門其外共式部寮紙印鑑ヲ以致通行候處明廿五日ヨリ御門並政府管轄之場所ハ普通御門鑑宮内省管轄之向者同省印鑑ヲ以令通行候條此旨爲心得相達候也

○七月二十四日(達)

陸軍省

皇城炎燬跡御門其外共式部寮紙印鑑ヲ以致通行候處明廿五日ヨリ御門並政府管轄之場所ハ普通御門鑑宮内省管轄之向者同省印鑑ヲ以令通行候條此旨守衛兵ヘ可相達候也

○無號 (七月二十八日)

日本抗法第一章天然本資ハ本質ノ誤リニ候條此旨更ニ布告候事

○七月二十八日(達)

大藏省

皇城炎上跡燒毀御物ハ宮内省ヘ可引渡旨相達置候處普宮殿銅鐵ノ類ニ於テモ同省區域内ノ分ハ悉

皆可引渡候此旨更ニ相達候事

○七月二十八日(達)

司法省

其省判事檢事等他ニ類名無之官ニ付自今宣旨面ニ司法ノ字ハ記載不致候條此旨爲心得相達候事

○七月三十日(達)

大藏省

今般特命全權大使及隨行官員荷物來着取扱方何本月十七日ノ指令ハ取消相成自今特命全權大使及隨行官員其他各國派出交際上ニ關係候諸官員ノ向ハ特別ノ御僉議ヲ以無稅通關被差許候條此旨相達候事

○七月三十一日(達)

大藏省

今般皇族家祿并賜米扶助米等ヲ廢シ更ニ賄料ヲ賜リ其他改正ノ儀別紙達書ノ通り相心得宮内省定額當七月ヨリ一ケ年二千七十六石相減賄料金六万四千圓差加可相渡此旨相達候事(別紙略ス)

○八月三日(達)

東 京 府

大 阪 府

府廳創立修繕費等從前悉皆官給候處向後各縣同様創立ハ三分ノ一ヲ官給シ殘三分ニ並修繕費ハ民費ヲ以テ可取計此旨相達候事

但民費賦課ノ方法取調早々大藏省ヘ可伺出事(同日同儀ニ付大藏省ヘ御達アリ略ス)

○八月四日(達)

東 京 府

從前 行幸ノ節々御道筋一時ノ修繕取計來候處道路掃除等ノ儀ニ付テハ兼テ相達候次第モ有之破損ノ場所ハ順次修繕相加汚穢ノ物等取除候儀ハ平常注意可致儀ニ付向後通御ノ節差掛一時ノ修繕

八月十五日達奉

十一年太政官第十六號布達ニ依リ消滅

十年第四號布告ヲ以テ教部省ヲ廢シテ事務ヲ內務省ニ付ス

七年一月二十二日太政官達ヲ以テ廢止

七年六月十九日陸地ヲ青山築井谷中村ニ設ケ

九年第百十三號布告ニ依リ消滅

八年太政官第百五十六號達ヲ以テ印刷局ヲ大藏省ニ屬ス

等ハ差止候條此旨相達候事  
○八月七日(達) 大藏省  
社寺境内伐木ノ儀本年七月第二百三十五號布告候處伊勢神宮宮域伐木ノ儀ハ教部省ヘ伺テ經其段縣廳ヘモ相届候上可取計段相達候條此旨可相心得事

○八月八日(達) 大藏省  
今般府縣判任官以下月給改定ニ付兼テ上申ノ通其省判任官以下府縣同様改定可致此旨相達候事

○八月八日(達) 東京府  
府下寺院境内一般墓地ニ相定候儀伺出ノ上許可候處右ハ取消シ向後從前ノ墓地ト雖モ朱引内ハ埋葬禁止候積ヲ以テ別段朱引外ニ於テ相當ノ墓地相撰大藏省ヘ可申出此旨相達候事

○番外 (八月十日)(正院) 諸省使府縣ヘ  
本年第二百八十八號布告海軍武官官等表中下士之上十等ト十一等之間横線ヲ脱シ候ニ付別表中朱線書入之通各自書入可致此旨相達候也

○八月十四日(達) 大藏省  
印書局職工給與法則別紙之通改定候條此旨相達候事 (別紙)

職工見習手當略則

植字見習工	上等七圓	中等五圓
	下等四圓	少年ノ者
刷工見習工	上等六圓	中等四圓
	下等三圓	少年ノ者
製木見習工	上等七圓	中等五圓
	下等二圓半	少年ノ者
運輸手濕紙手ハ從前ノ通		

工銀給與略法

一 植工見習	每月手當	金五圓
一 刷工同	同	金四圓
一 運輸手	同	金五圓
一 濕紙子	同	金四圓
一 製木工見習	同	大人金五圓
一 同	同	少年金二圓半
以上見習ノ類		
一 植工ハ見習ノ外ハ全ク工業ノ高ニ應テ賃銀ヲ給ス		
但植立タル片面ノ枚數ヲ算シテ其價ヲ定ム		
一 刷工ハ見習ノ外ハ日給金ヲ與フ五十錢ヨリ壹圓ニ至ル迄工手ノ巧拙ニ由テ差アリ		
但輪旋器械ヲ用ユル者此法ニ據ル		
一 手用器械ヲ用ユキ刷工ハ工業ノ高ニ據テ賃銀ヲ給ス刷印セル紙數ノ多寡ニ從テ其價ヲ定		
一日給ヲ與フル者ハ一日ノ業朝七時ヨリ午後六時ニ至ル迄十時間ノ線作ナリ此時間ノ外ハ別ニ夜		
作ノ賃銀ヲ給ス午後六時ヨリ十二時迄ハ日給ノ半ヲ與ヘ十二時ヲ過クレハ全ク之ヲ與フ		
○八月十五日(達) 大藏省		
特命全權大使其他隨行及各國派出交際上ニ關係ノ諸官員荷物ノ儀無稅通關センノ候條去月二十日		
相達候處右者無改ニテ通關差許候條此旨相達候事		
○八月十七日(達) 海軍省		
其省武官大佐以下少尉以上ヨリ上請スル願書類ハ自今長官ニ宛テ長官ヨリ添書ヲ以テ可差出		

十二月二十五日達  
ニ依リ消滅

同上

同上

八月二十七日達ニ  
依リ消滅

同上

七年一月二十二日  
太政官達ニ依リ消滅

事 (陸軍省ハ何指令ヲ以テ之ヲ定ム)

○八月十八日(達)

院 省 使

陸海軍生徒ヲ除クノ外各省使差遣ノ留學生徒ハ自今都テ文部省ニ於テ管理處分セシメ候條卒業歸朝ノ後同省ニテ試験ヲ遂ケ候上ハ其差遣ノ該省ニ於テ便宜撰權可致候此旨相達候事

但留學中學費等ノ儀ハ其生徒差遣ノ省ヨリ文部省ヘ可送致事

○八月十八日(達)

各 通 陸 軍 省  
海 軍 省

別紙ノ通各省使ヘ相達候ニ付テハ其省差遣生徒ノ儀ハ自ラ別種ニ候得共文部省管理ノ生徒處分ニ準據シ格別矛盾ノ儀無之様取調可伺出候事 (別紙ハ上ノ院省使ヘ達ニ同シ)

○八月十八日(達)

外 務 省

留學生處分ノ儀別紙ノ通各省使ヘ相達候ニ付テハ此旨各國在留公使領事等ヘ可相達候事 (別紙ハ上ニ同)

○番外 (八月十八日)(正院)

左 院 各 省

太政大臣賜暇中議政行政ノ事務參議ヘ代理被

仰付候條此旨爲心得相達候事

○番外 (八月十九日)(正院)

諸 省 使 府 縣

太政大臣賜暇中議政行政ノ事務參議ヘ代理被

仰付候ニ付テハ上申ノ公文ハ本月中參議ヲ宛可差

出此旨相達候事

○八月二十二日(達)

大 藏 省

先般其省判任官以下月給改定候ニ付テハ宣旨ノ外別紙書式ノ通副辭令可相渡此旨相達候事

(別紙)

(印章ハ朱)

官苗字名
上等月給下賜候事
中等月給下賜候事
下等月給下賜候事
明治 年 月 日
大藏省

○八月二十三日(達)

各 通

本年第三十六號布告年齢計算ノ儀ニ付伺出ノ節指令ニ及置候處今般詮議ノ次第有之去于申年十二月二日並出生ノ月且本年月ノ端日數トモ各一ヶ月ト相立舊曆中閏月ハ其本月ニ併セ一ヶ月ト相立候條此旨更ニ相達候事

各 省 使 府 縣

○番外 (八月二十七日)(正院)

仰付置候處本日ヨリ出仕相成候條上申之諸公文等

都テ從前之通可相心得此旨相達候事

各 省 使

○八月二十八日(達)

各省使ヨリ布達ノ類總テ本年第二百五十四號布告ニ照準シ結文三等ニ區別相立可申候此旨相達候事

但布告ノ字布達ニ換ヘ可申事

明治六年八月 太政官 (番外並無號)

七年太政官第四十  
八號達十四年同第  
百一號達十九年勅  
令第一號ニ依リ消滅

九年第五十三號布告ヲ以テ新川縣股

十一月十四日達

同上

十二月二十五日達  
ニ依リ消滅

○八月二十八日(達)

陸軍省  
特命全權大使岩倉具視近々歸朝可相成ニ付橫濱港へ着艦ノ節同港砲墩ニ於テ祝砲式執行可致此旨相達候事(同日海軍省へ同港砲墩ニ於テ祝砲式執行ノ連絡ス)

○八月二十八日(達)

新川縣  
其縣廳越中國新川郡富山へ被移候事

○番外 (八月三十一日)(正院)

院省へ使府縣へ  
各廳トモ來九月中旬第八時出頭正午第十二時退出ト被定候條此旨相達候事  
但事務之都合ニヨリ時限ヲ伸へ候儀ハ適宜タルヘキ事

○八月三十一日(達)

陸軍省  
來九月中出頭退出之時限別紙之通被仰出候處於其省ハ昨三十日及指令候儀モ有之候ニ付來月七日ヨリ各廳同様可相心得此旨相達候事(別紙ハ上ノ院省へ達ニ同シ)

○九月二日(達)

陸軍省  
文部省管理海外留學生ノ内兵科修行ノ者追々歸朝候ニ付テハ學業試驗身分進退ノ儀其省所轄ニ被定候條同省へ協議夫々可取計此旨相達候事

○九月五日(達)

大藏省  
相模國足柄上郡仙石原村ノ内字大地獄ヲ大涌谷同國足柄下郡底倉村ノ内字小地獄ヲ小涌谷ト改稱被仰出候間此旨爲心得相達候事

○九月五日(達)

陸軍省  
來八日午前第八時伊太里國王族御同車ニテ陸軍練兵 天覽被 仰出候條此旨相達候事

七年二月二十日

但巨細ノ儀ハ外務省へ可打合事(同日外務省へ心得達アリ略ス)

○九月五日(達)

陸軍省  
和蘭亞珍兩國戰爭ニ付軍醫監林紀儀和蘭國隊伍中へ編入ノ儀去ル七月中伺出ノ趣聞屆候條此旨相達候事

但和蘭辦理公使ヨリノ書翰寫爲心得相達候事(書翰寫略ス)

○九月九日(迴達)(式部寮)

諸省  
伊太利國プリンス本日午前第七時當地出發歸港相成候尤微行之姿ニ付諸式ハ被略之候條此段爲御心得申進候也

○番外 (九月十五日)(布)(史官)

院省使府縣  
來ル十七日神宮神嘗祭ニ付正院左院諸省使府縣在京之官員賢所へ參拜可被仰付處當年ハ御場所狹少ニ候間其儀不被爲行候條此段爲御心得申入候也

○九月十五日(達)

陸軍省  
内外皇族大臣公使等各港着發之砌其都度相達候處自今外務省其外ヨリノ報告ヲ以祝砲式執行可致此旨相達候事

○九月十八日(達)

宮内省  
御記録燒失ニ付維新以來御達願伺等ノ書類早々謄寫無遺漏差出候條此旨皇族へ可相達事

○九月十八日(達)

東京府  
各通 京都府  
奈良縣  
御記録燒失ニ付維新以來御達願伺等ノ書類早々謄寫無遺漏差出候條此旨華族へ布告スヘキ事

明治六年九月 太政官 (番外並無號)

○九月十九日(達)

諸 省

諸省收入金海軍省主船艇修費代及器械費拂代文部其他不用物品賣拂代等從前各省限り出納取計費用差引殘金上納或ハ勘定元ニ組込等區々ノ處分ニ係リ不都合候條右等ノ類ハ當九月ヨリ毎月勘定帳ヲ副翌月十日マテ大藏省ヘ可相納八月以前ノ分ハ別段勘定帳取調殘金納付可致此旨相達候事

○九月二十二日(達)

陸 軍 省

故皇子來ル二十五日正午第十二時第九大區二小區小石川豐島岡へ御葬送相成候條爲儀仗隊近衛兵之内三兵可差出此旨相達候事

但委細之儀ハ宮内省式部寮等へ可打合事

○九月二十二日(達)

司 法 省

京都府知參事裁判一件ニ付陪審被相設候條此旨相達候事

○九月二十二日(達)

東 京 府

其府第九大區二小區豐島郡小石川大塚坂下町元護國寺境内ノ山林權現山ト唱へ來候地所自今豐島岡ト名ケラレ候此旨相達候事

○九月二十四日(回達)(式部寮)

諸 省

明二十五日故皇子御葬送ニ付勅任官之面々午前第十時迄ニ大禮服著用永田町宮殿へ參入拜禮可有之此段申入候也

○九月二十八日(達)

教 部 省

淳仁天皇還幸ノ式並祭典 後鳥羽院天皇始二帝同様被爲行京都白峰宮へ御合祀被 仰出候條此旨相達候事

○十月三日(達)

陸 軍 省

故特命全權公使澤宣嘉葬式之節儀仗隊トシテ步兵一大隊可差出此旨相達候事

○十月三日(達)

文 部 省

米國政府ニ於テ來明治七年十二月金星試驗ノ爲メ天文官橫濱長崎ニモ派遣候條就テハ其省同國留學生徒並ニ海軍省官員或ハ生徒ノ内彼天文官ト同シク試驗イタシ度志願ノ者其學術ニ因リ兩三名以下試驗可被差許候條海軍省ト協議シ夫々可取計此旨相達候事

但先般相達候通リ外務省へ指令ノ次第モ有之候ニ付同省へモ可協議事

○十月三日(達)

各 通  
京 都 府  
名 東 縣

淳仁天皇還幸ノ式被爲行京都白峰宮へ合祀被 仰出候條此旨相達候事(京都府へハ京都ノ二字ナシ)

但式部寮官員へ諸事打合可取計事

○十月五日(達)

文 部 省

來明治七年大陽曆之體裁本年同様下層ニ大陰曆月日及其外掲載可致此旨相達候事

○十月八日(達)

陸 軍 省

淳仁天皇始 四帝御還遷被 仰出候ニ付テハ御道中護衛兵トシテ半小隊御輿座殿儀御列之節一小隊供奉被 仰付候條此旨相達候事

但諸事式部寮へ可打合事

○十月八日(達)

大 藏 省

開拓使及開港場無之諸縣經費勘定向改正ニ付其省申立之趣モ有之候得共本年ノ儀ハ最早餘月少ナ

七年十月十三日太  
政官通八年二月十  
五日同達ヲ以テ更  
定

ク改正ノ達遠隔之地へ到着候迄ニハ既ニ勘定帳下調取懸リ候向ハ半途調替候様ノ儀モ可有之依テ  
明治七年ヨリ改正ノ旨別紙ノ通相達候條此旨相心得調査濟ノ上ハ證書相渡スヘク且各廳經費於其  
省検査ノ上可差出計表之儀離形早々取調可差出此旨相達候事(別紙ハ次下ニ見ユ)

但本年ノ分モ調査濟ノ上毎縣ノ經費ヲ明了區分調整差出候儀ト可相心得事

開拓使

○十月八日(達)  
經費勘定向來ル明治七年ヨリ一歳ヲ三ヶ月宛一月ヨリ三月迄四月ヨリ六月迄七月ヨリ九月迄十月ヨリ十二月迄ニ區分シ勘定帳  
一册調整翌月廿日迄ニ無遅延其地差立大藏省へ差出可申候尤於同省調査濟證書相渡候條爲後證其  
廳へ備置可申此旨相達候事

但本年一月ヨリ十二月迄之分ハ一東ニ勘定相立都テ從前ノ離形ニ準據調整七年二月十日迄ニ其  
地差立大藏省へ可差出萬一遠隔支廳ノ分本文期限迄本廳へ取經方出來兼候節ハ順次後回ノ勘定  
へ組込可申尤十月ヨリ十二月迄ノ分翌年ニ組込候テハ不都合ニ付別册ニ取調可差出且改正勘定  
帳離形之儀ハ追テ可相達事

○十月八日(達)

開港場無之諸縣

經費勘定向來ル明治七年ヨリ一歳ヲ三ヶ月宛一月ヨリ三月迄四月ヨリ六月迄七月ヨリ九月迄十月ヨリ十二月迄ニ區分シ勘定帳一  
册調整翌月廿日迄ニ無遅延其地差立大藏省へ差出可申候尤於同省調査濟證書相渡候條爲後證其廳  
へ備置可申此旨相達候事

但本年一月ヨリ十二月迄ノ分ハ一東ニ勘定相立都テ從前ノ離形ニ準據調整七年二月十日迄ニ縣  
地差立大藏省へ可差出是迄無謂延期候向モ有之候處向後ハ決テ不相成候條此旨兼テ可相心得尤  
改正勘定帳離形ノ儀追テ可相達事

○十月八日(逕達)(式部省)

諸省等へ

十二月二十九日達  
ヲ以テ參座ヲ解ク

明九日開成學校開業臨幸ニ付長官伺候トシテ午前第七時三十分無遅々小禮服着用同校へ御光着可  
有之候也

○十月九日(達)

司法省

先般京都府知參事裁判一件ニ付陪審被設候段相達置候處御詮議之次第有之參座ト改メ別紙之通規  
則相定メ候條此旨相達候事(別紙ハ次ニ見ユ)

○十月九日(達)

司法省

京都府知參事臨時裁判所ニ於テ糾問之儀ハ陪審規則等被定候迄可相見合相達置候處今般參坐被設  
別紙之通規則相達候付テハ來十二月ヨリ糾問可取掛此旨相達候也

(別紙)

參坐規則

- 一臨時裁判所ニ於テ裁判ノ公正ヲ證スルカ爲參座ヲ設ク其規則左ノ如シ
- 一參座ハ其時ニ臨内閣ニ於テ議定シ諸官員ノ中ヲ以テ之ヲ命スヘシ
- 一參座ハ九人ト定ム若シ已ヲ得サル公事アル時ハ關席ヲ許スト雖モ六人出席セサレハ裁判ヲ行フ  
コヲ得ス
- 一罪ノ輕重ヲ決スルハ判事ノ任ト雖モ罪アルト否トヲ定ルハ參座ノ權トス
- 一拷問ヲ用ル時ハ參坐ノ承諾ヲ得テ然ル後チ行フコヲ得ル
- 一拘留ヲ爲サントスル參座ノ承諾ヲ得テ然ル後行フヲ得ヘシ(十月十日日本項增加)

○十月十日(達)

各通

東府京 大阪府 神奈川縣  
長崎縣 兵庫縣 新潟縣

十二月二十日達ヲ  
以テ一項增加

七年太政官第六十  
九號達ニ依リ消滅

明治六年十月 太政官 (番外並無號)

本年八月第二百八十七號布告府縣判任官以下月給改定候ニ付テハ其府縣官月給モ同様改定可致此旨相達候事(同日大藏省へ心得達アリ略ス)

十一月十四日達

左院諸省等へ

○十月十二日(迴達)(正院) 内閣御用之都合有之候ニ付三職へ面謁之儀ハ自今午後一時ヨリ同三時迄ト相定候條此段爲心得相達候也

九年第七十五號布告ニ依リ消滅

府 縣

○番外 (十月十三日) 本年八月第三十一號布告中正誤

本家分家云々結婚セシ緣故ヲ以テトハ結婚スルノ故ヲ以テノ誤ニ候條此旨華士族へ布告スヘキ事

十三年第三十六號布告ニ依リ消滅

○番外 (十月十三日) 本年七月第二百五十六號布告正誤

違式註違條例第三十四條中神物ハ神佛ノ誤ニ候條此旨布告候事

任參議

大藏卿大久保利通

任參議

外務卿副島 種臣

外務省事務總裁被 仰付候事

參 議副島 種臣

右爲心得相達候事

○十月十三日(達)

工 部 省

御災燒以來 皇城へノ電信線廢絶候ニ付太政官代へ架線可致此旨相達候事

○十月十四日(達)

東 京 府

十一月二十九日達  
ヲ以テ内務卿ニ  
任ス  
十月二十七日達  
以テ免ス  
同 上

十年八月十三日太  
政官ヲ赤坂御皇居  
内ニ移ス  
七年一月九日太政  
官達ヲ以テ内務省  
ニ移ス

其府下舊藩並舊旗下之邸地等拂下ノ儀昨春地券發行ノ際處分委任致置候概于地券渡方モ相濟候趣就テハ自今地所拂下之儀ハ外府縣同様大藏省へ伺出可取計此旨相達候事

但當今官有ノ地箇所坪數詳細取調大藏省へ可申出事

○十月十五日(達)

大 藏 省

今般留學生規則改正之處學國留學北白川宮ニ於テハ特別ノ思召ヲ以テ被 仰付候儀ニ付歸朝ニ不  
及段文部省へ相達候就テハ壬申年十月相達置候通學費ハ宮内省定額金外ニ同省へ可相渡此旨相達  
候事

○十月十五日(達)

文 部 省

北白川宮學國留學之儀ハ特別ノ思召ヲ以テ被 仰付候儀ニ付歸朝ニ不及候條此旨相達候事

但學費ノ儀ハ宮内省ヨリ彼國在留公使へ送輸スヘキ事

○十月十五日(達)

埼 玉 縣

今般第三百四十號布告候ニ付テハ本年六月年齡計算之儀其縣同第二條指令ノ趣モ取消候條此旨相  
達候事

(參照) ○六月十八日埼玉縣ヨリ正院へ伺

第二條

一 幼少ノ節父母親戚等ニ離レ出生年月不相分者ハ本年第三百三十八號葉兒養育米ノ儀ニ付テノ御布告ニ照準シ一月一日  
ノ出生ト視做シ可然哉右御伺申候至急御指令被下度候也

(指令) 六月二十九日

第二條何之通

○十月十七日(迴達)(式部寮)

諸 省 等 へ

來十一月三日天長節ニ付諸省判任官以下各其廳ニ於テ宴會下賜候條代料宮内省へ可被申出候此段

明治六年十月 太政官 (番外並無號)

八〇五

同 上

十年七月三日歸朝

申入候也

追テ華族判任官ハ東京府廳ニ於テ酒饌下賜候間此段爲御心得申添候也

○番外 (十月十八日) (布) (正院)

院 省 使

諸布告布達等頒布之儀ニ付各府縣へ別紙第三百四十八號之通相達候條此旨相心得渡方可取計候也

諸 省

○十月十八日(迴達)(式部寮)  
來十一月三日天長節宴會被爲行候條在京之勅任官午前九時三十分大禮服着用 皇居へ參上可有之  
此段申入候也

諸 省

○十月十八日(迴達)(式部寮)  
來十一月三日天長節ニ付宴會例年之通可被爲行之處 皇居御狹少ニ候間諸省使府縣在京之委任官  
午前第九時ヨリ十一時迄ニ宮内省へ拜賀申上酒饌ハ各其廳ニ於テ下賜候條代料宮内省へ可被申出  
此段申入候也

諸 省

○十月十八日(迴達)(式部寮)  
來十一月三日天長節ニ付宴會被爲行候條諸省勅任官以下他所出張之向者酒饌代料ニテ賜候條大藏  
省ヨリ可被請取此段申入候也

諸省使府縣

○番外 (十月二十日) (布)

院 省 使 教部省

太政大臣所勞中右大臣代理候條此旨相達候事  
○十月二十二日(達)  
各廳雇入外國人滿期雇繼或ハ代員雇入之節最前ノ條約面ニ抵觸ノ廉無之分ハ自今伺出ルニ不及該  
廳限條約取結其時々人名期限互細可届出此旨相達候事  
但増給ノ儀ハ本年七月第二百六十五號布告之通可相心得事

司 法 省

○十月二十二日(達)  
諸布告達書等頒布ノ儀ニ付本年第三百四十八號ヲ以テ府縣へ相達候ニ付テハ其省人相書布達ノ儀  
モ同様相心得頒布可致此旨相達候事

諸省使府縣局同

○番外 (十月二十七日)

陸軍大將兼參議西鄉 隆盛  
陸軍大將西鄉 隆盛

依願免本官  
依願近衛都督被 免候事

參議正四位大隈 重信

兼任大藏卿  
兼任司法卿

參議正四位大木 喬任

兼任司法卿  
兼任工部卿

工部大輔從四位伊藤 博文

兼任工部卿  
兼任海軍卿

海軍大輔從四位勝 安芳

依願免本官

參議副島 種臣

依願外務省事務總裁被免候事

同 後藤象二郎

依願左院事務總裁被免候事

同 板垣 退助

右之通 宣下相成候間此旨相達候事

同 江藤 新平

○番外 (十月二十八日)

正四位副島 種臣  
正四位後藤象二郎

任參議兼外務卿

特命全權公使正四位寺島宗則

八年太政官第百六十四號達ニ依リ消滅

十二月二十四日達ニ依リ消滅

八年太政官第百六十七號達ニ依リ消滅

八年太政官第百六十四號達ニ依リ消滅

十年行在所達第四號達ヲ以テ官位被

十三日二月二十八日免兼官十四年十月十二日依願免本官

十三日二月二十八日兼任議長

兼官ヲ免ス十八年太政官第百六十九號達ヲ以テ參議廢止

八年四月二十五日任兼官

十二年九月十日兼任文部卿



十一年十月五日宮内省番外達ヲ以テ改定

右之通 宣下相候成間此旨相達候事  
○十一月二日(達)

各通 京都府 大阪府  
奈良縣 堺縣  
名東縣

諸御陵修營後構柵ノミニテ制札無之或ハ有之モ文面不體裁ニ付今般改メテ別紙雛形之通制札揭示致ヘク此旨相達候事  
(別紙)

何天皇御陵

東西何間 南北何間

定

一 猥ニ立入事並土居へ登ル事

一 魚鳥ヲ捕ル事

一 竹木ヲ伐ル事

右令禁止者也

年號 月

英文ニテ同斷

佛文ニテ同斷

右堅可相守者也

太政官

某縣府

八年二月二日教部會番外達參看十年內務省丙第八號達ヲ以テ釋文削除

八年內務省乙第百六十七號達十四年太政官第八十一號達ニ依リ消滅

○十一月五日

東京府

東京醫學校ニ於テ解剖學研究候ニ付其府因獄懲役場養育院等無籍人ノ病屍及有籍ニテモ解剖願出候ハ、同校へ可差廻此旨相達候事

(參照)○十一月九日東京府ヨリ司法省へ通達

當府因獄懲役場無籍人之病屍等東京醫學校へ差廻方別紙寫之通御達有之候付テハ向後已決未決ニ不限無籍者病屍ハ醫學校へ却テ相廻其段掛リ裁判所へ相届候様可致候間爲御承知申入候也(別紙ハ十一月五日右大臣達ニ同シ)

尙以有籍者病屍之儀ハ親族等ヨリ解剖願出候ハ、御達之通相廻候心得ニ有之候此段モ申添候也

○十一月十二日(達)

外務省

米國飛脚船ヲルコニヤ神戸港ヨリ鹿兒島縣迄同縣雇入廻船之儀大藏省伺出テ御許可相成候條免狀可相渡此旨相達候事

但兵庫縣鹿兒島縣へモ可相達事

○十一月十三日(達)

司法省

去明治五年壬申九月各地方裁判所被設候ニ付各地ニ於テ相當之官廳可相渡就テハ其省官員出張之節地方官打會取調候儀地方官へモ相達置候處當今地券改正ニ際シ地租ニ關係差支之廉不尠候條以來出張官員地方官ト協議相應之場所ト見込候ハ、建物ハ勿論地所反別等詳細取調繪圖面ヲ副シ伺出候様可致此旨更ニ相達候事

但地方官ニ於テモ本文之趣相心得大藏省へ可申出様相達候事

○番外 (十一月十四日)(達)(正院)

本月十七日ヨリ院省午前第九時參仕午後第四時退出ト被相定尤御用都合ニ依リ退出之時限遲速可

七年太政官第百七十三號達ニ依リ消滅

九年十月九日太政官達ニ依リ消滅

明治六年十一月 太政官 (番外並無號)

八〇九

有之此旨相達候事

但該省之卿ヲ兼任之參議ハ午後第一時ヨリ該省へ參仕候ニ付正院へ諸公文上申ハ午前第九時ヨリ正午第十二時迄諸官員之面謁ハ第十二時ヨリ午後第一時迄之事

〇十一月十五日(達)

陸軍省

故皇女來ル十九日午前第十一時第九大區二小區小石川豐島岡へ御葬送御治定候條爲儀仗隊近衛兵可差出此旨相達候事

但委細ノ儀ハ宮内省及式部寮へ可打合候事

〇十一月十七日(達)

各通 陸軍省 海軍省

自今奏任武官ノ輩待罪狀差出候節軍律ニ處斷スヘキモノハ共省ニ於テ直ニ刑名ヲ擬定シ本狀ヲ併セ上請可致此旨相達候事

但勅任武官ノ儀ハ是迄ノ通ナルヘキ事

〇十一月十七日 (式部頭)

省使宛

來ル十九日稚高依姬尊御葬送ニ付勅任官面々午前九時ヨリ十時迄大禮服着用永田町宮御殿並參入拜禮可有之候也

〇番外 (十一月十八日(布))

院省使

於院省使現今官費ヲ以履置候外國人有之向ハ別紙雛形之通取調本月中可差出此旨相達候事但日備ノ分ハ不及差出候事

(別紙)

某 院省使 府縣 某 院省使 府縣 表 人 國 外 履

人	名	學	職	科	本	國	給	料	入	年	滿	期	滿	期	異	常	事	件	
																			何月何日
某	甲	曹	記	等	英														
某	乙	某	科	佛					一ヶ月	何月何日	年月日	年月日	年月日	年月日					最新給料何年月日ヨリ増給
																			月日 病死

〇十一月二十日(回達)(忠告)

諸省等

昨十九日御發令第三百八十八號布告御詮議之次第有之候間全部取摺早々御返却可有之候也

明治六年十一月 大政官 (番外並無職)

八一〇

十六年第二十四號  
十七年第八號布告  
ニ依リ消滅

○十一月二十二日(週達)(式部寮)

諸省等へ

明廿三日新嘗祭ニ付 御拜被爲在候條勅任官之内一人祇候トシテ午後第五時 皇居へ參上可有之衣體之儀ハ御都合モ有之當年之處ハ直垂着用可有之候也

追テ諸官員參拜可被 仰付候處御場所狹少ニ候間當年ハ不及其儀候條此段申添候也

○番外 (十一月二十九日(正院) 院 省

別紙第三百九十二號之通相達候ニ付テハ院省ニ於テモ同様可取計此旨相達候事(別紙略ス)

○番外 (十一月二十九日(正院) 院省使府縣

右之通 宣下相成候條此旨相達候事 參議從三位大久保利通

○十二月三日(達) 兼任內務卿 外務省

各通 陸軍省 海軍省

東京府下神田富山町渡邊一藏外敷名申合開洋社ト唱へ外國鯨獵法ヲ以テ捕鯨營業イタシ度旨願出

候ニ付浦方漁業ノ妨害不相成様陸地距離海程七十里以外ニ於テ鯨獵差許尤右船印トシテ白地ニ赤

ニテ蜻蛉ノ形ヲ畫シ候小旗相用又相圖トシテ紅白ノ吹貫相揚ケ且小銃發候儀トモ差許候條此旨可

相心得事 但小旗繪圖者追テ大藏省ヨリ可相達候事

○番外 (十二月十四日(正院) 三府開港場有之縣

地方廳中諸費仕拂方ノ義ニ付別紙第三百九十九號ノ通各縣へ相達候就而ハ定額金ヲ始臨時諸入費

共是迄ノ通請取方大藏省へ申立都テ租稅ノ内ヲ以手限操替仕拂候義一切令禁止候此旨可相心得

事(別紙略ス)

○十二月四日(達) 大藏省

海軍省所轄橫濱製鐵所其省所轄被仰付候條此旨相達候事但受取方緩急其他ノ都合同省へ可及協議

事

○十二月四日(達) 海軍省

其省所轄橫濱製鐵所大藏省所轄被 仰付候條此旨相達候事

但引渡方緩急其他ノ都合同省へ可及協議事

○十二月九日(達) 宮内省

皇族自今海陸軍ニ從事スヘク被 仰出候條此旨可相達候事

但年長ノ向ハ此限ニアラサル事 琦玉縣

○十二月十日(達) 海軍省

海軍軍醫寮ニ於テ解剖學修業候ニ付自今其縣囚獄懲役場ニテ病死或ハ死刑ノ者親族其外引取人無

之死體ハ同寮へ可引渡此旨相達候事

但引渡都合ハ同寮へ可打合事 司法省

○十二月十日(達) 司法省

其省職制中第四十六條御取消相成候條刪去可致此旨相達候事

○十二月十四日(達) 司法省

其省職務定制中第四十四條左之通改正候條此旨相達候事

第四十四條 凡國家ノ大事ニ關スル事件及司法裁判所ノ覆審諸裁判官ノ犯罪ヲ審理ス

八年司法省達第十 號達ニ依リ消滅

九年八月三十一日 軍醫寮廢止

七年一月九日太政 官達ニヨリ醫寮 下共ニ内務省ニ屬 ス

明治六年十二月 太政官 (番外並無號)

八二三

十二月二十九日達  
ヲ以テ參坐ヲ解ク

○十二月二十日(達)  
參坐規則中左之條增加候條此旨相達候事

司法省

參坐規則增加

一參坐中議論一定ノ難キ時ハ多ニ從テ決ス可シ若議論相半スル時ハ決テ席長ニ取ル

○番外 (十二月二十四日(正院))

太政大臣三條實美本日ヨリ出仕候條此旨相達候事

諸省等へ

○十二月二十四日(回達)(式部寮)  
來ル三十一日大被被爲行候ニ付勅奏判之官員參仕被 仰付之處御場所狹少ニ依リ勅奏之内一員爲  
總代午後第二時禮服用皇居へ參上可有之候也

○十二月二十五日(達)

任内閣顧問

親臨國事御評議ノ節參候被 仰付候事

從二位島津久光  
同 人

○番外 (十二月二十五日(正院))

別紙第四百二十號ノ通相達候ニ付テハ現今御用滞在ノ向前官被免候迄ノ年數ニ應シ本人元奉職ノ  
於官廳規則ノ通賜物可取計此旨相達候事(別紙略ス)

院省使府縣

○十二月二十五日(達)

其省管理海外留學生徒詮議ノ次第有之悉皆歸朝申付候條於其省夫々處分可致此旨相達候事

文部省

但從前各廳ヨリ差遣ノ分歸朝旅費ノ儀ハ該廳ヨリ受取送達可取計就テハ本件當人へ相達シ候上  
六十日以内ニ必出發可致若右期限相後レ候者へハ旅費不賜候條此旨モ兼テ通達可致尤自費ヲ以

七年四月二十七日  
太政官達ヲ以テ任  
左大臣

七年文部省第七號  
達參看

テ滞留願出候者ハ不在此限候事

○十二月二十五日(達)

海外留學生徒詮議ノ次第有之悉皆歸朝申付一般文部省ニ於テ處分可致旨別紙之通相達候條此旨可  
相心得事(別紙ハ前ノ文部省へノ達)

司法省

但歸朝旅費ノ儀ハ文部省へ可送致事

○十二月二十五日(達)

開拓使

先般陸海軍生徒ヲ除ノ外各廳ヨリ差遣ノ海外留學生一般於文部省管理ノ儀相達候處其後續々陳述  
ノ趣モ有之一應無據相聞へ候得共其使差遣ノ生徒而已別途ノ處分難相成候條兼テ相達置候通渾テ  
同省ニ於テ管理ヒシメ猶詮議ノ次第モ有之各廳ヨリ差遣ノ分共一般歸朝可申付旨別紙ノ通同省へ  
相達候條此旨可相心得事

○十二月二十五日(達)

司法省

但歸朝旅費ノ儀ハ文部省へ可送致事

○十二月二十五日(達)

東京府

府下火災消防之儀其省中警保寮へ委任候ニ付右事務東京府ヨリ請取可申此旨相達候事

開拓使

○十二月二十五日(達)  
其使管轄北海道へ招募移住之儀見込通開屆候條屯田演武之法等ハ都テ陸軍省商議之上尙可伺出尤  
右入費大藏省借入未納金ヲ以テ相充候儀ハ難開屆其使申立之通金六拾八萬圓三ヶ年ニ割合別途可  
相渡ニ付大藏省へ協議及フヘク此旨相達候事

但移住授産之儀ハ着手次第時々可申出且軍艦巡航之儀ハ別段海軍省へ相達候事

十五年第八號布告  
ヲ以テ開拓使廢止

七年一月九日太政  
官達ヲ以テ警保寮  
ヲ内務省ニ屬ス

○十二月二十七日(週達)(式部寮)

來一月三日元始祭ニ付午前八時四十分勅任官之内一人大禮服着用 皇居ニ參上可有之候也

○十二月二十七日(週達)(式部寮)

來一月三日元始祭ニ付奏任官以下賢所並神殿ニ參拜可被 仰付之處御場所狹少ニ付不及其儀候條此段及御達候也

○十二月二十八日(達)

諸省等

金穀出納ノ順序並書式勘定帳離形共別冊之通京都大阪二府並諸縣ニ頒布候條於其府テモ右ニ照準來明治七年一月ヨリ施行可致尤勘定ノ儀ハ一ヶ月仕上ニ取計翌月二十日迄ニ大藏省ニ可差出此旨相達候事 (別冊ハ第四百二十七號ニ同)

○十二月二十九日(達)

諸省等

御詮議之次第有之參座被解候條此旨相達候事

第四百二十七號

第二號

大藏省

○第一號 (一月十日)

三府六十九縣

東京大阪紙幣寮ニ上納可相成舊藩々製造之楮幣百兩宛ニ糊封致シ可差出旨相達候處各種混淆ニ封ニ致シ差出候縣モ有之哉ニテ多數ノ検査差支候間各種混淆無之様可取計尤都合ニ寄百兩内外之糊封ハ不苦候事

○第二號 (一月十五日)

三府六十九縣

舊藩々製造之紙幣引換濟之分三河信濃以東ニ屬スル縣々ハ東京紙幣寮越中飛騨以西ニ屬スル縣々ハ大阪出張紙幣寮ニ上納可致旨壬申八月廿九日官備楮幣交換手續書ヲ以テ相達是迄引換收入札損札未發行札貸附上リ札準備札ノ類ハ東京大阪兩所之内便宜之方ニ上納可致旨十一月十二日相達置候條遠隔之地ヨリ右兩所ニ運輸不便ノ向モ有之趣ニ付而ハ自今右之分ハ勿論租稅其他諸上納藩札之分ハ當省ヨリ官員派出請取検査之上地方於テ燒捨相成候間東京大阪ニ上納ニ不及還テ官員派出迄府縣廳ニ預リ置可申尤租稅其他諸上納藩札之分ハ租稅出納兩寮之都合モ有之儀ニ付右藩札ニ限リ知令參事預リ證書ヲ以兩寮納ニ相立可申候條其旨相心得外藩札一同前文官備楮幣交換手續書第四條之趣ヲ以テ札員検査糊封之上右官員派出請取候迄不都合無之様嚴重取締致置可申候且右交換其他之藩札共萬一非常騷擾之際賊徒掠奪候共再度發行不相成様札面上左右之隅裁斷糊封致シ置可申候此段相達候事

○第三號 (一月十八日)

三府六十六縣

諸道陸運會社並相對立所ニ於テ他ノ驛々ヨリ繼通シ候人馬之刻錢ヲ取立或ハ繼通シテ拒ミ候者モ有之趣相聞不條理事ニ候條各地方官ニ於テ夫々取調屹度差止メ可申事

第四百十五號  
第四百十八號ニ依リ

八年内務省甲第七  
號布達ヲ以テ陸運  
會社解社

○第四號 (二月二十日)

三府六十六縣

鎮臺徵兵入費下渡之儀詮議之次第有之這テ可相違旨指令致置候縣々モ有之候處今般取調之筋有之候條右入費關係之向ハ來ル二月限明細仕譯帳取調無延引可差出候事

○第五號 (二月二十四日)

六十三縣 愛知和歌山堺三縣除ク

辛未十月ヨリ壬申九月迄出納勘定帳差出方之儀ニ付壬申當省第五百七十七號ヲ以布達置候處其後延期等申出候縣々モ有之甚差支候條小譯証書等不相揃分ハ跡ヨリ差出不苦候條勘定帳早々取調來ル二月廿八日迄ニ無相違可差出候此段相違候事

○第六號 (二月二十八日)

三府六十六縣

貢米郡中請取渡規則中三ヶ條別紙之通改正候條右ニ照準取計可申此段相違候事

(別紙)

諸國貢米郡中船方受取渡規則

第一條 運賃之儀ハ郵便蒸氣船會社ニ定額之通五度ニ可相渡事

第二條 積所ニ於テ納廻相立縣官受取濟郡中手離相成候後元船ハ積入候人足並解下賃小廻賃ハ官費ニ付各縣積所ニ於テ仕拂置追テ精算ノ上受取方出納寮ハ可申立事

第十三條 納所着船之上御藏迄解下御米取扱人樹廻人足賃水揚諸入用共總テ改濟迄之入費ハ郵便蒸氣會社ヨリ差出可申事

○第七號 (二月三十一日)

三府六十六縣

今般地方緊要之件々合議之上其宜ヲ求メ改正候ニ付別紙記載之件々迅速取調道路遠近之遲速ヲ量リ來ル四月一日ヲ期シ長官次官ノ内一員出京可有之事故有之出京難相成候ハ、奏任出仕ノ内出京可有之此段相違候事

但別紙條件之内當省ヨリ相違既ニ取調差出有之候分並巡回官員於出張先取調相分リ候分於目今相違致候廉無之候ハ此度敢テ取調不及候事

(別紙)

一租稅之事

附リ夫米夫金之事

一物產種類之事

一去ル辛未十月ヨリ壬申九月迄收入總計並廳費若干上納若干未納若干取調之事

一延米口米永差米目溢米之類貢米ニ課シ取立候種類高割付之分或ハ他之方法共一ヶ年收入之總計取調之事

一舊來四公六民六公四民等各種取立候之事

一管内舊貫區々之分等平均ヲ求メ昔日ニ比シ多少之平準ヲ失ヒ候儀無之トモ難申ニ付比較概算取調之事

一地券稅施行方法於實際着手之順序見込之事

一相撲狂言之類諸典行並遊女藝妓稅一ヶ年收入總計取調之事

一舊來水旱損用拾引換地荒地手當米下渡方等區々有之候件々取調之事

一朱印地並寄附等高入並未高入ニ不相成分取調之事

一地所賣買之節原價ニ割合一ヶ年之利益何米ト定メ賣買致シ候哉實際之摸樣取調之事

一於管下是迄相廢候雜稅之種類取調之事

一置米金並第一第二常備金之事

一新縣已來壬申九月迄遺拂ヒ員數總計並同十月ヨリ明治六年十二月迄費用見込之事

大藏省第二百七十  
二號ニ依リ消滅

一 華士族卒給祿並賞典祿其他米金費用之事

一 町用村用並惣々民費ヲ課スル事

一 米金取立高之事

一 割賦取立仕様之事

一 遺拂之廉々取調之事

一 水利堤防道路橋梁繩管用水路之事

附リ神社官舎倉庫牢獄其他一切官ヨリ仕拂之分取調之事

一 從來修築仕法之事

一 右ニ付入費高之事

一 入費高從來官ヨリ取賄來候分或ハ歩通手當又ハ民費ニ課シ取立候仕法並金高等取調之事

一 置縣前ヨリ之勘定ハ辛未九月迄之勘定帳并同十月ヨリ壬申九月迄勘定帳等出京ヨリ内差出無之

一 官私園米金之員數並開産備荒等從來之方法或ハ向後施行之見込有之分取調之事

○第八號 (二月三日)

一 一ヶ年諸費凡積同離形並第二常備金繰替清算帳ノ儀ニ付壬申五月並八月中公布有之猶同年十一月

當省百七十一號布達ノ趣モ有之候處兎角右ニ照準不致夫カ爲推問往復等ニ時日ヲ費シ處分遷延致

シ雙方ノ不便不少候ニ付以後規則ニ不觸機動メテ注意致シ取調可申此段相達置候事

○第九號 (二月四日)

亞墨利加合衆國収税法今般於當省鑲刻相成候ニ付府縣へ一部ツ、頒布致候事(収税法略ス)

但於書肆發賣差許候條此旨可相心得事

第百十一號查看

○第十號 (二月九日)

各地方市街士族卒居住地舊來地方免除ノ分収稅ノ儀壬申年ヨリ上納ノ積既ニ追々取調申立候處間

ニハ其手順相違兼候向モ有之右等モ一般壬申年ヨリ収納不致候テハ不公平ニ候へ共不得止事故等

有之遷延此節ヨリ取調實際着手ノ向前年ニ遡リ收稅候儀ハ難被行情實モ可有之候ニ付右様ノ場所

ハ出格ノ僉議ヲ以壬申年分収入ノ不及沙汰候條本年ヨリ悉皆上納ノ積相心得早々取調可伺出事

○第十一號 (二月十日)

神官月給渡方ノ儀ハ是迄第二常備金ノ内ヲ以操替置退テ請取方申出候向モ有之區々相成居候ニ付

向後置米金ノ内へ組込伺出右ヲ以渡方取計可申候事

但官費支給無之神官ハ此例ニ在サル事

○第十二號 (二月十日)

第八號ヲ以布達相成候港内取締規則第十八號ヲ以公布相成候地所質入書入規則第二十五號ヲ以公

布相成候統獲規則ノ儀人民權要ノ事ニテ速ニ一般觸示可申ノ處萬一傳寫ノ間誤字脱字等ニテ御趣

意取違候テハ不相成ニ付便宜重刻致シ且僻土人民ノ目慣レサル文字等ハ假名ヲ施シ具ニ了解相

成候様取計可申尤爾后人民緊用ノ條件或ハ速ニ布達可及事件等ハ見計前書ノ通取計不苦候事

○第十三號 (二月十二日)

生絲ノ儀ハ本邦最優ノ名産ニテ近來外國輸出盛大成御國內一般ノ潤澤モ不少候處間ニハ製造杜

撰ニ涉甚敷ハ濫製詐偽ノ所業イタシ候者モ有之趣到底御國損ヲ招候基ニテ不容易事ニ付此程取締

方規則御頒賦相成候次第然ルニ今般橫濱湊及ヒ國々生絲賣買人并製造人共協議ノ上改會社取設ノ

儀別紙規則ヲ以申立令免許候間開港場及各地方便宜ノ場所ヲイテモ夫々同様會社取設專ラ詐偽ノ

舊弊矯正シ眞實之享利ヲ興シ候様精々注意可有之依之改會社規則相添此段相達候事

第九十五號查看

七年大藏省第四十三號達ニ依リ消滅

十年第三十七號布告ニ依リ消滅

(別紙)

生絲改會社規則

夫生絲者本邦最上之名産交通之享利ヲ得ル品ナレハ各注意シテ其業ヲ勉勵シ精製スヘキ處頻年貿易盛大ニ開ケ輸出夥多ナルニ從ヒ粗製濫造ノ弊ヲ生シ品位次第ニ下劣シ終ニ名品ノ聲價ヲ滅却シ商賈或ハ破産ニ至ルハ豈慨歎ニ堪ヘサランヤ因テ同盟結社シ同業ノ方策ヲ立シカ爲メ製作場於テハ殖産ノ眞理ヲ盡シ開港場オイテハ製作ノ精粗ヲ改從來ノ弊害ヲ矯正シテ其蕃殖賣買トモ眞實ノ取扱ニ歸シ一般ノ公利ヲ起サンコトヲ謀リ茲ニ國々諸方ノ生絲惣代之者ト協議シテ左ノ規則決定セ

明治六年一月十日

生絲改會社

生絲改會社規則

第一條

一生絲之儀は國內賣買海外輸出用共都而大藏省より下渡之結紙其地方之生絲改會社かゝるて製造人々分賦ハシ以條製造人之結紙之國所之名面を記し以押印ハシ以提造又之番長手造其餘都而一ト結每ニ結以用其製造人押印無之品之賣買致問敷事但改之節會社にて改濟之押印可致事

第二條

一開港場生絲會社かゝるてハ右結紙之其地方生絲會社之押印と證と一相改可申事

第三條

一右結紙之儀之御規則之代價を以兼而其地方之會社より其本管廳之相納可申付生絲製造人より夫々取立可申事

第四條

一右結紙無之生絲賣買御禁制ニ付て之會社中之もの取引不致之勿論若違犯之者有之ハ其品取上ケ其地方御廳之可申立事

第五條

一是迄開港場會社ハ加入したる賣込問屋と諸國取引のものと同様に會社の仲間と可相成事

第六條

一諸國之會社ハ海外輸出之爲開港場之差出候品は開港場會社又ハ其會社之加入したる賣込問屋之可差出事

第七條

一前條結約之上ハ若諸國會社改印無之荷物開港場會社又ハ會社ハ加入したる問屋にて取扱或は爲替金等送り商賈之世話いたし者ハ會社より相當之罰金可取立事

第八條

一若又諸國會社之加入之者開港場會社又者會社之加入したる問屋の手を不經開港場會社に加入せざる他之商人ハ荷物等送りものハ其所之會社より相當之罰金可取立事

第九條

一生絲海外輸出いたし分ハ各開港場會社かゝるて改を受可ヤ尤改濟之上若直組不相成節は國內用以引戻しハとも荷主之勝手たるヘク其節手数料之半高差戻一可申事

第十條

一右改濟之生絲濫製等之不正有之ハハ開港場會社かゝるては産出之地方之會社之掛合推窮之上其會社より至當之罰金可取立且地方之會社かゝるては其製造人より罰金取立可申事



第十一條

一貿易品の相場物に而輸出之遲速に寄多分之損益等も有之儀に付開港場會社おるて改方目利並取扱方手馴しもの抱置精々手操之上改方致し荷主之便利に相成儀様注意可致事

第十二條

一近來二つ取と唱い器械専ら流行いたし賣人にて二口つゝ引揚いの弁利に相見い得共自ら手配届兼い場合も有之譬の繭五つ付けに而挽はしめい内三つ付二つ付に切落い共其儘挽立い故絲むら相生い勿論大棒え繰返しに節に至り極めて切れ口多く相成其都度く繋留い手敷をいとひ打付揚に致しい故絲口散亂線方惡數相成畢竟杜撰之製方どの申なから器械之粗拙より起りい弊ニ有之い間自今二ツ取之器械と廢し一ツ引と相改且大棒え繰揚い節口叮嚀とほなき節一不立標ひすい先を缺にて切可申且又直取と唱いて繭煎器より直ニ大棒え引揚いもの有之簡易之製方ニ相見い得共煎水絲筋と糊着し繰返しに不相成故是又可爲廢止且絲挽立方之儀と折と水と替へとし先より終り迄太細のむらなく引立引水よくく乾し可申別而雨天之節と大棒え引揚火にて干し濕氣無之様可致事

但從來手引にて製造し來い向い是迄通勝手たるをり事

第十三條

一都て繭を賃引に爲致いもの其製造人名印と爲押可申事

第十四條

一結紙巻止めり小麥粉其他重目に相成いものを禁止し米糊にて糊代一分位之内に付け巻立可申事

第十五條

一元結び之儀は百本に付目方六匁を限可申事

第十六條

一長手造需造結ひ絲之儀は赤絲淺黃絲之外用ひ申問敷事  
但不結絲御印紙卷紙に差支い問小結いたし賣買可致事

第十七條

一上繭と表掛に玉蛹等を裏掛にし或り小棒より大棒え引揚い砌二筋一所に揚込其外前件に書載たる不正之製造いたしもの有之いは、其品何方え賣渡い共製造人え相戻し代價の勿論至當之罰金爲差出可申事

第十八條

一出がら繭生皮芋皮ムキ屑絲山繭等の毎箇に上包に御規則之通御印紙張用ひ木札に製造人之國所名面記し會社之改を受可申事

第十九條

一開港場生絲改會社手敷料

一 生絲

一 裏斗絲

一 眞綿

一 生皮芋皮ムキ

一 屑絲

一 繭 山繭

一 出がら繭

一 玉絲

右品々熟れも目利之上時々之相場を以代金ニ見積り千分之五請取可申尤豊凶ニ寄其品出港之多寡も有之且會社建築其他諸入費ニ充否之目途不相立依而試験之上實際ニ應じ猶増減可致事

第廿條

一各地方改會社おつて前書之規條ニ準照し取扱可申尤改手数料之儀ニ案より會社諸入費ニ充いた光之儀ニ以條精々省略いたし當分手數料として千分之三取立試験之上増減可致事

第廿一條

一右會社諸入費元拂精勘定之儀ニ年々十二月限御支配應之差出し検査を受可申事  
右之通規則相定し事

明治六年一月

生絲改會社

前書結社規則開屆候條后来此規則改正又者追補等之儀有之候節者其都度申立可請許可者也

明治六年一月十二日

租稅頭陸奥宗光

○第十四號 (二月十三日)

三府六十六縣

總百四十九號參看

舊府藩縣從來公廨官物ニ屬スル不用ノ諸器具夫々入札ヲ以賣拂代金上納別紙計表ニ書載一切關係ノ書類相添當省へ進達可致尤右運輸賣却ニ關スル諸費ノ儀ハ第二常備金ノ内ヲ以テ一時繰替儘追テ精細勘定書ヲ以テ請取方可申出事  
但陸軍省所轄ニ屬スル品類ハ本文之外ナルヘキ事

別紙計表

舊府藩縣名	品物	代價

計總

○第十五號 (二月十四日)

三府六十六縣

舊藩々城郭内士族邸地之儀ハ是迄處分見合置候處今般各城廢存御決定ニ付テハ廢城之分ハ一般沽券稅施行之積可取調存城内居住之分ハ當分拜借地ト看做シ各邸步數丈量之上近傍之沽券ニ見合相當之稅金賦課可致候條夫々取調可伺出事

○第十六號 (二月十四日)

三府六十六縣

舊諸縣管轄飛地ニ居住之士族卒ハ新置所轄ノ府縣貫屬タルヘク旨辛未十一月中公布ニ相成候處右人名祿高共今以不屈出向有之目今祿高調方差支候條別紙雛形ノ通取調至急可申出事  
貫屬身分異動屆ノ儀舊縣名祿高等認出無之向モ有之同姓名之者有之候節調方差支候間自今舊縣名祿高共書認可差出事

(別紙)

舊何縣貫屬 飛地分 割地

居住之者

改正高現米何程

何之誰

右同斷

何之誰

右同斷

何之誰

○第十七號 (二月十八日)

三府六十六縣

但辛未年中祿高帳差出候後家督相續改姓名等ノ者有之候ハ、舊名肩書ニ致シ可申事  
第十九号ヲ以御布告相成候云々之内稅則又ハ職業ニ關シ候罰金科料ノ名目ヲ以取立候分共總テ司

十年内務省乙第十  
二號總ニ依テ消滅

第六十九號ニ依リ  
消滅

七年內務省乙第四  
十四號ニ依リ消滅

第八十號參看

七年一月十日大政  
官達ニ依リ內務省  
三編ノ

法省へ再相納ト有之候ハ明治六年一月ヨリ取立候分ニテ昨壬申十一月中迄ニ府縣聽へ取立候分ハ  
同年御勘定仕上ケ可粗込品ニ付租稅察へ上納可致儀ト可相心得候此段相達候事

○第十八號 (二月十八日) 三府六十六縣

是迄官舎邸宅等地所共拂下相成候節建物代金ハ土木寮地所代金ハ租稅察へ相納來候處以來總テ租  
稅察へ相納可申尤建物代金ハ外筆ニ認可差出此段相達候事

六十六縣

各地方官於テ其管内出張所又ハ官員一時出張先へ差立候御用狀人足貨之儀ハ管内總高割ヲ以民費  
ニ可取計旨壬申第五十四號ヲ以御布告相成候處其後相達候出納勘定帳小圖離形ニハ管外へ差立候  
分ニ管内繼立貨ハ民費分課之積書候處右ノ廉ハ取消候條御用狀御用物等差立方管外ニ差跨候分  
ハ管内ト雖モ官費相立候儀ト可相心得此段相達候事

○第二十號 (二月二十三日)

三府六十四縣

先般城塞等ノ儀ニ付相達候次第モ有之候處各地方舊城郭ノ内別紙陸軍省所轄ヲ除ノ外總テ當省ノ  
所轄ニ被仰付候條各管内ニ有之候城郭陣屋練兵場等其他從前軍事ニ屬セシ分ハ反別建物ノ廣狹並  
ニ樹木等迄詳細取調繪圖相添來ル三月十五日マテ無遲延可届出此段改テ相達候事

但陸軍省ニテ兵隊彈藥差置即今難引拂場所ハ追々領収ノ運ニモ可至候得共本文反別等ノ儀ハ將  
來着手ノ目途ニモ相係候ニ付右等ノ場所モ無洩取調可申尤在留ノ官員へハ其趣打合不都合無之  
様可取計事

(別紙)

表 紙

第一號

諸國存城調書

第一軍管

一東 武藏國

一相 相模國

一小 田原國

一駿 駿河國

一靜 甲斐國

一山 梨國

一佐 下總國

一上 倉國

一木 上總國

○一木 更津

東京府

足柄縣

靜岡縣

山梨縣

印旛縣

木更津縣

第十一年陸軍省通之  
以第五十五號達之  
以陸島城廢止

明治六年二月 大藏省 第二十號

○一青	一盛	○一水	一若	一福	一仙	第	一高	一高	○一新	一字	一水
陸	陸	陸	陸	岩	陸	武	上	田	越	下	常
森	岡	澤	松	島	臺	軍	野	野	後	野	陸
與	中	國	代	國	國	管	國	國	國	國	國

青	岩	水	若	福	宮	群	柏	新	宇	茨
森	手	澤	松	島	城	馬	崎	瀨	都	城
縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	宮	縣
縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣

八三〇

明治六年二月 大藏省 第二十號

○一敦	一福	○一七	一金	○一岐	一松	一豐	一名	第	一秋	一山
敦	井	越	能	加	美	信	古	三	尾	羽
賀	前	尾	澤	阜	本	橋	屋	張	軍	後
國	國	國	國	國	國	國	國	管	國	國

同	敦	同	石	岐	筑	同	愛	秋	山
敦	賀	同	川	阜	摩	同	知	田	形
縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣

八三一

一十七年宮内省甲第  
一號告示ヲ以テ二  
縣城ヲ離宮ト爲ス

第 四 軍 管	第 一 大 阪 府	第 二 兵 庫 伊 國	第 三 和 歌 山 城 國	第 四 近 江 國	第 五 大 津 伊 勢 國	第 六 播 磨 國	第 七 因 幡 國	第 八 鳥 取 前 國	第 九 但 馬 國
大 阪 府	兵 庫 縣	和 歌 山 縣	京 都 府	滋 賀 縣	同 縣	三 重 縣	飾 磨 縣	鳥 取 縣	岡 山 縣

第 五 軍 管	第 一 廣 島 國	第 二 出 雲 國	第 三 松 江 見 國	第 四 石 見 國	第 五 濱 田 防 國	第 六 山 口 岐 國	第 七 九 龍 國	第 八 高 松 國	第 九 阿 波 國	第 十 德 島 國	第 十一 土 佐 國	第 十二 須 磨 浦 國	第 十三 伊 豫 國	第 十四 宇 和 島 國	第 十五 六 軍 管
豐 岡 縣	廣 島 縣	島 根 縣	濱 田 縣	山 口 縣	香 川 縣	同 縣	名 實 縣	神 山 縣							

- 一 肥 後 國
- 一 熊 本 國
- 一 日 向 國
- 一 薩 摩 國
- 一 鹿 兒 島 國
- 一 豐 前 國
- 一 小 倉 國
- 一 豐 後 國
- 二 千 歲 國
- 一 筑 前 國
- 一 福 岡 國
- 肥 前 國
- 長 崎 國
- 一 對 馬 國
- 一 嚴 原 國

- 白 川 縣
- 鹿 兒 島 縣
- 小 倉 縣
- 大 分 縣
- 福 岡 縣
- 長 崎 縣
- 佐 賀 縣

○印ノ分ハ現今城郭ナシト雖モ新規取建相成ヘキ箇所

○第二十一號 (二月二十四日)

今般御布告相成候金子請取金銀貸借地所買賣買入書入請負諸約定等人民互ニ取引致シ候證文手形

七年大藏省第七十九號送ニ依リ消滅

書付類ヲ以往々證書ニ貼用シ致候印紙ノ儀ハ證書印紙ト唱呼可致事

一 賣捌所へ相渡候印紙請取方ノ儀ハ兼テ差向相渡候員數御達ニハ相成居候得トモ管下ノ廣狹景況

ニ寄凡積員數適宜取調印紙員數金高品譯等記載何ケ度ニモ請取方租稅察へ可申立事

但最初請取方ノ儀ハ來ル四月限り可申立事

一 賣捌所ノ儀願出候ハ、規則ノ通相心得身元相應ノ者ニ候上へ申付別紙案文ノ通請書可申付候事

一 賣捌所人員取極申付候ハ、管轄限リ一人別名前帳巨細取調來ル四月限租稅察へ差出可申事

但人別帳ハ美濃紙片面二名宛相認可申事

一 印紙賣捌ノ儀府縣便宜ニ寄リ本廳又ハ支廳等ニテ賣捌候テモ不苦候事

一 證書印紙請取返上トモ府縣長官名印ノ書付ヲ以可申立事

一 本文印紙御發行相成候ニ付テハ各地人民未タ不馴ノ儀ニモ有之間御規則面等人々了解致シ候様

深切告諭可致候尤地方官於テ難解條件モ有之候ハ、此節ヨリ何ケ度モ租稅察へ打合ノ上六月一

日ヨリ各地一般普通發行ノ節差支無之様注意可有之事

(別紙) 證書印紙賣捌人請書案

御請書

今般證書印紙賣捌方願ノ通御許容ノ上左ノ通被 仰渡候

一 證書印紙ハ其時々員數申上次第御渡相成候ニ付月々變高並賣捌代金其外手数料差引一ヶ月限巨

細取調御勘定帳差上候様可仕尤賣捌代金ハ御差圖次第上納可仕候事

一 平常不取締無之様大切ニ取扱候ハ勿論非常ノ節ハ別テ入念證書印紙並賣捌代金トモ第一ニ持退

候様可仕候萬一水火盜ノ難等ニ逢候トモ一切引受辨納可仕候事

第五十七號ヲ以テ  
請書案改正

但非常ノ急出水又ハ烈風大火等ノ難ニ逢候節ハ其情實詳細相認メ遠ニ其段奉訴御差圖伺候様可仕事

一印紙賣捌候爲手数料定價四分引（即定價百圓ナハ四圓也）可被下置旨ノ事  
一印紙賣捌ノ儀ハ御規則ノ通相心得餘テ帳簿仕立置日々賣渡候員數並ニ人名地名月日等マテ相違無之様相記シ可申候尤買請候モノノ内不用相成返却致シ度旨申出候節ハ員數其外等賣渡候節ノ記帳ニ突合相違無之上ハ御規則ノ通代金四分引ヲ以買戻候様可仕事  
右被 仰渡ノ趣承知奉畏候依之證人連印ヲ以御請書奉差上候以上

年號月日	府管下
	國郡
	村宿町
賣捌人	誰印
同	誰印
請人	誰印
同	誰印
同	誰印
同	誰印

十月十八日太政官

府令參事殿

三府六十四縣

○第二十二號 (二月二十四日)  
當省布達書類同達方ノ儀是マ時々際寫附下致來候處以後其都度活字ヲ以上木ノ上東京出張各廳へ十部ツ、相渡可申尙部内一般人民ノ用ニ供シ度候向ハ民費買上ケノ積ヲ以各區戶長等ヨリ直ニ東京日報社へ引合可申事 但來ル三月七日ヨリ施行候事  
○第二十三號 (三月五日)  
三府六十六縣

八年第三十二號  
告ニ依リ消滅同内  
務省丙第四號送參

昨壬申以來御設置相成候種製造大總代月給及旅費等之儀ハ壬申第二百四十二號御布告ニ基キ常備金ヨリ繰替仕拂置右請取方之儀ハ壬申年支給之分ハ是迄之通相心得本年一月ヨリ支給之分ハ租稅察へ可申立候此段相達候事

各府縣

○第二十四號 (三月八日)  
御詮議ノ次第有之ニ付各府縣貫屬現今居住ノ場所場所壬申十月朔日ヨリ同十一月十五日迄ノ上米平均相場ト當一月一日ヨリ二月十五日迄ノ上米平均相場ト兩様共巨細取調來ハ四月三十日限可差出尤取調出來候向ハ右期限前至急差出可申事

但現今貫屬之者居住ノ場所ニテ相場立無之向モ有之候ハ、其最寄ノ相場取調可申出事

○第二十五號 (三月九日)  
北亞米利加州において馬病傳染盛に流行の處馬醫「カマツナチ」多數の病馬治療經驗之上別紙藥方申越候ニ付布達ニおよび候各管下右病症有之節ハ兼而注意速に施行可致事

(別紙)

現今北亞米利加州において盛んに流行する馬病を世人多く稱して新病とのみ唱へていた其名を配稱せざれども全く精く索求せざるより然るものにて已に歐州に於いて此如き病近來屢々流行せしか爲よ、インフルンザ、ヂステンバ、カタラル、ヘーナル、或ハ、イバアチミツク、カタラ、或ハ、イビザチツク、ラレンヂナス、等の病名との配せり然るも現今本州に流行する此病の徵候は困り又別紙の新聞によりて考ふれば則ち之を、イビザチツク、ラレンヂナス、と名けて允適なるへし是さて屢々流行せしといへども當時本州に於いて流行更盛なるか如き例はまた之をわらす大凡平均して毎百の内九拾五迄は必ず此病を受へき割にて之に感せざるもの甚稀なり百五十頭の馬を繋ける厩にて盡く之に感せし事に有しなり其病の輕重は馬によりて異なれども必ず多少の衰弱

十九年農商務省令  
第十一號ヲ以テ廢止

を發せしめ快後久く之を使用しかたし此病源の一種の惡氣ありて空氣の中に混合しこれか爲に腐敗したる氣と呼吸するより生ずるものにて喉道甚渴燒するの苦痛あり此病に感ずるはしめは乾咳頻連にて氣喉燥衝し鼻膜鈍色と帯ひ口中粘熱し脈度殊に速なれとも其動力甚弱なり其上物と飲込みかたけれり飲食する事と好まず氣管を少かに推す時の必ず咳嗽と生ず外皮よかよひ四足の端の平常の温度を保てども全體の衰弱甚しく少か三十六時間に躍り出し之を圈外に導く時の動もすれの斃んとするありさまなり鼻より黄なる物を流し呼吸益急迫して其病症外貌より見れり唯肺臓の病より然るゝ似たり其病に苦痛する時間更に長短ありて一定の期なれども之に適する用法を施さすんのか八九は氣道の渴燒燥衝するに堪へず卒に死に至る事あり仍て此病を看し方劑を施用する方法を左に條列せむ

第一條 適宜の量と料り麥皮を温め和して之と飼ふへし

第二條 燕麥の粉を和し煎煮したる稀薄の飲物を桶に入れ之を掛置を佳とす

第三條 之を飼ふに強て喰ひしむる事を要せず唯馬の好む處に注すへし

但はしめよは之を嫌ふ事ありども飲物を與へざるか爲に終に必ず之と好んで飲ひへし

第四條 底中清淨沮滯なく空氣更に流通するを要す

第五條 成丈け底圈の廣き所に之と繋ぐへし

第六條 底圈を清淨に洗掃しアンモニア氣の滞在なき事と注意すへし

第七條 毎日底中にコロライトナフライム、カロリックアッシュの如き傳流を避る藥品と濯撒すへし

第八條 稍食物を欲し聊か健康を復するまでの適宜に温ならしめ少しも運動せしむること勿れ

第九條 健康逐次に恢復するに隨て距離を増し之をして日々兩三小時間運動せしむる事を要す

第十條 我か療法は發病の折馬の兩耳間より氣管の第二輪或は第三輪の透まで一種の刺撃音を塗り若氣管の内部にて何か粘着する響きある事と覺る時は之と塗り擴け其病の廣かりて丈け一面に塗着し其刺撃力の後るゝ憂なき様に手を盡すへし

〔スピリッツ、チフ、テレヒンツ〕

六オンス

〔リツクル、アンモン、ホルト〕

四ドラナム

〔バルウエリズド、カプシガ〕

三ドラナム

此三品と環中に入れ置供用せんとする時の之と搖動して壁に和する事を要す

第十一條 此藥の日々兩度用ゆへし

但其功驗の刺撃力なる故に之と塗るより凡十分時間の馬少し苦しけなる様子と顯して動もすれり荒立人に害を爲すの恐われり預め之に注意し之を圈内に堅く繋ぎ置くへし

第十二條 病に感して二三日間少しも食を取らずに續く時の善く用意したる飲物を口中に渡さ入る事を施しても害なし然れども成丈飲物と與へざる事を緊要なりとす

第十三條 左の丸藥を用ゆへし

〔ハルウエリフド、アンモン、カルボチート〕

二オンス

〔同〕

一オンス

〔同〕

一オンス

〔同〕

四オンス

此等を雜せ合せ水に和し十粒と分ち朝夕一粒ツ、與ふへし

第十四條 逐次に恢復し自然に食を求めり之を運動させる事能はるなれば此丸藥を廢し左に合



方の散藥を十二服ふわかし一服ツ、毎夜飲物に和して之に與ふへー

〔バルウエリズド、ニトテト、チフ、ゴッダリス〕

三オンス

〔同〕 ザアフル、フロウルス〕

二オンス

〔同〕 シンシヘリス〕

一オンス

第十五條 病に誠に重き馬にハ宜しく鼻膜を温めて以て黄なる鼻涕を流さしめたるために又蒸劑を施す事を要す

但鑲屑を桶に入れ之に熱湯を澁き其湯氣の中に馬鼻を温蒸すへし

○第二十六號 (三月十日)

各府縣實屬家祿並賞典米渡方ノ儀年々歳末ニ至リ凡積諸費一同申立請取可申願序ノ處本年第三十四號公布ノ通以後ハ其年十二月ニ取纏其年貢納ノ新穀ヲ以渡方可取計候條年々十月中ニ實屬家祿賞典高等巨細取調別段請取方可申立尤右三十四號公布但書ノ通昨壬申年ノ祿ヲ當三四月月中ニ取纏可相渡分並當年相當ノ祿ヲ當年季毎ニ繰上相渡候向トモ從前渡方ノ次第柄右限引分ケ詳細取調別途受取方早々可申立事

但本年分家祿並賞典米トモ既ニ請取並昨今同中ノ向モ本文同様取調可申出候事

○第二十七號 (三月十二日)

府 縣

杉山安親翻譯ノ牧牛說必要ノ書籍ニ付檢閲ノ爲メ二部ツ、令頒付候條此段相達候事 (牧牛說略ス)

○第二十八號 (三月十二日)

府 縣

舊藩々製造紙幣ノ内差向五錢以上ノ分交換相始五錢未滿ノ分ハ追テ交換迄押印ノ上當分令通用候積就テハ新貨相當ノ印章壹種ニ付五顆ツ、相渡候段去壬申八月廿八日官藩幣幣交換並五錢未滿小札押印手續書ヲ以相達置價格比較表出來次第追々印章相渡候處五錢未滿ノ小札多且管内手廣ノ場

所壹種五顆ニテ押印ニ年月ヲ經候儀ニ立至候テハ不都合ニ付申出次第増印可相渡條現今小札高並印章増員數共至急取調可申出候此段相達候事

○第二十九號 (三月十二日)

府 縣

舊藩藩縣ヨリ紙幣ニ關シ候願同届ノ類去壬申二月廿六日元紙幣寮類燒ノ節燒失ニ付寫取揃可差出旨同月晦日相達置候處于今不差出向モ有之右ハ舊藩縣ヨリ引渡ノ書類寫取差出候儀ニテ遲滯可致謂無之不都合ノ事ニ候條若書類引渡方不行届ノ分ハ舊官員取札已十二月以來壬申二月廿五日迄紙幣ニ關シ候諸願同届并當省へ差出御沙汰指令濟ノ分共都テ寫取揃往復ヲ除日數十五日ノ内當省へ可差出猶此段相達候事

但差出濟ノ向ハ何月幾日差出候段斷書可差出且舊旗下ノ分ハ當時管轄ノ府縣於テ取集可差出事

府 縣

○第三十號 (三月十二日) 舊藩々所有籍大砲是迄陸軍省所轄ノ内現今必用ノ外今般當省引受相成候儀ハ頃日陸軍省ヨリ相達候通ニ候就テハ右砲砲請取ノ儀岡田平藏へ申付當省在印ノ證書一枚右同人へ相達其時下ハ差遣候條若候ハ、諸事不都合無之様取計右證書ト引換現物速ニ可致交付候此段相達候事

但現物善在ノ場所ヨリ便宜迄迄ノ間陸路運輸ニ付テハ岡田平藏ヨリ願出ノ趣モ候條人足遣シ方等諸費用可成丈ケ相減候様可致且縣官立會請取人ト共ニ現物掛改致シ精貫目方明細書取調引渡濟次第右證書ニ相添可差出候事

府 縣

○第三十一號 (三月十四日) 保護稅說附錄今般割削相成候ニ付三部宛令頒布候條此段相達候事 (附錄略ス)

但於書肆發賣差許候事

府 縣

○第三十二號 (三月十四日)

府 縣

七年第十九號布告  
ニ依リ消滅

明治六年三月 大藏省 第二十九號 第三十號 第三十一號 第三十二號

蠶種原紙ノ儀規則ノ通賣捌所於テ一定ノ代價ヲ以テ賣下ケ候ニ付テハ養蠶家ノ内ニハ代價即納難  
澁ニ相心得候者モ可有之哉ニ候得共一家ノ產業ニ候上ハ兼テ夫等ノ覺悟可有之ハ勿論ノ儀ニ付代  
價引換ノ積兼テ管下へ不洩様觸示シ置可申此段相違候事

○第三十三號 (三月十四日)

府 縣

洋銀并米穀算數ノ儀月計帳ハ當四月ヨリ年計帳ハ明治六年分ヨリ別紙規則ニ照準計算可取計此段  
相違候事

(別紙)

一諸勘定洋銀算數ノ儀是迄何弗何十何セント、相記其以下ハ數字而已用來候處以來右數字ノ分ハ  
四捨五入ノ法ヲ以テ相省キセントニ止メ可申事

一右同斷米穀算數ノ儀モ勺才マテ相用來候處以來ハ納拂共總テ四捨五入ノ法ヲ以テ合ニ止メ可申  
候尤些末ノ品種ヲ合計スル數ニテ自然計算上難切捨分ハ勺才マテ相用ヒ合計高ハ前同様ノ法ヲ  
以合ニ止メ可申事

右之通確定候事

明治六年三月

大 藏 省

○第三十四號 (三月十五日)

府 縣

當省并開拓使發行爲換座三井組ト記載致シ候正金兌換證券ノ儀一圓以上ノ分堅牢黒肉ヲ以更ニ何  
圓ノ捺印致シ候等兼テ相違有之候處右札諸國へ散布ニ付東京大阪等而已ニテハ所持ノ者迷惑不少  
且抄取兼候ニ付此度三井組へ申付同組出張先於テ加印セシメ候間其管下最寄最寄聊ニテモ所持ノ  
者ハ綴ノ手數ヲ不厭速ニ右出張先へ可申出旨末々迄及布達無洩加印相調候様厚世話可致事

○第三十五號 (三月十九日)

府 縣

十年大政官第三號  
止ヲ以テ検査察殿

各府縣ノ内官費ヲ以テ外國人雇入有之候向ハ條約書寫至急検査察へ可差出候且向後條約更正致シ候  
歟亦ハ新規雇入ノ節モ同様其時々無遺漏差出候様可致此段相違候事

○第三十六號 (三月二十二日)

府 縣

舊藩々製造紙幣ノ内差向五錢以上ノ交換五錢未滿ノ分ハ追テ交換迄押印ノ上當分令通用候ニ付新  
貨相當ノ印章相渡候ニ付テハ去壬申八月廿八日相違候官藩楮幣交換并五錢未滿小札押印手續書ノ  
趣ヲ以テ取行中ニ可有之右押印相濟候上ハ早速報告書可差出ハ勿論ノ事ニ候得共若延延亦ハ區  
區之届方有之候ハ不都合ニ候條押印相濟次第取行候場所并始業卒業ノ月日取扱ノ人名等巨細ノ  
報告書へ別紙離形通ノ押印濟内譯帳相添早々可届出尤當省官員派出致居候場所へ打合ノ上可取計  
此段相違候事

(別紙)

用紙美濃界紙

離形

元何藩製造紙幣之内

五錢以下一厘以上押印濟内譯帳

一札數何拾何萬何千何百何拾何枚 金札

此新貨何万何千何百何拾何圓何拾何錢何厘

内

札數

此新貨

但各種同様記載可致以下同斷

但一枚金何程即  
何錢何厘

一札數 永札

此新貨

內 札數

但一枚永何程即何錢何厘

銀札

此新貨

內 札數

但一枚延何程即何錢何厘

錢札

此新貨

內

札數

但一枚錢何程即何錢何厘

總計札數

此新貨

右ハ元何藩製造紙幣ノ内新貨五錢未滿一厘以上ノ分御渡ノ御印章ヲ以價格比較表へ引合押印濟通  
用ノ分札數金高内譯等書面ノ通相違無御座候以上

明治六年 月 日

何縣令 連印

大藏大輔井上馨殿

府 縣

○第三十七號 (三月二十二日)

庚午四月以來諸道御用狀御用物確證有之跡拂人足賃ノ儀辛未七月迄ハ管轄府縣於テ取調同八月ヨ  
リハ驛村ヨリ直チニ驛巡察へ差出候様元民部省ヨリ相違候處今以等閑不差出向モ有之甚不都合ニ  
付庚午四月ヨリ壬申八月晦日迄ノ分無洩取調來ル六月三十日ヲ限取續可差出夫ヨリ及延引候分ハ  
不下渡候事

府 縣

○第三十八號 (三月二十二日)

官員月給渡方本年第七十五號御布告云々ニ付計算ノ儀全額三十分ノ一箇ニ不盡ノ數有之分ハ毛絲  
迄モ存シ置日數ニ乘シ其合計高ニ至リ四捨五入シテ厘位ニ止メ毛位以下ハ切捨渡方可取計事

府 縣

○第三十九號 (三月二十三日)

太政官五十六號ヲ以御布告相成候證券印紙ノ儀來ル六月一日ヨリ發行相成候ニ付テハ各所人民其  
最寄最寄買入候賣捌所ノ儀無差支様其以前取極置不申候ハテハ可及迷惑儀ニ付早々願人相糺免許  
可致ハ勿論ニ候得共自然其土地柄ニ寄願人等無之場所ハ戶長其他身元儘成者人撰ノ上申付差支無  
之様可取計事

一賣捌人ハ印紙渡方ノ儀金子引替ニ候ハ、申立通相渡可申若賣捌後金ニ候ハ、賣捌人一個ニ付印  
紙金高其身許ニ應シ百圓ヨリ三百圓限リ相渡可申事

但賣捌ケ後金ニテ印紙相渡候分ハ當人如何様ノ引負等出來候共上納金ノ儀ハ無相違辨納可致  
旨證人ノ證印爲致置可申候事

一賣下ケ候印紙代金ハ年々六月十二月兩度ニ租稅寮へ上納可取計事  
一賣捌人ハ印紙渡方并返納等ノ都合ニ寄二十五錢以上ノ分ハ大判ヲ二ツ切ニ致シ相渡又ハ請取候

明治六年三月 大藏省 第三十七號 第三十八號 第三十九號

太政官第四百十九號ニ依リ消滅

七年第八十一號布告同大藏省第七十九號ニ依リ消滅

第九號參看

テモ不苦候事

右之通相達候事

○第四十號 (三月二十三日)

府 縣

生絲ノ儀ハ本邦ノ名産民間有用ノ物品ニテ其利益不尠既ニ戊辰年元蠶絲改所ヨリ右渡世ノモノヘ取締ノ爲メ賣買免許鑑札相渡置候處生絲商人ノ内右鑑札所持無之者モ儘有之一般ノ取締ニ關シ不都合ノ次第且近來製方愈粗漏ニ流レ或ハ詐偽ノ所業モ不少名産ノ聲價ニ差懸不容易御國損ニ有之候間既ニ生絲製造規則モ御布告相成候得共猶賣買取引ノ間ニ於テモ舊弊存在ノ趣モ相聞候間爲取締更ニ生絲賣買鑑札相渡候條戊辰年相渡置候分ト引換可申若シ舊鑑札所持無之分ハ管下生絲商人一人別ニ不渡様相渡都テ別紙規則ニ照準取締可致事

(別紙)

生絲賣買鑑札渡方規則

生絲之儀ハ本邦ノ名産民間有用ノ物品にて其利益不尠既に戊辰年元蠶絲改所より右渡世のものへ取締の爲め賣買免許鑑札相渡置候處生絲商人の内右鑑札所持無之者も儘有之一般の取締に關し不都合の次第且近來製方愈粗漏に流れ或ハ詐偽の所業も不少名産の聲價に差懸不容易御國損に有之候間既に生絲製造規則も御布告相成候得共猶賣買取引の間ニ於ても舊弊存在の趣も相聞候間爲取締更に生絲賣買鑑札相渡候條戊辰年相渡置候分ト引換可申若し舊鑑札所持無之分ハ管下生絲商人一人別ニ不渡様相渡都テ別紙規則に照準取締可致事

明治六年三月

大 藏 省

規則

第一條

一生絲賣買渡世のものへ去る戊辰年後元蠶絲改所において鑑札相渡有之候處今度國內一般生絲渡世のもの其土地の摸樣ヲ寄取結たる會社中の者へ別紙雛形の生絲賣買鑑札更ニ大藏省租稅寮より可相渡候間其會社の管轄廳において取調收與可致事

第二條

一右會社へ加入いたし候者の其會社より其管轄廳へ申立管轄廳において聞届生絲賣買鑑札相渡當人國郡村町名前等巨細取調鑑札料相添第七條ニ掲る鑑札仕譯書差出候節一同可申立事

第三條

一生絲賣買鑑札相渡候に付ては鑑札壹枚ヲ付金五拾錢ツ、爲鑑札料上納可申付事  
但戊辰後元蠶絲改所において相渡候鑑札所持の者は鑑札料相納るに不及新鑑札相渡舊鑑札は其廳へ引揚燒捨當人國郡村町名前とも巨細取調可申立事

第四條

一生絲賣買鑑札萬一燒失流盜難等にて失ひ候儀有之其段申出候ハ、事實取調の上新規願受候節の鑑札料半數上納可申付事

第五條

一生絲賣買鑑札願受候もの向後廢業致度候ハ、其管轄廳へ申立管轄廳において聞届鑑札取上げ第七條鑑札仕譯書差出候節可申立事

第六條

一賣買鑑札ハ一名壹枚に限り候儀ニ無之素より賣買上必携の品に付手代其外多人數召使賣買いたし候者の願に寄何枚にても可相渡尤鑑札料の儀ハ第三條の通收入可致事

第七條

十年内務省乙第四十八號達ヲ以テ廢止

第九十一號達